

吉田古墳Ⅰ

史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書

奈良文化財研究所



201055830

2006

水戸市教育委員会

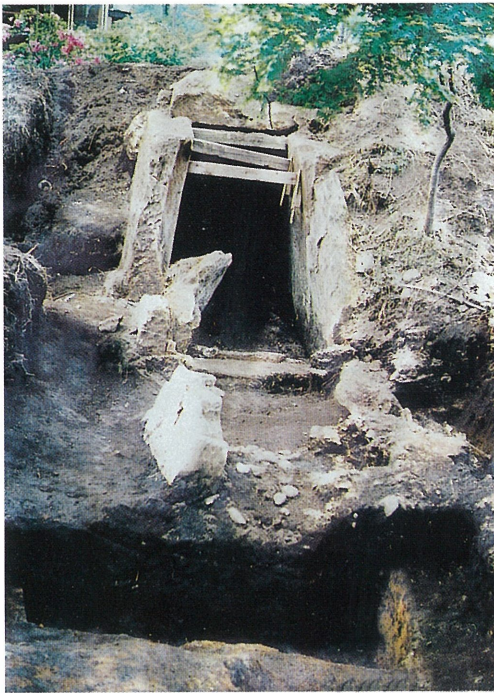
口絵写真1 線刻壁画



口絵写真2 墳丘と石室・周溝



現在の墳丘（南から）



石室（南から）



周溝（南から）



吉田古墳 I

— 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書 —



文化庁
寄贈

2006

水戸市教育委員会

序

水戸市街地の南に位置する吉田地区は、常陸三の宮の格式をもつ吉田神社、天台宗の名刹として名高い薬王院、江戸時代の豪農の暮らしぶりを今に残す綿引家住宅など、多くの歴史遺産が残されている、市内でも貴重な地域であります。

かつてはのどかな田園であったこの地は、水戸駅南開発や下市地区再開発、さらに吉田台地整備など一連の開発計画をうけて急激に市街地化が進み、町の景観はこの四半世紀でおおきく変貌を遂げました。地域に住む住民の皆さまにとっては、吉田地区のもつ豊かな緑と歴史的景観をできる限り残しながら、地域の活性化をはかっていくことが大きな課題となってきています。

吉田古墳は、以上のような歴史をもっている吉田地区に位置しています。大正時代に発見されたこの古墳は、石室に当時の武器・武具を描いた「装飾古墳」として学界の注目を浴び、大正11年に国の史跡に指定されました。そして、全国から多くの研究者が来水して調査・研究がなされ、日本の装飾古墳のなかでも重要な位置付けがなされてまいりました。

このような中、水戸市ではこの貴重な歴史遺産を多くの皆さまに活用していただけるよう、吉田古墳を本格的な調査のうえ、整備していくことになりました。

本書は、この史跡整備に向けて実施した最初の調査報告書です。また、はじめて発掘調査がなされた昭和47年の調査成果も、あわせて掲載いたしました。

これから複数年次にわたって行われる調査の一端を本書で読み取っていただき、地域の歴史をより豊かなものにしていくとともに、新しいまちづくりの中にこの歴史が活かされることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、御理解と多大な御協力を賜りました地域住民の皆様をはじめ、関係各位に心から感謝の意を表します。同時に、本書が学術研究資料として十分に活用され、また、市民の皆さまが文化財の保護と郷土の歴史に、深い御関心と御理解を寄せていただく一助となることを期待して、序の言葉といたします。

平成18年3月

水戸市教育委員会

教育長 鯨 岡 武

例 言

- 1 本書は、国指定史跡吉田古墳の史跡整備計画に伴い、水戸市教育委員会が国庫補助金と県費補助金を受けて実施した、吉田古墳群第1号墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査は水戸市教育委員会が主体となって実施した。出土品の整理作業は水戸市埋蔵文化財整理センターで行った。
- 3 遺跡の名称、所在地、第1次・第2次調査ごとの調査面積、調査期間等は以下のとおりである。
遺跡名 吉田古墳群（第1号墳）
所在地 茨城県水戸市元吉田町343-1, 347, 352-2
第1次調査 調査面積 113.5㎡
調査期間 1972年4月28日～1972年5月8日
第2次調査 調査面積 177.07㎡
調査期間 2005年10月3日～11月11日
整理期間 2005年11月12日～2006年3月24日
- 4 発掘調査の組織は別記のとおりである。
- 5 発掘調査は文化庁文化財部記念物課・茨城県教育庁文化課の指導のもと、第1次調査を伊東重敏（故人）が、第2次調査を関口慶久が担当した。また第2次調査の測量調査は、小野寿美子・中尾麻由実の両氏（筑波大学大学院後期課程）に依頼した。
- 6 第1次調査に伴う整理は、瓦吹がこれを統括・担当した。
第2次調査に伴う整理作業は、川口武彦・関口・新垣清貴が担当し、関口が統括した。遺構の整理・図化・写真撮影は関口が行った。遺物の実測・トレース・観察表作成は川口・関口・新垣が、拓本・写真撮影・カウントは関口が行った。
- 7 第1次調査の実施にあたり、壁画の写真撮影を小野信一氏（水戸市美術家連盟・当時）、シリコン樹脂による型採りを木津一夫氏（二紀会茨城支部長・当時）に委託した。
- 8 本書の編集は関口が担当し、執筆は瓦吹・川口・関口・小野・中尾が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
- 9 出土した遺物および原図・写真類は、水戸市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の方々および機関より御指導・御協力を賜った。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。
青山俊明 石岡憲雄 今尾文昭 大津郁子 大塚初重 大森信英 乙益重隆（故人） 加藤高蔵
加藤晴代 川崎純徳 黒澤彰哉 郡司良一 斎藤弘道 坂井秀弥 澤畑 実 清野孝之 舘野
孝 玉田芳英 生田目和利 西宮一男 日高 慎
（財）茨城県教育財団 茨城県教育庁文化課 荻谷建設株式会社 文化庁文化財部記念物課
有限会社三井考測 水戸芸術館 水戸市立博物館 明利酒類株式会社

調査組織

- 第1次調査事務局** 柴沼 陽（水戸市教育委員会教育長）
桜井秋雄（水戸市教育委員会教育次長）
佐川富司（水戸市教育委員会社会教育課長）
古橋貞夫（水戸市教育委員会社会教育係長）
調査担当者 伊東重敏（水戸市教育委員会社会教育課主幹）
調査員 瓦吹 堅（國學院大學）
山下房子（國學院大學）
- 第2次調査事務局** 鯨岡 武（水戸市教育委員会教育長）
横須賀 徹（水戸市教育委員会教育次長）
小畑 完（水戸市教育委員会生涯学習課長）
藤枝 孝（水戸市教育委員会生涯学習課長補佐）
成田行弘（水戸市教委生涯学習課文化振興係長）
黒須雅継（水戸市教委生涯学習課文化振興係主事）
石川 健（水戸市教委生涯学習課文化振興係主事）
川口武彦（水戸市教委生涯学習課文化振興係文化財主事）
新垣清貴（水戸市教委生涯学習課文化振興係埋蔵文化財専門員）
粟生美賀子（水戸市教委生涯学習課文化振興係文化財専門員）
調査担当者 関口慶久（水戸市教委生涯学習課文化振興係文化財主事）

調査・整理参加者名簿

第1次調査・整理（当時） 田宮一典・橋本 勉・吉野勢津子・関 順子・藤井裕紀枝（國學院大學），
中村雅利・鶴見貞雄・斎藤礼子・貝塚由美子・藤崎吉見・後藤久雄・鈴木正彦・棚谷昇一・斎藤文夫
・照山量弘・藤沢泰典・梅原 晶・海老沢稔・和田玲子・大串元子・米川久子（茨城大学）・綿引逸雄
（日立一高OB），飯村正則（東海大学），今橋浩一（早稲田大学），鈴木裕芳（東洋大学），飯村広則・大
串 純（緑岡高校），塚本師也（水戸市立渡里小学校）

第2次調査・整理 小野寿美子・中尾麻由実・石川勉・小野瀬智工・小山司農夫・久保木きよ子・
栗原芳子・郡司なか・高柳悦子・花田繁二郎・皆川明子・安島町子・石崎洋子・大内恵子・大部直美
・鬼沢規子・佐々木賀津江・橋本祥子・川又恵美子

凡例

- 1 測量平面図および遺構平面図は、国家標準直角座標IX系に基づく座標値を示し、方位は真北を基準としている。
- 2 遺構平面図・断面図の縮尺は統一していない。縮小率は各図面に示したスケールを参照願いたい。
- 3 遺構断面図及び土層堆積図の標高は、その都度図中に示している。
- 4 第2次調査における遺構図版中におけるトーン等の表示は、下記に示した凡例図の基準で使用している。
- 5 遺物実測図の縮尺は、陶磁器・土器・ガラス製品は1/3で、石器は1/2で掲載した。
- 6 掲載した出土遺物実測図のうち、反転復元した図面については、図の中心に▼を示した。
- 7 遺物写真の縮尺は統一していない。
- 8 遺構・遺物の色調表記は、『新版標準度色帖』（再版、財団法人日本色彩研究所ほか）を基準とした。
- 9 引用・参考文献は、一括して本書の最後に示した。
- 10 表紙に使用した写真は、表面が第2次調査風景（2005年11月撮影）で、裏面が第1次調査直前の吉田古墳の近景（1972年4月撮影）である。また中扉の図は鳥居龍蔵氏による吉田古墳壁画のスケッチである（鳥居1928より転載）。

凡例図（第2次調査）



目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第1節 第1次発掘調査	(1)
第2節 測量調査・第2次発掘調査	(1)
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 行政区分	(3)
第2節 地理的環境	(3)
第3節 歴史的環境	(5)
第3章 吉田古墳調査・研究史	15
第1節 近世	(15)
第2節 明治・大正～昭和前期	(16)
第3節 戦後	(21)
第4章 吉田古墳群第1号墳の第1次発掘調査	28
第1節 調査・整理の方法	(28)
第2節 調査の経過	(30)
第3節 基本層序	(33)
第4節 発見された遺構	(34)
第5節 出土した遺物	(39)
第5章 吉田古墳群第1号墳の測量調査	40
第1節 調査の方法と経過	(40)
第2節 調査成果	(41)
第6章 吉田古墳群第1号墳の第2次発掘調査	42
第1節 調査の目的と方法	(42)
第2節 調査の経過	(45)
第3節 調査成果の公開	(47)
第4節 基本層序	(48)
第5節 発見された遺構	(50)
第6節 出土した遺物	(59)
第7章 総括	66

第1節 古墳の規模と墳形	(66)
第2節 石室構造と年代	(69)
第3節 壁画	(69)
第4節 古墳群としての吉田古墳	(70)
第5節 課題と展望	(73)
おわりに	(74)
引用・参考文献	(76)
報告書抄録	
写真図版	

表目次

第1表 周辺遺跡一覧	8	第3表 出土遺物観察表	63
第2表 平成17年度新聞記事一覧	47	第4表 出土遺物一覧表	65

図版目次

第1図 調査区の位置	4	第13図 吉田古墳第2次調査関連記事	48
第2図 水戸市域の地形	5	第14図 土層堆積状況模式図	50
第3図 大正期における 古墳周辺の地形	6	第15図 第6トレンチ	52
第4図 吉田古墳と周辺の遺跡	7	第16図 第7トレンチ	54
第5図 大正～昭和前期の調査	17	第17図 第8トレンチ	56
第6図 戦後の調査	25	第18図 第9トレンチ	58
第7図 吉田古墳全体図	29	第19図 第2次調査出土遺物(1)	62
第8図 墳丘断面図	34	第20図 第2次調査出土遺物(2)	63
第9図 各トレンチ内周溝土層断面図	35	第21図 第1次・第2次調査で 検出した石室・周溝	67
第10図 石室実測図	37	第22図 吉田古墳群の範囲	71
第11図 壁画実測図	39		
第12図 トレンチ設定図	43	付図 吉田古墳群第1号墳測量図	

写真図版目次

口絵写真1	線刻壁画	挿図写真13	第6トレンチ遺物検出風景
口絵写真2	墳丘と石室・周溝	挿図写真14	第7トレンチ周溝掘削風景
挿図写真1	吉田古墳の状況	写真図版1	遺跡の位置
挿図写真2	第1トレンチの設定	写真図版2	第1次調査(1)
挿図写真3	第1トレンチの調査風景	写真図版3	第1次調査(2)
挿図写真4	地形測量風景	写真図版4	第1次調査(3)
挿図写真5	実測風景	写真図版5	第2次調査(1)
挿図写真6	採拓作業風景	写真図版6	第2次調査(2)
挿図写真7	現地見学会風景	写真図版7	第2次調査(3)
挿図写真8	現地見学会説明風景	写真図版8	第2次調査(4)
挿図写真9	石室埋め戻し風景(1)	写真図版9	第2次調査出土遺物(1)
挿図写真10	石室埋め戻し風景(2)	写真図版10	第2次調査出土遺物(2)
挿図写真11	測量調査風景	写真図版11	第2次調査出土遺物(3)
挿図写真12	表土掘削風景		

第1章 調査に至る経緯

第1節 第1次発掘調査

吉田古墳は、大正3（1914）年3月、地主加藤徳之助によって発見された線刻壁画をもつ古墳で、発見当時から奥壁にある靱・鉾・大刀・刀子など武器・武具類の線刻画が注目され、後述するように柴田常恵や鳥居竜蔵・梅原末治らの調査を経て大正11（1922）年3月8日に内務省指定となり、昭和25（1950）年には文化財保護法の施行に伴って国指定史跡となった古墳である。

昭和47年当時、吉田地区は水戸駅南開発や吉田地区整備など一連の開発計画を受けて急激な市街地化が進行する地域と予想された。当古墳の墳丘は藪と化しており、さらに石室前の杉戸の鍵は壊れて内部に自由に出入りでき、石室内部の壁面には多く落書きされて荒れ果てた古墳という状態であった。

当地区は、国指定文化財薬王院本堂（建造物）、県指定文化財薬王院仁王門（建造物）、市指定文化財旧吉田村庄屋宅ならびに倉庫－伝稗倉－（建造物）などが所在する文化財集中地区であり、吉田古墳を含めて総合的な文化財整備計画を策定する必要があった。

さまざまな開発計画の中、開口した吉田古墳の整備も含めた総合的な文化財の整備を実施するためには、科学的な保存方法が確立するまで石室を川砂で封鎖することが望ましいとの結論が出され、古墳の規模の確認や石室内部の計測、壁画を公開するためのシリコン樹脂による型採りなどを目的として第1次調査が計画された。調査は昭和47年4～5月に実施したが、調査は指定地内に限定されたため、古墳の規模や墳形について明確な結論を出すことができなかった。

第1次調査は、その当時「第1次環境整備調査」として実施されたもので、水戸市教育委員会事務局社会教育課文化財担当主幹伊東重敏が担当した。（瓦吹）

第2節 測量調査・第2次発掘調査

水戸市では平成14年から第5次総合計画の策定を計画しており、「歴史的資源の活用」が謳われている。歴史的資源のひとつである国指定史跡吉田古墳については、史跡および周辺の整備と古墳の保護を図りながら、歴史的資源としての活用を推進していくこととされている。こうした計画を受けて、平成16年度から市教育委員会生涯学習課で吉田古墳の整備・活用を推進することが出来ないかという要望が庁内や周辺住民から寄せられるようになってきた。

しかしながら、当時は教育委員会生涯学習課に文化財主事1名と埋蔵文化財専門員（嘱託）2名しか配置されておらず、ほぼ1年を通じて県指定史跡「台渡里廃寺跡」を国指定史跡にするための範囲確認調査と出土品の整理作業や開発に伴う市内の埋蔵文化財包蔵地の試掘・確認調査に従事する体制

を採っていたため、例えば吉田古墳の墳丘測量調査すら実施することが困難な状況であった。

そのような中、文化庁記念物課と茨城県教育庁文化課に相談したところ、史跡の保全と管理や急増する開発から埋蔵文化財の保護を推進していくには、文化財主事を増員する必要がある旨の指導・助言をうけ、平成17年度から文化財主事を1名増員することが可能となった。

平成16年度の時点で、既往の吉田古墳の調査・研究成果を整理した結果、吉田古墳は7世紀前葉に築造された終末期の方墳と理解されているが、墳丘形状が後世の著しい土地利用によりはっきりしておらず、現状の墳丘の規模が築造当時の状況を反映していない可能性が高いことは明らかであった。

また、既往の調査で作成されている墳丘の測量図も改めて見直すと、25cmや50cmコンターによるものであり、現代的な視点から研究資料として活用するには充分でないことから、史跡の整備に向けた基礎的な作業として国・県費補助金による10cmコンターに基づく墳丘測量調査と東西の周溝を確認するためのトレンチ調査を計画した。

そして、平成17年10月3日から10月19日まで関口慶久（市生涯学習課文化財主事）を調査担当者とし、小野寿美子氏（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）と中尾麻由実氏（同）による墳丘測量調査を実施し、10月20日から11月10日まで関口を調査担当者とする周溝確認調査を実施した。（川口）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 行政区分

吉田古墳群第1号墳は、北緯36度21分19秒、東経140度28分41秒（日本測地系）、地番としては茨城県水戸市元吉田町347ほかに位置する（第1図）。

この地は古代郷里制下にあつては那賀郡吉田郷に属していた。その後律令体制が衰退するにつれ、地方豪族により私称の郡が形成されるようになり、当地においても吉田郡が成立する。その時期は10世紀前半が下限で、12世紀後半には公認されたと推測されている（水戸市史編さん委員会1963）。

鎌倉時代末期から室町時代前期になると、私領の増加および国衙の支配体制の衰退によって郷が分裂し、郷内に村が形成された。かかる情勢下において、吉田郷のなかでも新しい村が誕生し、吉田村が成立したと考えられている（水戸市史編さん委員会1963）。

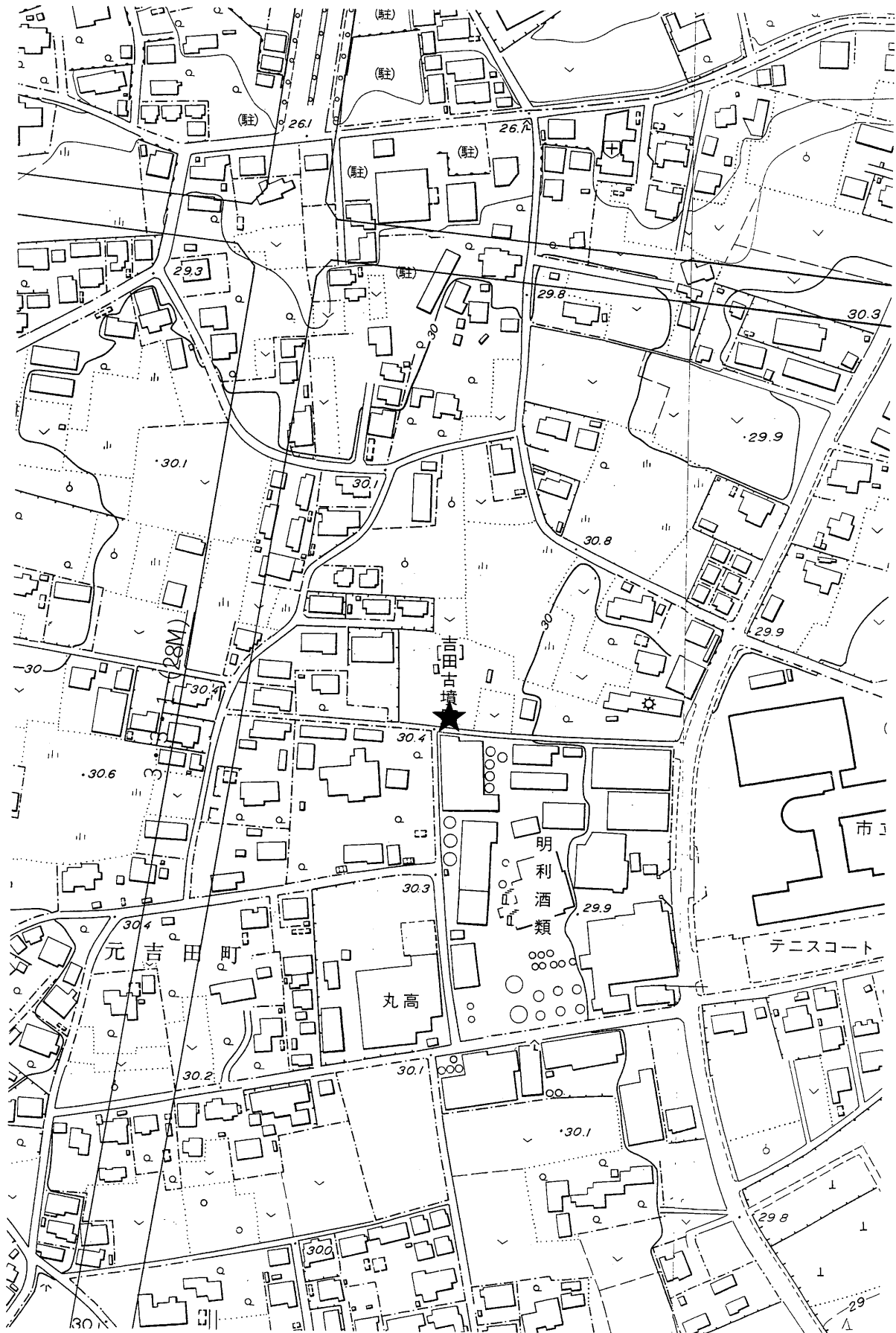
その後、文禄3（1594）年の太閤検地の実施により古代の郡名が復活し、那珂川以南は茨城郡に属すようになった。これにより当地の行政区分は常陸国茨城郡内吉田村として画定され、明治に至る。

明治4（1871）年7月、廃藩置県により水戸を中心とする地域が水戸県となったが、同年11月に廃止され茨城県となった。明治6（1873）年の大小区制導入では、吉田村は第三大区第一小区に編入、明治8（1875）年の大小区改正により第一大区第四小区となった。明治11（1878）年、茨城郡が東西に分かれ、水戸市域は東茨城郡となった。明治15（1882）年と明治17（1884）年には、吉田・吉沢・米沢・東野地区が合併し吉田村連合村を構成し、明治22（1889）年の市町村制実施で吉田村連合村がそのまま吉田村となった。これにより当地域の行政区分は茨城県東茨城郡吉田村大字吉田となり、戦後を迎える。

昭和30（1955）年、吉田村大字吉田は水戸市に合併し、元吉田町となった。なお「元」の字は、明治22（1889）年の市町村制施行で水戸市が誕生した際、吉田村の一部区域が編入され水戸市吉田となっていたため、それと区別するために元吉田町としたものである。

第2節 地理的環境

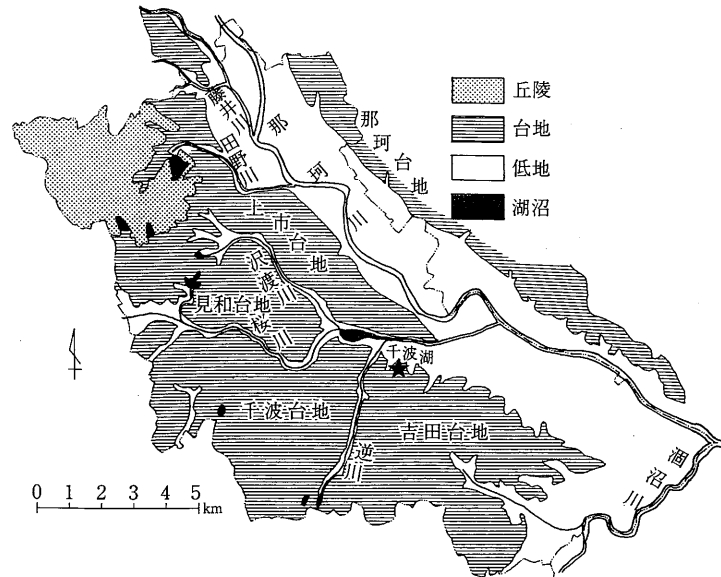
吉田古墳群周辺の自然地形は、大きく二つの地形に区分される。一つは北部から東部に流れる那珂川とその支流の桜川・潤沼川より構成される沖積低地であり、もう一つは東茨城台地の北東部をなす水戸台地（通称上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地等）である。水戸台地には沢渡川、桜川、逆川が開析する支谷が深く入り込み、上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地と呼ばれる台地が構成される（第2図）。



第1図 調査区の位置 (水戸市都市計画図1 / 2,500 に加算)

水戸台地の地質は、第三紀層（凝灰質シルト岩。いわゆる水戸層）を基盤岩とし、その上に第四紀洪積層が重なってできている。洪積層の下層は古東京湾が海退するに伴って形成された上市層と呼ばれる砂礫層が堆積しており、上層に浅間山・男体山などの火山活動による降灰で形成された関東ローム層が堆積する。

吉田古墳は、水戸台地のうち最も東側にある、標高約30mの吉田台地上に位置する。吉田台地の地形をさらに細かく観察すると、鋸



第2図 水戸市域の地形

(★が吉田古墳、水戸市史編さん委員会 1999 に加筆)

歯状に入り込んだ支谷によって複数の小台地が形成されていることがわかる。古墳はその小台地の北側縁辺部に築造された。現在は市街地化が進む中で景観は著しく変化してしまったが、第3図に示した明治年間の地形図から、眼下に千波湖を望む往事の景観を偲ぶことができよう。昭和初年に実地調査した鳥居龍蔵は、「古墳のある位置は廣い丘陵の稍や崖に近い所にあつて、その下は直ちに千波沼で、水戸方面を下に眺望せらるゝ極めてよい場所にある」と述べている（鳥居1928）。

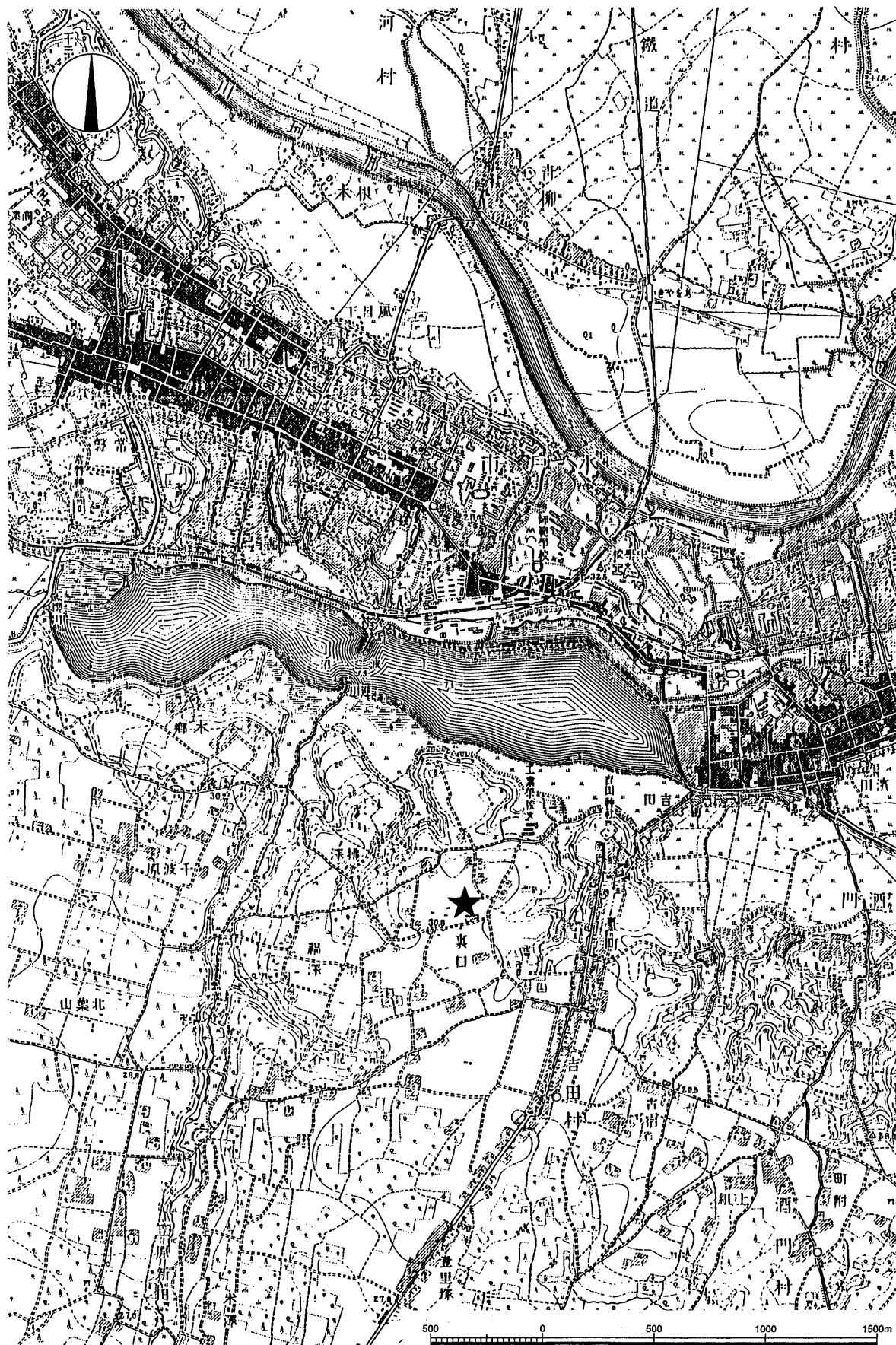
第3節 歴史的環境

(第4図・第1表)

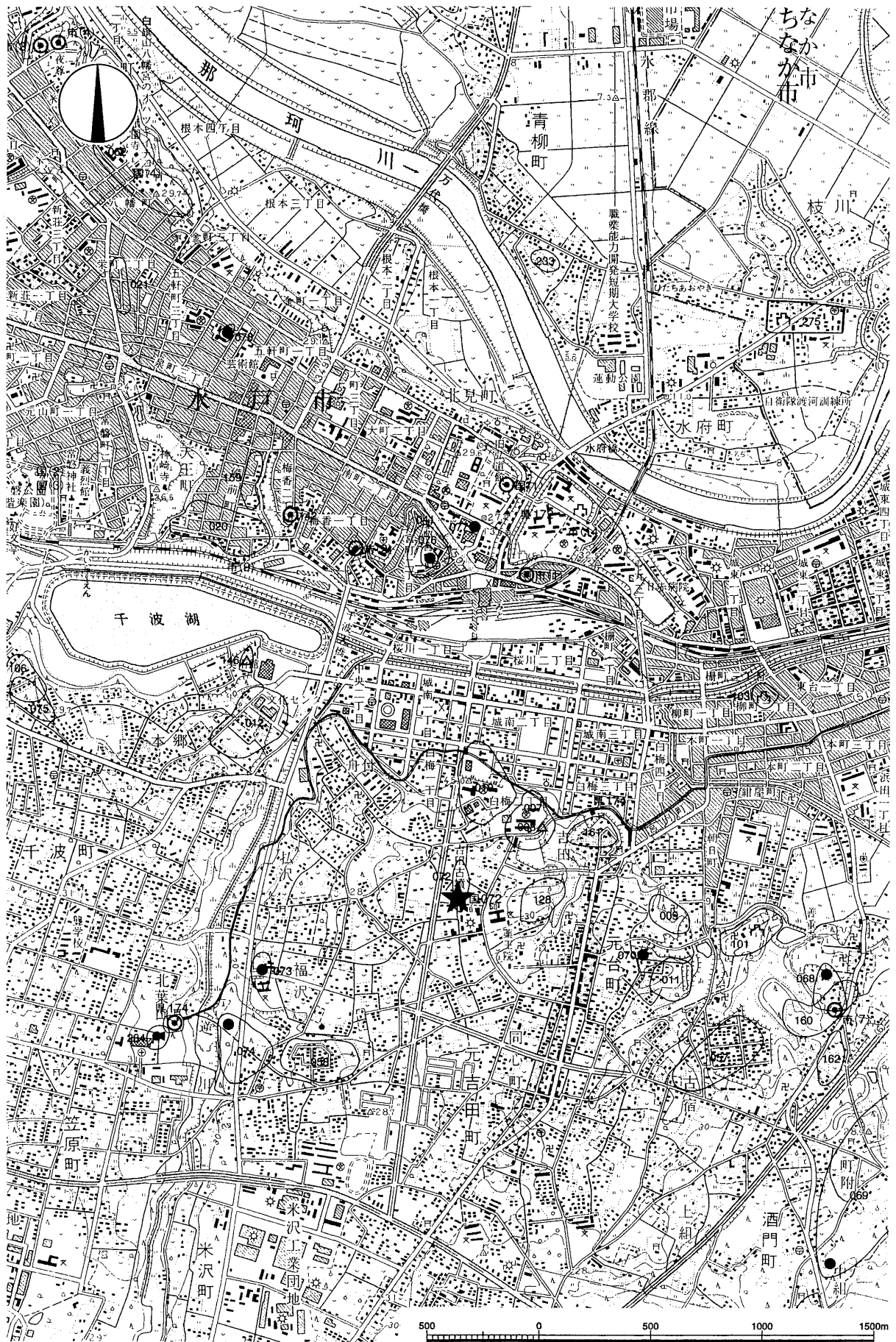
ここでは、吉田古墳をめぐる歴史的環境について、前節で述べた古墳周辺の地理的特徴をふまえて、時期別に項目を立てて述べていきたい。

なお古墳周辺の歴史的環境は、北側に接する水戸城とその城下町に象徴されるように、中世～近世の土地利用が特に活発なことは他言を要しないだろう。したがって純粋に遺跡周辺の土地利用を把握しようとするならば、自ずから中世～近世の叙述にウエイトがかかってくる。事実、今回の発掘調査により出土した多くの遺物は中世から近世・近代にかけてのものである（第6章第6節参照）。

しかしながら本報告の主たる目的は、吉田古墳の史跡整備に係る基礎的所見を提示することにある。したがって本節の叙述では、あえて古墳時代の時期にウエイトを置き、述べていくこととしたい。



第3図 大正期における古墳周辺の地形
(★が吉田古墳, 大日本帝國陸地測量部1/25,000地形図「水戸」に加筆, 第4図と同範囲)



第4図 吉田古墳と周辺の遺跡（茨城県遺跡地図1 / 25,000 に加筆，第3図と同範囲，図中の番号は第1表に対応）

第1表 周辺遺跡一覧（遺跡No.は第4図に対応）

遺跡No.	遺跡名	種別	遺物	備考
007	水戸南高校遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器, 土師器(古)	
008	吉田貝塚	貝塚	縄文土器(中), 敲石, 凹石, 石皿, 貝輪	
009	安楽寺遺跡	集落跡	縄文土器(中, 後), 石斧, 石錘, 凹石, 石皿, 土器片錘	
010	お下屋敷遺跡	集落跡	縄文土器(前～後), 弥生土器(後), 土師器(古, 平)	S43発掘調査
011	大鋸町遺跡	集落跡	縄文土器(早, 晩), 弥生土器(後), 土師器(古, 奈良・平安), 須恵器(古, 奈良・平安)	S63, H17発掘調査
012	下本郷遺跡	集落跡	縄文土器(中), 石斧, 凹石	
020	釜神町遺跡	集落跡	縄文土器(中), 石斧, 石皿, 石棒	
021	並松町遺跡	集落跡	縄文土器(中)	
041	東照宮境内遺跡	集落跡	弥生土器	
058	米沢町遺跡	集落跡	土師器, 須恵器	
062	茨城高等学校遺跡	集落跡	縄文土器(早, 中, 後), 土師器(奈良・平安), 須恵器(奈良・平安)	
068	酒門台古墳群	古墳群	円筒埴輪	後円1?, 円2
069	谷田古墳群	古墳群	土師器(古), 埴輪(古)	前方後円墳1(2), 円墳5
070	大鋸町古墳	古墳		円0(1)
072	吉田古墳群	古墳群	金環, 鉄族, 刀剣, 勾玉	方1, 円1
073	払沢古墳群	古墳群		円0(2)
074	福沢古墳群	古墳群		円3(4)
075	千波山古墳群	古墳群		後円1, 円2
076	東照宮境内古墳群	古墳群		円0(3)
077	無名古墳	古墳		円0(1)
078	五軒町古墳群	古墳群		円0(2)
101	吉田城跡	城館跡		
103	武熊故城	城館跡		
106	千波山遺跡	城館跡	縄文土器(中), 打製石斧, 石鏃	
128	薬王院東遺跡	集落跡	縄文土器(中), 弥生土器(後), 土師器(奈良・平安), 須恵器(奈良・平安)	H1発掘調査
142	梅香火葬墓跡	火葬墓	須恵器(奈良・平安)	
146	柳崎貝塚	貝塚	縄文土器(早, 前)	
152	田野台遺跡	集落跡	縄文土器, 土師器(古), 須恵器	
159	幸町遺跡	集落跡	縄文土器	
160	酒門台遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古, 奈良・平安), 須恵器(奈良・平安), 土師質土器, 陶器	
161	吉田神社遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
162	荷鞍坂遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古, 奈良・平安), 須恵器(奈良・平安), 円筒埴輪, 形象埴輪, 陶器	
172	水戸城跡	城館跡	丸瓦, 平瓦, 釘, 扉金具, 陶磁器, 土器	
174	笠原水道	水道跡	石樋	
233	青柳町遺跡			
234	笠原古墳群			
275	枝川城跡	城館跡		ひたちなか市
国(1)	旧弘道館			国指定特別史跡
国(2)	常磐公園			国指定史跡
国(3)	常磐公園			国指定名勝
国(4)	白旗山八幡宮のオハツキイチョウ			国指定天然記念物
市(1)	義公生誕の地			市指定史跡
市(2)	藤田東湖生誕の地			市指定史跡
市(3)	常磐共有墓地			市指定史跡
市(4)	水戸殉難志士の墓			市指定史跡
市(7)	酒門共有墓地			市指定史跡
市(9)	光藻			市指定天然記念物
市(14)	水戸城跡の大シイ			市指定天然記念物

(茨城県教育庁文化課2001, 水戸市教育委員会1999をもとに作成)

第1項 先土器時代の様相

那珂川流域の先土器時代遺跡は、ひたちなか市や水戸市において確認されているものの、調査が先土器時代の調査を目的にしない場合が多く、その様相は必ずしも明確ではない。

吉田台地では、涸沼川の支流である石川川によって開析された谷の南側台地上にある森戸遺跡において、尖頭器をはじめとする剥片資料がわずかながら出土している（常澄村史編さん委員会1989）。また栗崎町や下入野町で採集された資料を近年川口武彦氏が報告しており（川口2002・2005）、徐々にではあるが当該期の生活を窺う資料は増加しつつある。

第2項 縄文時代の歴史的環境

縄文早期末から前期前半にかけて、縄文海進がはじまり、現在の海岸線から直線距離で十数キロ奥に入った吉田古墳周辺まで及ぶようになる。この時期の貝塚としては、千波町の柳崎貝塚、谷田町の谷田貝塚などで発掘調査が行われている（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。当該地周辺においてこの時期の集落は現段階では確認されていないが、薬王院東遺跡の発掘調査では縄文早期土器の破片が出土しており、土地利用の痕跡がわずかながら窺える（水戸市薬王院東遺跡発掘調査会1990）。このほかに元吉田町の横宿遺跡で縄文早期の田戸下層式土器が採集されている（水戸市教育委員会1999）。

縄文中期から後期になると遺跡数が増加し、集落の規模が広がる傾向が窺える。吉田台地では元吉田町にある下畑遺跡の発掘調査が実施され、約30基の袋状土坑が検出されている。出土土器の中心は中期後半の加曾利EⅡ～Ⅲ式期である。住居址は1件のみ検出されているが、これは調査区が限定されていたため、袋状土坑集中区の周辺に相応の集落が展開していたことはほぼ確実である（水戸市下畑遺跡発掘調査会1985）。谷田町の下の内遺跡では、陸田造成時に不時発見され遺跡の大部分は調査されず削平を余儀なくされたが、縄文中期から晩期後葉に至る土器群、土製品、骨角器、多様な石器類が出土した（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。また大鋸町遺跡第2地点では加曾利E式最終末段階の土坑群が検出されている（地域文化財コンサルタント編2005）。

この時期の貝塚としては、吉田古墳の北方にある吉田貝塚が挙げられよう。昭和37（1962）年配水管埋設工事に伴い不時発見された。厚さ40cmの貝層が6m×1mの範囲で確認され、縄文中期の土器片や石器類、貝輪などが出土している（茨城県教育委員会1982）。また昭和61（1986）年に道路舗装補修工事に伴い貝塚隣接地で確認調査が実施されており、厚さ10～15cmの貝層が確認されていることから、貝塚は現在の包蔵地範囲からさらに広がることが想定される（郡司1992）。

縄文晩期になると、遺跡数自体が減少しその様相が極端に不透明になる。吉田台地では、さきに触れた下の内遺跡の調査において、縄文晩期中～後葉を主体とする土器群が出土している。土器群には東北地方に分布するものも相当数認められ、安行系文化と亀ヶ岡式文化の漸移地域としての特色を窺わせる資料群として位置づけられる（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。

第3項 弥生時代の歴史的環境

弥生時代の遺跡は、茨城県下では一般的に中期前半から認められることが知られているが、吉田台地での調査事例は後期に至って確認されるようになる。

元吉田町のお下屋敷遺跡では、土砂採取工事に伴い不時発見されたため限定的な調査を余儀なくされたが、十王台式期に属する住居址5軒と、それに後続する時期の住居址1軒を検出している（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。

吉田古墳群に東接する薬王院東遺跡の発掘調査では、後期の竪穴住居址10軒、竪穴上遺構1期が検出されている。

吉田古墳の西方に位置する大鋸町遺跡は、これまで3次にわたる発掘調査が実施され、9軒の住居址および土坑群が検出されている（第1次調査：水戸市大鋸町遺跡発掘調査会1988、第2次調査：地域文化財コンサルタント編2005、第3次調査：東京航業研究所編2006）。

また埜坪遺跡（酒門町）、横宿遺跡（元吉田町）、酒門台遺跡（酒門町）、吉田神社遺跡（宮内町）、荷鞍坂遺跡（酒門町）などにおいて、分布調査により弥生後期の十王台式土器が採集されている（水戸市教育委員会1999）。

以上のように、吉田古墳周辺では弥生後期より徐々に集落が営まれるようになり、土地利用が活発となっていく傾向が見受けられるのである。

第4項 古墳時代の歴史的環境

那珂川流域はかねてより仲国造の支配領域に比定されており、分布する古墳はその関連性が論じられてきた。

吉田台地における古墳時代前期に比定される遺跡の調査事例としては、大鋸町遺跡（前掲）、お下屋敷遺跡（水戸市教育委員会1999）、大串遺跡（常澄村教育委員会1986、水戸市1996）、北屋敷古墳（水戸市1995）等が挙げられる。性格はいずれも集落跡であり、弥生時代後期に引き続き、那珂川下流域において相応の土地利用がなされていたことが窺える。

当該期の古墳については、吉田台地上では現在のところ認められていない。古墳出現期の事例は、那珂川を吉田地区よりさらに上流に遡った、藤井町の二の沢B遺跡の1号周溝墓・2号周溝墓・6号周溝墓が挙げられよう（茨城県教育財団2003）。これら3基の周溝墓は前方後方形を呈しており、那珂川下流域における出現期古墳のなかでも最初期に位置づけられる。また飯富町の安戸星古墳1号墳も前方後方墳であり、二の沢B遺跡の前方後方形周溝墓と同様の時期に造営されたものと考えられている（日高2004）。

これに続く古墳としては、鹿島灘に面する丘陵上に位置する、大洗町の坊主山古墳（前方後方墳、全長50m）、鏡塚古墳（前方後円墳、全長105.5m）、車塚古墳（円墳か、直径95m）が代表例として挙げられる。坊主山→鏡塚→車塚の順に築造されたことが墳形から推測されており（茂木1987）、鏡塚古墳の築造年代は4世紀末に比定される（国士舘大学牛伏4号墳調査団編1999）

古墳時代中期の古墳としては、吉田古墳の北西、上市台地上の愛宕山古墳（前方後円墳、全長136.5

m) およびその東側に隣接する姫塚古墳（前方後円墳，全長58m）が挙げられる。愛宕山古墳は採集埴輪の分析から5世紀前半の築造と推測されている（国士舘大学牛伏4号墳調査団編1999）。

吉田古墳周辺における当該期の集落跡としては，大鋸町遺跡（前掲）が発掘事例として挙げられる。

古墳時代後期・終末期になると，那珂川流域の各地に集落が営まれるようになる。吉田台地上では，小仲根遺跡（水戸市教育委員会2002），大鋸町遺跡（前掲），下畑遺跡（前掲），梶内遺跡（水戸市1995），大串遺跡（前掲）などで発掘調査が実施され，6世紀から7世紀前葉に至る住居址が検出されている。

川口武彦氏は当該期の集落の様相について，市内で確認されている集落が軒並み7世紀前半でその営みを停止する中，ひとり台渡里遺跡が7世紀後半の集落として認められることに注目し，「以上のような後期・終末期の集落跡の動向を見ると，5世紀後葉から7世紀前半まで継続的に営まれていたものが，7世紀前葉遺構に形成が途絶え，7世紀の後半に至って，後に郡衙が営まれる地域の近隣（＝筆者註：台渡里遺跡周辺）に突如として形成し始めるという現象が指摘できようか」と述べている（水戸市教育委員会2004）。

以上のような終末期の集落形成のあり方は，吉田古墳，そしてそれに後続もしくは併行して営まれていった，渡里町域を中心とする那賀郡衙・郡寺の展開過程に直接関わる重要な知見として留意すべきであろう。

後期・終末期の古墳についても，集落同様，市内各地に営まれるようになる。後期古墳としては北屋敷古墳群（大串町），大串古墳群（大串町），富士山古墳群（田谷町），小原内古墳群（田谷町），赤塚古墳群（河和田町），加倉井古墳群（加倉井町），牛伏古墳群（牛伏町）が，終末期古墳としてはニガサワ古墳群（藤井町），西原古墳群（堀町），白石古墳群（田谷町），大井古墳群（飯富町），吉田古墳群（元吉田町），フジヤマ古墳（栗崎町），谷田古墳群（酒門町），権現山横穴墓群（下国井町）が挙げられる。

このうち発掘調査によって具体的な様相が報告されている事例としては，北屋敷古墳群（茨城県教育財団1993，水戸市1995），牛伏古墳群（国士舘大学牛伏4号墳調査団編1999），ニガサワ古墳群（茨城県教育財団2003）がある。

北屋敷古墳群は2基存在し，第1号墳は円墳で，横穴式石室内から直刀・小刀・鉄鏃などの副葬品が出土している。第2号墳は墳形を確定できていないが，裾部から円筒埴輪・人物埴輪などが出土し，古墳の造営は6世紀後半に比定される。

牛伏古墳群は前方後円墳7基，円墳9基から構成される一大古墳群で，5世紀末から6世紀後半にかけて連綿と営まれたことが判明している。

ニガサワ古墳群は前方後円墳4基と円墳1基から構成され，いずれも埴輪は出土していない。6世紀後半から7世紀前葉にかけて造営されたとみられる。

ここに列挙した古墳群は発掘調査あるいは採集資料から確認されているのみで，市内には年代不詳の古墳群が多く確認されており，その中には後期・終末期に営まれた古墳は少なくないものと推測される。かかる傾向は吉田台地上においても同様であり，大型古墳の終焉→群集墳の増大という，全国的な趨勢＝支配体制の変革が当地においても進行していたことを示唆していよう。

また那賀川下流域は装飾古墳が比較的集中して分布することが知られており，那珂川右岸には吉田

古墳と権現山横穴墓群が、那珂川左岸にはひたちなか市虎塚古墳、金上殿塚古墳が那珂台地上に営まれている。とくに虎塚古墳が立地する中丸川流域には、笠谷古墳群、大平古墳群、三反田古墳群、十五郎横穴墓群などの古墳・横穴墓が集中しており、奥津城が連綿として造営された「聖なる地」として位置づけられる。

これらの装飾古墳は各モチーフに共通点が多く、相互に何らかの連関があつて造営されたことはほぼ疑いない。吉田古墳の被葬者像を窺う上で虎塚古墳を中心とした中丸川流域の古墳群の造営のあり方は留意すべきであろう。

第5項 奈良・平安時代の歴史的環境

水戸市市域における奈良・平安時代の遺跡としてまず挙げられるのは、渡里町一帯を中心に分布する、台渡里廃寺跡・アラヤ遺跡・長者山遺跡・渡里町遺跡・文京2丁目遺跡・台渡里遺跡・堀遺跡・西原遺跡などの一大遺跡群である。これらの遺跡群は、いわゆる「郡寺」を示唆する遺構・遺物を豊富に包蔵する台渡里廃寺跡をはじめ、郡庁院・正倉院・寺院・集落が一体となった官衙関連遺跡である「台渡里遺跡群」として理解されており、那賀郡の中核域であつた。

また台渡里廃寺跡に東接して古代官道である東海道が敷かれ、それに伴い那珂川右岸に河内駅家が設置されたことが『常陸国風土記』に記載されているように、この地は東北経営の前線として中央政権下にあつても相応に重要視されていたことが窺える。

このような律令期における台渡里遺跡群の性格を考えると、遺跡群と吉田古墳とは地理的には若干の距離があるものの、7世紀後半以降の歴史的環境を考える上で両者の関連性は常に留意する必要がある。

吉田古墳周辺における奈良・平安時代の遺跡としては、お下屋敷遺跡（前掲）、薬王院東遺跡（前掲）、大鋸町遺跡（前掲）で発掘調査が実施され、いずれも集落跡が検出されている。大鋸町遺跡第1次・第2次調査では8世紀第2四半期から9世紀代を主体とする30軒の住居址が、吉田古墳に隣接する薬王院東遺跡では8世紀後半～9世紀にかかる38軒の住居址や工房跡が検出され、8世紀代に集落が活発に営まれる状況が窺える。

このほか塙坪遺跡（酒門町）、酒門台遺跡（酒門町）、吉田神社遺跡（宮内町）、荷鞍坂遺跡（酒門町）などで当該期の遺物が採集されており、その散布状況から集落の存在が窺える。

9世紀に至り、律令体制による中央集権体制が衰微していくなかで、弘仁3（812）年、河内駅家が廃止され、10世紀第1四半期には台渡里廃寺跡も廃絶する。

この9世紀から10世紀に至る間に、吉田神社が次第に勢力をもち、第1節で述べたように10世紀前半には吉田郡が那珂郡から独立するほどの政治的・宗教的勢力となる。このような平安時代以降の状況について時野谷滋氏は「すでに平安時代初期の水戸地方では、繁栄の中心が渡里台地方面から、千波湖低地帯を越えてしだいに吉田台地方面に移動しており、その後この地方には、吉田神社の神威がおおうとともに、（中略）かつ吉田薬王院および元石川町の円照寺を中心とする天台宗が弘通していたのである」とまとめている（水戸市史編さん委員会1963）。

このように吉田神社は那珂川流域における新興勢力として在地支配を行うようになるが、それに後続して武士団が吉田郡に進出していき、12世紀前半までには常陸平氏である吉田氏が郡司となり、在庁官人として吉田郡を勢力下に置き、吉田神社との軋轢を生みながら中世を迎える。

第6項 中世の歴史的環境

鎌倉幕府が成立すると、吉田郡内は吉田氏およびその一族である石川氏・馬場氏が御家人となり、地頭として在地支配を行った。吉田氏の居館として有力視されているのが、常照寺境内を中心として遺構が残る、吉田城跡である。発掘調査は実施されていないが、詳細な縄張図が作成され、藤木久志氏による分析が行われている（水戸市史編さん委員会1963）。また馬場氏は千波湖を挟んだ上市台地上、現在の水戸城付近に居を構えたと推測されている。

その後南北朝の争乱のなか水戸地方には江戸氏が進出し、馬場氏から水戸城を奪取してこの地を本拠とするようになる。この時代、吉田城は水戸城の出城の一つとして利用されたと思われる。

中世末には豊臣政権のもと佐竹氏が常陸国を統一し、水戸城を居城として拡張・整備した。ここに至って吉田城は廃城になったと藤木氏は述べている（前掲）。

吉田古墳周辺の中世期の遺跡は、大鋸町遺跡第2次調査（前掲）で龍泉窯系の青磁碗など中世を通じて若干の遺物が包含層中より出土しているほか、米沢町遺跡における試掘・確認調査で15～16世紀代に比定される遺構・遺物がわずかながら検出している（整理途中）。

このように中世の吉田台地は、在地武士団による目まぐるしい割拠のなかで、吉田郡の中心地として常に攻防が繰り返されつつ、その拠点は徐々に上市台地の水戸城に移っていったという推移が迎えられるのである。

第7項 近世の歴史的環境

近世初頭、佐竹氏の秋田移封、武田信吉入封を経て、慶長14（1609）年徳川頼房の入封を以て、御三家水戸徳川家による水戸藩が成立する。水戸城を居城として城下町は整備され、吉田台地の一部もそれに伴い城下町に取り込まれた。大鋸町遺跡も城下町内にあり、第2次調査（前掲）では鉄滓や鞆の羽口など生産に関わる遺物が出土している。「大鋸町」という地名から木挽職に関わる町人地であったことが推測され、大工道具の直しなど小規模な鍛冶工房が存在していたのであろうか。

近世の吉田地区の土地利用を考える上で、長岡から吉田に至り、下市に抜ける幹線道路である江戸街道の存在抜きには語れないだろう。江戸街道は藩主や家臣が江戸と国元を往来する道として、また東北諸藩の参勤交代の道筋として重要な位置を占めると共に、台地際に位置する吉田神社周辺は、有事の際の軍事的拠点としても重要視されていたことと思われる。

吉田古墳周辺は水戸街道からやや離れており、城下町の範囲からは外れていた。しかし城下町近郊農村として、商品作物などの需要は比較的高かったものと思われ、土地利用は比較的活発であったことが想定される。吉田古墳の墳丘が極端に小型化した理由として、このような近世期における開墾による影響も充分考えられるのではなかろうか。

第2章 遺跡の位置と環境

また安政年間、吉田古墳に南接して加藤氏が酒造業を創業した（現在の明利酒類株式会社）。吉田古墳はこの加藤氏の敷地内にあり、次章で述べる如く、加藤氏によって壁画が発見されるのである。

（関口）

第3章 吉田古墳調査・研究史

吉田古墳は、大正3（1914）年に壁画が発見されて以来、数多くの研究者によって幾度にもわたって調査・研究がなされてきた。これらの研究史については、瓦吹氏によって簡潔にまとめられている（瓦吹2003）。

そこで本章では、瓦吹氏の叙述に導かれつつ、茨城県下における終末期古墳の調査・研究の中で吉田古墳がどのような位置にあったのか、そして現在何が課題となっているのか、という観点をふまえながら、吉田古墳の調査・研究史について改めて整理したい。

第1節 近世

前近代の考古学研究史上、近世水戸藩の学者達が遺した業績は、常陸国の考古学研究のみならず日本考古学の先駆をなすものとして、高く評価されている（斎藤1974）。

古墳に対する関心も並々ならぬものがあり、古くは徳川光圀による玉里村内の古墳調査（1690）、下野国上侍塚・下侍塚古墳の発掘調査（1692）にはじまり、小宮山楓軒『中根村石窟考』（1838）、色川三中『黒坂命墳墓考』（1847）、栗田寛『葬礼私考』（1876）などの論文や、小宮山楓軒『水府志料』（1807）、中山信名『新編常陸国誌』（1899, 1901）、赤松宗旦『利根川図志』（1858）などの地誌に、常陸国内の古墳の記事が多く掲載されている。

吉田古墳については、栗田寛『葬礼私考』の中にその記事があることが、茂木雅博によって紹介されている（茂木1987）。該当する記事は以下の通りである（国立国会図書館版）。

「…茨城ノ郡吉田村の古冢に、曲玉、管玉^{びんぎ}字得。…已上ハ竝ニ某カ聞見スル所ニ係ル」

このことから、この記事は栗田自身の見聞によるもので、茨城郡吉田村内の古墳において曲玉や管玉などが出土したという。

一見、吉田古墳の記事のようにも思えるが、当時の吉田村の範囲は『新編常陸国誌』によれば「東ハ濱田、古宿二村、西ハ米沢、富澤二村、南ハ木澤新田ニ堺シ、東南ハ原野ニ限り、北ハ千波沼ニ至ル、東西二十町餘、南北三十四町餘」とあるように（宮崎報恩会1969）、東西約2km×南北約3.4kmの面積を有し、その中には現在の吉田古墳群のみならず、酒門台古墳群、大鋸町古墳、払沢古墳群、福沢古墳群、笠原古墳群、千波山古墳群など、多くの古墳が含まれるため、特定はほぼ不可能といえよう。

むしろ注目すべきは、小宮山楓軒の『水府志料』、中山信名の『新編常陸国誌』の記事である。これらは、地誌として古墳旧跡への精力的な情報収集ぶりが窺えるが、いずれも吉田古墳の記事が見当たらない。もし壁画を有する石室という特徴を備えた古墳が近世段階で開口していたならば、水戸城下という地理的な近さを考えても、小宮山や中山らが見聞しているほうが自然で、そうすれば当然彼

らの編さんする地誌に盛り込まれていたであろう。

したがって状況証拠ではあるが、吉田古墳の線刻壁画は、近世には認識されていなかったと判断したい。吉田古墳の発見は、通説どおり大正3（1914）年に求めたほうがよいだろう。

第2節 明治・大正～昭和前期

本節では、明治からアジア・太平洋戦争に至る時期の吉田古墳をめぐる動きを取り上げる。この時期は、壁画が発見され吉田古墳が全国的に注目された時期である。ある意味、吉田古墳が最も脚光を浴びた時代といえる。

第1項 石室の発見

発見の顛末については、川角寅吉氏「吉田古墳発見に就て」（川角1951）に詳しい。これによれば、石室は大正3（1914）年3月末に、県立水戸女子師範学校附属小学校の小使であった加藤徳之助氏が、自身の敷地内に小さな塚があり、採土のためその一部を取り崩したところ、石室が現れた。そこで加藤氏が灯りをともして石室内に入ると、底面には「全環（筆者註：金環か）や鉄層などが出」ており、奥壁に壁画が刻されていることを発見したので、写生図をしたためたという。加藤氏は翌日、県立女子師範学校教諭の川角寅吉氏に事情を話すと、川角氏は興味を示し、4月2日に川角氏が古墳を訪れ実見した。壁画を見た川角氏は「研究の値あるもの」と判断し、加藤氏に保存に注意するよう伝えた上で、東京帝国大学人類学教室の柴田常恵氏に調査依頼の手紙を出した。

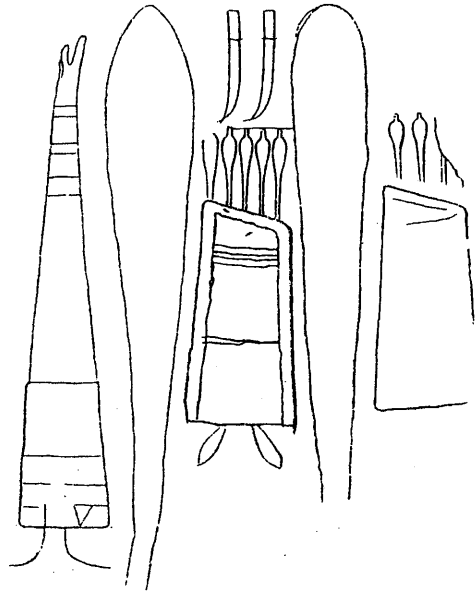
第2項 最初の調査

柴田氏が実際に調査に訪れたのは、川角氏から連絡を受けてから2年後の大正5（1916）年3月5日である。調査には柴田のほか、東京帝国大学から松村瞭（人類学教室）、長谷部言人（解剖学教室）、木村貞吉（建築学教室）のほか、小此木忠七郎・西村真次の各氏も同行した。このときの調査の様相については、川角1951と柴田1916に詳しい。

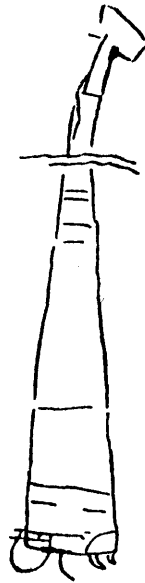
調査は外周の踏査・石室の簡易計測・壁画採拓などを実施したようである。

調査の翌日、川角氏は茨城県庁の栗田勤氏に連絡、保存を講ずる旨を要望した。3月31日には栗田氏と原田淑人氏（東京帝国大学）が調査に訪れ、川角氏が案内したようである。これについての報文は管見の限り見受けられない。なお、川角1951では3月8日の新聞いばらき及び、3月17日から数日にわたる読売新聞誌上で、吉田古墳調査の記事が掲載されたとの記述がある。しかし同日の新聞いばらき・読売新聞茨城版は、管見の限り同新聞社及び公的機関には保存されておらず、どのような記事であったのかは不詳である。

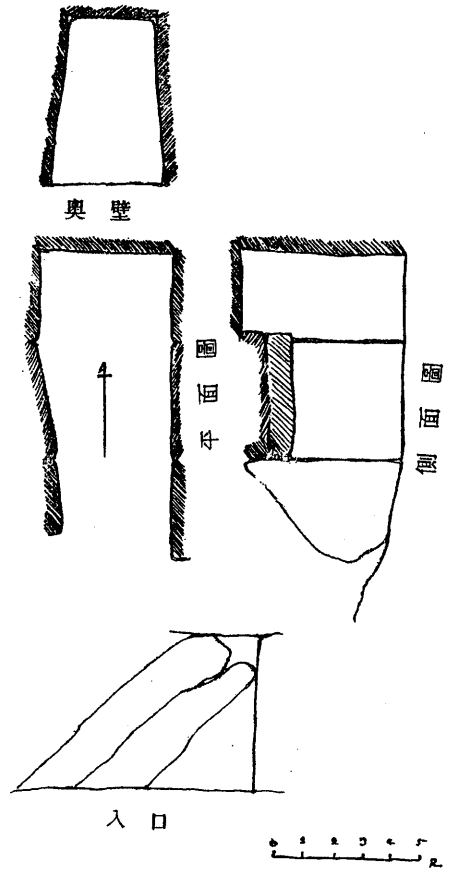
調査を終えた柴田氏は、『人類学雑誌』第31巻第10号の「論説及び報告」欄に「常陸吉田村の彫刻



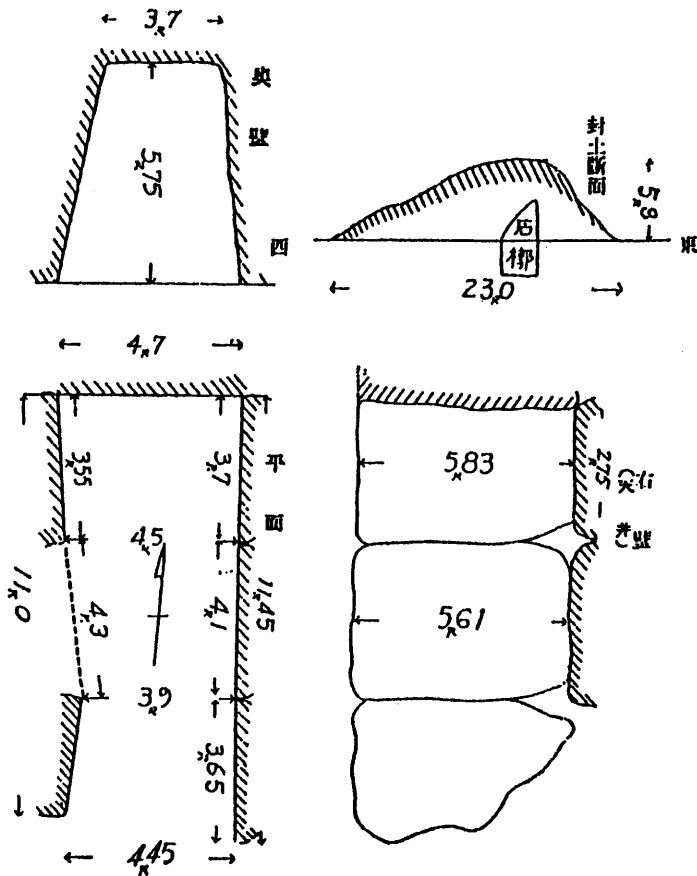
1. 奥壁壁面 (柴田 1916)



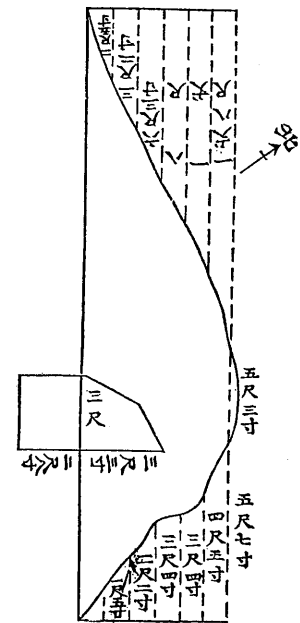
2. 奥壁壁面 (部分, 梅原 1916)



a. 石室実測図 (鳥居 1928)



4. 石室実測図 (内務省 1927)



5. 墳丘断面図 (東茨城郡教育会 1927)

第5図 大正～昭和前期の調査

ある一古墳」とする報文を著し、吉田古墳が初めて学会に発表された（柴田1916）。その内容は概ね以下のように要約できる。

遺跡の性格 「現に其辺には円塚が畑中に横つて居るのを認める」とあり、古墳群を形成していたことを指摘している。しかし「以前は尚ほ多く存在して居たのを、追々に取崩されて跡形もない様になったとの事」と記しているように、壁画発見当時において、相当数の墳丘が削平されていたことがわかる。

墳形 「外形は小さい円塚」としている。

石室 横穴式石室で、奥壁1枚、側壁各3枚、天井石3枚の切石で構成される。底面には「径五六寸位の川石が置いてあつたとの事で、現に内部には多数に之れが入居る」とあり、礫が敷かれていた状況が窺える。

線刻壁画（第5図1） 奥壁の壁画については、いずれも武器・武具類に比定している。中央に「矢筒」、その上に刀子2本、その両側の幅広の線刻は「何れかと云へば銅鉾にあらざとも鉄鉾などの類ではあるまいか」、正面最右の線刻は「矢筒」、同最左の線刻は「埴輪の消化器形に類似し居るとしても、単に斯く云ひ得るのみで更に進んで何物を意味するかを断じ兼ねる」とし、その下の2つのモチーフについては言及していない。また、側壁の線刻壁画については記述がない。

壁画の性格 「今日の所では九州の一部に限られた古墳の特徴」とし、福岡県日ノ岡古墳・熊本県チブサン古墳などの事例を挙げ、比較検討している。そして「此等は副葬品として種々の器物を葬る代りに其形状を彫刻なり絵画なりで代用したもの」で、吉田古墳についても同様の性格であることを窺わせている。九州地方の装飾古墳との系譜などについては言及していないが、壁画の性格づけに際し発見当初から九州地方の事例を挙げていることは重要であろう。

第3項 梅原末治氏の調査

柴田氏の報告後、「爾来史学考古学研究等の大家学生などの、この古墳調査に来るものが非常に多くなった」と川角氏は述懐している。京都帝国大学の梅原末治氏も、この古墳に興味を示した一人である。氏は「関東には珍しい彫刻のある事」と、「其の構造が余の嘗て調査した天武天皇六年营造の山城小野毛人の墳と頗る相類似して居る」ことの二点に興味を示し、同年3月から5月の間に調査に訪れ、「一日該地に至つて前後六時間に亘り拓本を採り亦精査をなす所あつた」。

調査後梅原氏は『人類学雑誌』第31巻第10号の雑報欄に「常陸吉田村古墳の彫刻の一に就て」とする一文を掲載した。そこでは壁画のモチーフの一部、柴田氏がいわゆる消化器形埴輪との相似を指摘した壁画最左の線刻（第5図2）について、熊本県千金甲第3号墳の石屋形奥壁の線刻との類似性を指摘し、「両者に直接関係ありと云ふものでは勿論ない」とはしながら、「遠く離れた常陸と肥後にかく類似のものがあるのは興味ある事である」と述べ、その系譜的な連関について一定の注意を払った。

また、線刻の意味するところについては、「一寸斧らしく見え、恰も是を袋に入れた様な形を呈して居る」と想定している。

また梅原氏が興味を示した石室の構造については、京都府小野毛人と吉田古墳の間に、石室の規模

・切石による構築・半地下式石室などの類似点が認められるとした。前者は敷石を伴う板石構造の竪穴式石室であり、677年という造営年代も一段階新しく現在の視点から見れば異なる要素も多いが、終末期古墳の石室構造の知見が少なかった当時にとっては「殆ど符節を合する様である」と認識されていた。

第4項 史蹟名勝天然記念物に指定

大正11(1922)年3月8日、吉田古墳は内務省告示第49号を以て史蹟名勝天然記念物に指定された。

史蹟名勝天然記念物保存法は大正8(1919)年に交付された我が国初の文化財保護のための法律で、内務省が所管した。同法にもとづいて史跡等の指定を審議する調査会が組織され、三上参次氏・黒板勝美氏・荻野仲三郎らが委員に委嘱され、考古学者としては柴田常恵が唯一、考査員として参画した。以後柴田氏は史跡関係の仕事を専掌し、第2回の指定(大正10・1921年)から積極的に考古学関係の遺跡を積極的に取り上げている。

吉田古墳を最初に学界に報告した柴田氏が考査員になったことが、同古墳の指定に強く影響したことは想像に難くない。事実、吉田古墳は第3回という早い段階で指定になっている。

内務省の報告には「古墳や横穴に彫刻の施さるゝもの、間々存せざるにあらざれど、畿内及び中国方面に存する二・三例を除ては殆んど九州地方に於てのみ見らるゝ所で、未だ関東地方に此種の存するを知らない。然るに吉田古墳に於て其事あるは、たとへ其封土は貧弱なりと雖も、学術上考査の資料として尊重すべきもの」と評価されている(内務省1927)。現在茨城県下では22例の線刻・採色された石室が発見されており、福島県などと共に東国の装飾古墳のなかで中核的な位置づけがなされているが、指定当時、県下の装飾古墳は太師唐櫃古墳(かすみがうら市、採色壁画)と吉田古墳の2例しか発見・報告されておらず、線刻壁画としては東日本唯一の事例であった。

この内務省報告では、墳丘の現況・石室の構造・線刻壁画について詳細に記されている。内容は柴田氏の報文とさほど変わるものではないが、墳丘の断面図及び石室実測図・拓本がはじめて掲載されている(第5図3)。

また、線刻が奥壁だけではなく、東側側壁に「短き三線を交叉して女字形の彫刻」があることをはじめて記し、「一種の戯れに過ぎないかと考へられる」としている。なお現在は西壁にも「×」字状の線刻があることが知られているが、それに関する記述はない。

第5項 高橋健自『日本原始絵画』の刊行

昭和2(1927)年、帝室博物館の高橋建自氏が『日本原始絵画』を刊行した(高橋1927)。この書は「専門芸術としての絵画が大陸から我が国に伝はる以前に自ら我が国土に醸成されたそれがどんなものであつたかを紹介すべく」編まれたものであり、土器・銅鐸・埴輪・鏡・装飾古墳など幅広い図文について詳細に考察を加えられている。吉田古墳は「第3章 古墳墓の壁画」中の「武器」の項で取り上げられ、奥壁壁画が図版として掲載されている。柴田氏・梅原氏が提示したものとは若干異なっているため、高橋氏自身も現地では採拓あるいは実測調査した可能性がある。

とくに壁画最左のモチーフの下部の二つの図文についてはじめて触れ、右側を軛、左側を燧と推定した。また壁画正面の靱の両脇の幅広のモチーフについては、「原始的武器の一なる棒の類」と推測している。

かかる高橋氏の説については、その後しばらく研究者間では膾炙されなかったようである。本文献を装飾古墳研究のなかで再評価したのは斎藤忠氏であり、氏は「この考察は、有職故実にも明かった高橋健自にして、はじめてなされたものであり、興味ある見解であったが、その後、何人も、この燧袋説については触れるところがなく、現在に至っているのである」と述べている（斎藤1989）。

第6項 『東茨城郡誌』の刊行

大正年間には県史・市史・郡史・町村史の編纂事業が全国的に活発に展開された時期である。吉田古墳のある東茨城郡においても、昭和2（1927）年11月、東茨城郡教育会の事業として弓野国之介氏（いばらき新聞記者）の編になる『東茨城郡誌』が刊行された（東茨城郡教育會1927）。本書は上下巻で20編・約1800頁からなる、当時の県下における自治体史としては大部のものである。下巻第18編は墳墓の項では、古墳・中世墳墓・近世墳墓に細目され、郡内の主要な墳墓が紹介されている。

吉田古墳については「吉田の数塚」という項目で述べられている。ここでは、史蹟である吉田古墳の記述はごく簡単なものであるが、墳丘断面について詳細な図が掲載されていることが注目される（第5図4）。

また本書で特筆されることとして、壁画のある古墳、すなわち吉田古墳第1号墳以外の、周囲にある古墳についても、簡単な記述がなされていることが挙げられる。これまで柴田氏や内務省報告においても、吉田古墳は古墳群であるとの認識がなされていたが、ほかの古墳についての具体的記述はなかった。しかし本書では、第1号墳のほかに4基の古墳について所在地及び現況、規模、出土品等について記しており、墳丘の多くが失われた現在にあって、その記述は大変貴重な情報である（第7章参照）。自治体史という性格上、吉田古墳に対する主体的な研究姿勢は薄いものの、吉田古墳を「群」として捉え、それを積極的に記述した姿勢は、現在の視点からみても高く評価されよう。

第7項 鳥居龍蔵氏の調査

『東茨城郡誌』刊行から一ヶ月を経た昭和2（1927）年12月18日、東京帝国大学人類学教室の鳥居龍蔵氏が、吉田古墳を訪れ、現地調査を行った。笠間神社の塙瑞比古氏・矢田正三氏が案内し、また画家の田中嘉三氏を伴っての調査である。調査は「茨城県聴の許可を得て、この壁画をこれまでよりも最もよく拓本し、且つこれを出来得るだけ完全にスケッチにした」ようである。なお前日には筑西市の装飾古墳である船玉古墳をはじめ調査しており、船玉・吉田の二古墳についての報文は翌昭和3（1928）年、『武蔵野』誌上に2号にわたり掲載された（鳥居1928）。

実際、鳥居氏の報告は詳細を極めた。石室を改めて実測し、その側面図・平面図を図示し（第5図5）、また画家の田中氏による線刻壁画のスケッチが掲載された（中扉参照）。

特に奥壁壁画については、一つ一つのモチーフについて考察している。ことに奥壁中央及び最右に

描かれた矢羽根については、円羽根であることに注目し、それをモンゴル及びトルコの民族事例と比較し「若しも土俗学的に今これを見やうとすれば、彼等ウラルアイ民族のうちに尚ほ窺ふことが出来る。この理由に據て常陸古墳の箭の羽根は蒙古人・土耳其人と等しい分布域内にあると云つてよい」と位置づけた。

さて、鳥居氏はさらに壁画中央の両脇に位置する幅広のモチーフについては、大矛としている。そして最左のモチーフについては、革製の鞘に収まった鹿角製剣頭とし、類例として「肥後の横穴」に彫刻された刀の拓本を図示している。これは熊本県玉名市のナギノ7号横穴の奥壁に陽刻された大刀である。革製の鞘については、中央アジアの箭袋を類例に挙げ、「常陸のそれは、また普通の箭筒でなく、箭袋の様なもので、その中に刀剣なども入れたのであらうか」とも述べている。

さらに鳥居氏は、その下の二つの丸い小さなモチーフについて着目し、右の湾曲しているほうを革製の鞘に、左の楕円形のほうを「火打金・火打石などを入れた火打袋の類ではなからうか」とし高橋建自氏と同様の見解をしているが、火打ち袋に関しては一步踏み込んで「当時にあつては、実際の発火用よりも、寧ろ宗教的のものであつた様に思はれる」と考察した。

このように奥壁にいくつもの武器・武具類を刻んだ意味については、「大いに考へねばならぬ」とし、「石槨内死体の傍に矛・箭・箭筒その他の武器を埋葬したのと同一意味であつて、これ等は一は死者が夜見の国に行く必要品であるとともに、また一方這は死者を守護する大切な神秘的器具であつたのである。これ等はマモリホコ・マモリユミヤであつて、石槨内の死者をして安堵せしむる大切なものであつたのであらう」と具体的に述べている。そして最後に「斯く考えて来ると、奥壁に彫画せられた諸武器はその配列位置から見ても、当時にあつては実に尊厳なる宗教的儀式を示すものであつて、吾人は轉た我が上代人の宗教心にうたるゝ感がひき起こさるゝのである」と位置づけて結んでいる。

この鳥居氏の論文は、奥壁壁画のモチーフについて、民族学・考古学の事例及び『記』『紀』に記された文献史学の事例を駆使し、広範な視点から具体的に考察した点において、非常に説得力のある内容といえる。もちろんその論の前提として、石室と壁画の詳細な図を掲載したことも学問的手続きとしての的を得たものである。そしてその位置づけについては、古墳時代の他界観を強く意識したものとなっており、これも従前の考察から一步踏み込んだものとなっている。

かかるグローバルな視点からの考察は、当代随一の人類学者として名声の高かった鳥居氏の面目躍如たる感がある。

第3節 戦後

戦後の吉田古墳の調査・研究は、大きく3つの研究動向に整理できる。ひとつは、開発事業の増大に伴う装飾古墳の相次ぐ発見と共に、装飾古墳研究が活発化していき、そのなかで吉田古墳の壁画が

論じられるというものである。二つ目は、茨城県下の考古学的研究が本格化するに伴い、地元研究者が吉田古墳の性格を解明すべく調査・研究するという方向である。そして三つ目は、装飾古墳という特性からではなく、県下の終末期古墳研究のなかで吉田古墳を位置づけようという方向である。

以下、この3つの研究動向ごとにその研究史を整理する。なお本節では、現在の視点からの研究史の整理という立場上、次章にて報告する吉田古墳の第1次調査も含めて述べることにしたい。

第1項 装飾古墳研究の中の吉田古墳

戦後の研究動向 戦後の装飾古墳の全国的な研究動向については、斎藤忠氏によって既に述べられているところである(斎藤1989)。そのなかで斎藤氏は戦後の研究動向の流れを5つにまとめている。的確な整理であると思うので、まずは以下に確認しておきたい。

- ①装飾古墳について、優れた写真家や美術専門家による撮影・模写等の技術に基づいて資料集成し、考察を加えた著書が活発に刊行された。
- ②絵画の技術や図文そのものの内容—直弧文や三角文など—について新たな研究がなされた。
- ③調査・研究・保存に自然科学の技術—顔料分析や赤外線カメラなど—が積極的に導入された。
- ④高松塚古墳壁画の発見以後、装飾古墳の性格・系譜について大陸との関連を求める視点が強くなり、大陸の壁画古墳との比較研究が活発化した。
- ⑤装飾古墳への保存・修理事業が活発化した。

このうち、吉田古墳については①と②の流れのなかで取り上げられてきたといってよい。

1970～80年代の著作 とくに①に関しては、グラビアを随所に盛り込んだ著作が、1960年代～70年代を中心に多く編まれた。主なものとして、小林行雄編『装飾古墳』(小林1964)、斎藤忠編『古墳壁画』(斎藤1965)、日下八光『装飾古墳』(日下1967)、森貞次郎『装飾古墳』(1972)、佐賀県立博物館『装飾古墳の壁画』(佐賀県立博物館1973)、乙益重隆編『装飾古墳と文様』(乙益1974)、水尾比呂志『装飾古墳』(水尾1977)、玉利勲『装飾古墳』(玉利1978)、藤井功・石山勲『装飾古墳』(藤井・石山1979)、国立歴史民俗博物館『装飾古墳の世界』(国立歴史民俗博物館1993)、飯山信一編『古代の装飾壁画』(飯山1997)、日下八光『東国の装飾古墳』(日下1998)などが挙げられる。

このような多くの著作が、主に一般読者向けの著作として刊行された背景には、文化庁から委託された日下八光氏による一連の壁画模写の成果をはじめとする⑤の保存・修復事業とそれに伴う③の自然科学技術の導入、④の高松塚古墳・虎塚古墳の発見など、①～⑤の要素が複合的に絡んでいることは勿論である。

さてこのうち吉田古墳については、小林行雄編『装飾古墳』、斎藤忠編『古墳壁画』、乙益重隆編『装飾古墳と文様』、藤井・石山『装飾古墳』、国立歴史民俗博物館『装飾古墳の世界』、日下八光『東国の装飾古墳』などで触れられている。

小林行雄編『装飾古墳』 本書は、写真家である藤本四八氏の撮影になるグラビアが随所に盛り込まれ、また全国の装飾古墳を集成しその概要を簡潔にまとめており、装飾古墳を把握するに極めて理解しやすい構成となっている。吉田古墳の概要は小林行雄によってまとめられている。各モチーフに関

する解説は従来の諸説を紹介したものがほとんどであるが、中央の靱の下部の八の字状の図文については携帯用の紐と想定しており、これは新たな視点であった。

斎藤忠編『古墳壁画』 本書では全国の主要装飾古墳の解説のなかで、川上博義氏によって吉田古墳が概説される。ここで川上氏は吉田古墳の測量図をはじめて提示し、「最近の調査によって、東西約8m、南北約9m、高さ1.7mの方形墳であることが判明した」と新知見を披瀝した。このことについては第2項において改めて記したい。

乙益重隆氏編『装飾古墳と文様』 本書では、吉田古墳について「武器・武具で護られた墓室」という項目のなかでその図文について渡辺一雄氏による解説があり、中央の靱の両側に配された幅広のモチーフについては、熊本県千金甲3号墳の奥壁の図文を類例に出し、弓の表現ではないかと述べている（渡辺1974）。

藤井功・石山勲氏『装飾古墳』 本書では文様の解説のなかの「具象図形」のなかで触れられ、壁画の写真が掲載されている。

国立歴史民俗博物館『装飾古墳の世界』 本書は1993年に開催された国立歴史民俗博物館の特別展に際し刊行された図録である。装飾古墳をめぐる多くのテーマ（模写、保存活動、自然科学、造形・モチーフ、装飾古墳以前・以後、地域性、系譜論、東アジアの壁画、ヨーロッパの壁画、文献史学からの解釈、民族学からの解釈など）について論じられ、また全国の主要装飾古墳77例の概要、全国の装飾古墳一覧、主要文献目録が盛り込まれるなど、当時における装飾古墳研究の到達点が示されている。吉田古墳は主要装飾古墳の概要の中で杉山晋作氏によって触れられ、壁画の構図が虎塚古墳のそれと通じるところがある、と述べられている（杉山1993）。

日下八光氏の研究 壁画の模写を通じて装飾古墳の研究・保存活動のなかで大きな足跡を残したが、東京芸術大学名誉教授で日本画家の日下八光氏である。吉田古墳については『東国の装飾古墳』で個々のモチーフについて述べられている。各モチーフの意味するところは、これまでの見解を支持しているが、とくに靱に注目し、「このように筒型で上部が傾斜しているものは稀で、福岡県の珍敷塚古墳と、その近くの原古墳の二例だけで、筑後川中流域だけに存在するものである。（中略）九州のものに互いに類似点を持つことは、相互の交流を考えるうえで興味ある問題である」と評価した。

また氏は刀子・靱の写実的な表現に対し、銚の稚拙な表現にアンバランスさを指摘しつつ、「画題から判断すれば六世紀とみても良い物をえがいているが、表現に厳しさがなく、石室を構築している石材の加工法、墳丘等から、7世紀代のものと解される」と、画家としての視点からの評価も加えた。

斎藤忠氏の研究 ②・④の動向については、斎藤忠氏の装飾古墳にかかる一連の著作・研究活動があり、装飾古墳研究のなかで欠かせない業績として位置づけられる。斎藤氏の装飾古墳に関する著作としては『装飾古墳の研究』（1952）、『日本装飾古墳の研究』（1973）、『装飾古墳の系譜』（1989）、『古墳文化と壁画』（1997）が挙げられる。うち吉田古墳については、とくに②の図文の詳細な研究のなかで、靱・刀子・銚・火打ち袋について取り上げられている。

事例の多い靱については、長方形箱形のもの（A類）、長方形箱形で上が斜めになるもの（B類）、長方形箱形で且つ鼓銅状を呈するもの（C類）、奴舩形のもの（D類）の4類型に分類し、吉田古墳の

鞆はA類に位置づけた(斎藤1973)。この伝統的な図文を壁画のモチーフとして採用した理由としては、一に死者の供献のため、副葬品の代わりに用いた、とする考えと、二に呪性あるものとし、死者を護る破邪の役割を果たした、という考え方の二つを想定しているが、個々の事例の分析から「その思想的な背景にもまた複雑なもののあることを知らねばならない」と述べた(斎藤1989)

また火打ち袋に関しては、吉田古墳の図文を火打ち袋であると考察した高橋建自氏の見解(高橋1927)について、虎塚古墳の図文の比較検討から説が強まったとし、高橋説を卓見として再評価した。

第2項 地元考古学研究者による吉田古墳の調査・研究

測量調査 大正～昭和初期の吉田古墳の調査・研究は、前節でみてきたように主に東京帝国大学、京都帝国大学などに所属する研究者によって行われてきた。これに対し戦後の吉田古墳に関する調査・研究は、地元研究者による取り組みが主体であったとって過言ではない(もちろん、かかる動向はひとり吉田古墳のみではなく、茨城県の考古学研究全般にあてはまることである)。

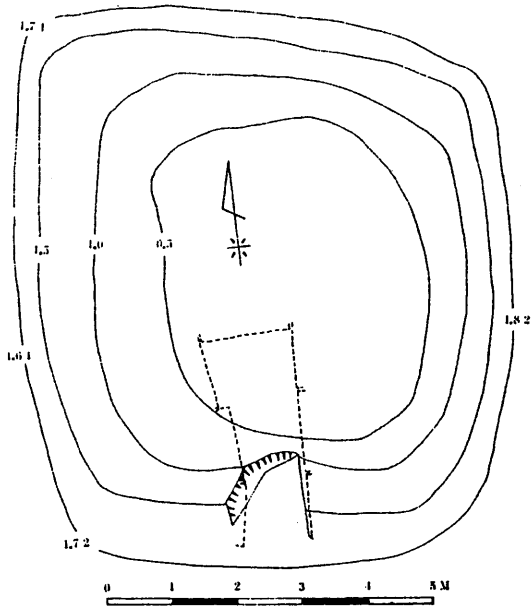
昭和39(1964)年、川上博義氏・相田公平氏・諸星政得氏らにより、吉田古墳の墳丘・石室・壁画の測量調査がなされた(川上1965・川上ほか1972)。石室の実測図はこれまで作成された実測図のなかで最も詳細で、後の吉田古墳の石室の図版の多くは、このときの実測図が用いられている。

さてこの調査で最も注目されたのは、墳丘の測量調査である。川上氏らは「50cm間隔で入れたコンターはいずれも円墳の可能性は完全に否定しており、若干の乱れはみられたが一様に方形を呈していた」と述べ「測量の結果は従来、円墳と考えられていた墳形が方墳である可能性が強く指摘されるにいたったのである」(川上ほか1972)として、吉田古墳が円墳ではなく方墳であるという重要な見解を提示された。このとき示された測量図(第6図)は、明らかに東西8m、南北9mの規模をもつ方形を呈しており、以後「吉田古墳＝方墳説」はほぼ定説となった(なおこの定説については、今回実施した第2次調査の結果、再検討せざるをえない状況になった。このことについては第7章において述べる)。

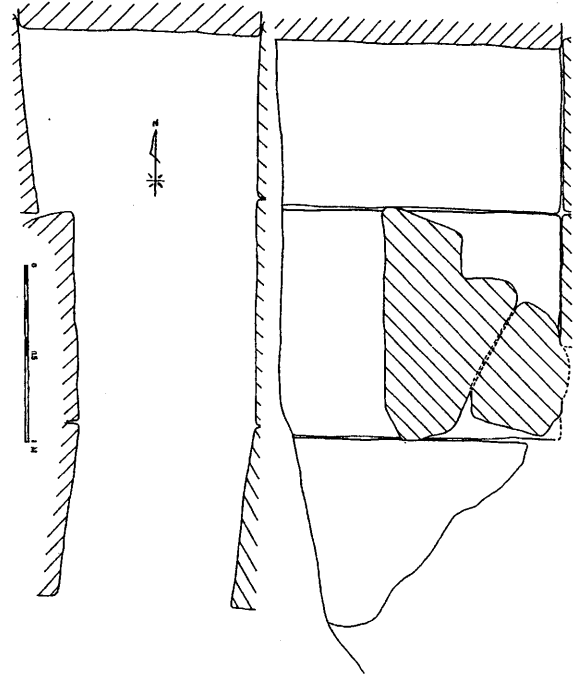
第1次調査 測量調査から10年後の昭和47(1972)年、水戸市教育委員会によるはじめての発掘調査が実施された。この調査は吉田古墳環境整備計画に伴うもので(第1章参照)、墳丘・石室・壁画の測量調査及び、墳丘・石室前庭部及び周溝のトレンチ調査が実施された。この調査では第4章で示すように、いくつかの重要な知見がもたらされたものの、報告書が未完のまま調査担当者である伊藤重敏氏は他界され、長い間その結果が公表されなかった。30年後の平成15(2003)年、当時の調査員であった瓦吹堅氏によりその概要がはじめて示された(瓦吹2003)ものの、その間の装飾古墳研究・終末期古墳研究の進展のなかで、第1次調査成果が反映されなかったのは遺憾といわざるをえない。

『茨城県史料』の刊行 昭和49(1974)年、茨城県史編さん事業に伴い『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』が刊行された(茨城県史編さん原始古代史部会編1974)。本書は茨城県内における古墳時代の資料を集成・掲載し、さらに研究史・各時期における概観などをまとめており、当時の県下における古墳調査・研究の到達点を示すものであった。

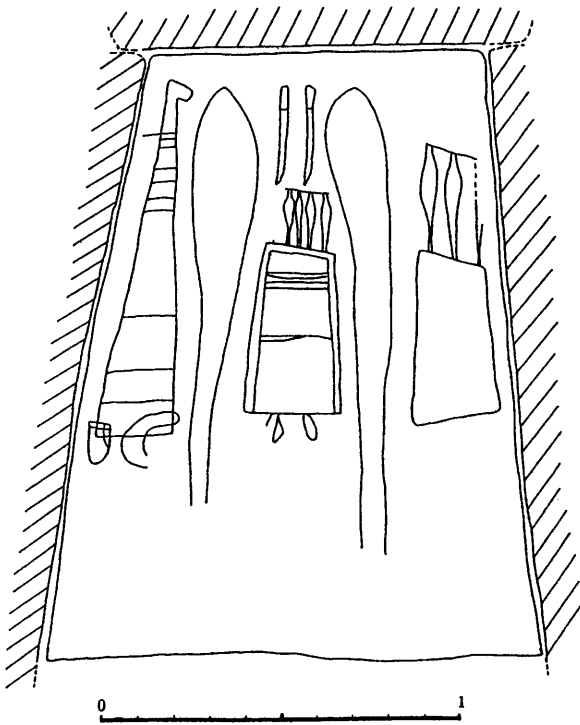
吉田古墳については大塚初重氏が「これらの古墳を7世紀第にまで降すことは、内部構造の所見か



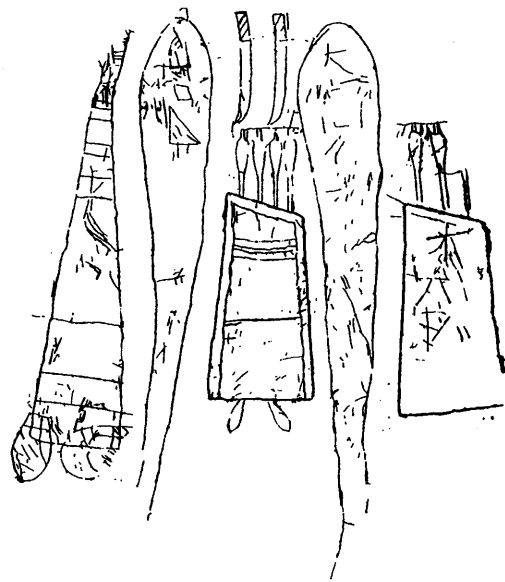
1. 墳丘測量図 (川上ほか 1972)



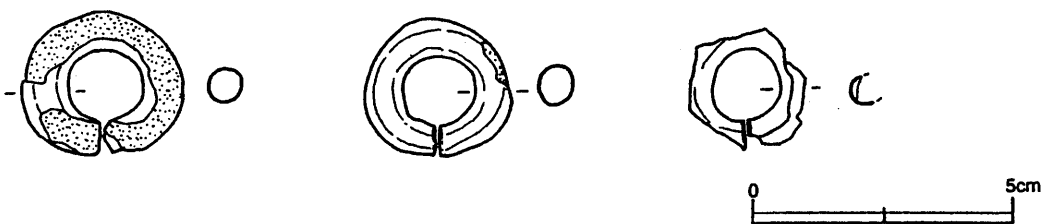
2. 石室実測図 (川上ほか 1972)



3. 奥壁壁画 (川上ほか 1972)



4. 奥壁壁画 (齋藤 1973)



5. 出土銀環実測図 (瓦吹 2003)

第6図 戦後の調査

らは無理であろう」と、古墳の年代観について述べているほか、斎藤忠・川上博義の両氏がその概要をまとめている。掲載図版は川上氏らの実施した測量調査をもとにした墳丘と石室の実測図及び、写真図版として壁画の写真と拓本が掲載された。

古墳出土遺物をめぐる議論 古墳出土の遺物については、柴田常恵氏の報告以来、文中で触れられてはいたものの、具体的な議論はなされてこなかった。出土遺物はかつて茨城県立教育参考館（現水戸第二中学校）に陳列されていたが、昭和20（1945）年8月の米軍による空襲により焼失したことも、その大きな原因であった。

しかし出土品の一部が、土地所有者の加藤氏によって保管されていたことが、郡司良一氏によって報告された（郡司1962・1979）。そのうち「金環」とされるものは水戸市博物館に移管され、現在に至っている。この「金環」はのちに瓦吹堅氏によって詳細な報告がなされ、「銀環」であることが確認された（瓦吹2000）。

また瓦吹堅氏はこの報文中及び瓦吹2004において吉田古墳の研究史についてはじめて詳細に纏められ、とくに出土遺物についての各研究者の記載について違いが認められることを表を用いて提示し、「吉田古墳から出土した副葬品については不明な点が多」とされている。これは現在でも同じ状況であり、吉田古墳をめぐる調査・研究の課題の一つとして挙げられよう。

水戸市立博物館『装飾古墳』 平成2（1990）年7～8月、水戸市立博物館において『装飾古墳―地下を彩る名画の世界―』と題する特別展が開催された。この展示は茨城県下の装飾古墳をはじめ、関東・東北の主要な装飾古墳のパネル・拓本・出土遺物を一堂に展示したもので、図録（水戸市立博物館1990）とあわせて、当時の東国における装飾古墳研究の現状をよくまとめたものであった。

吉田古墳については銀環と拓本が展示され、図録では概要及び巻末に川角1951「吉田古墳発見に就て」が再録されている。

川崎純徳氏の装飾古墳研究 常陸の装飾古墳研究のなかで忘れることのできない業績として、川崎純徳氏の一連の装飾古墳研究が挙げられる（川崎1982, 1988, 1990, 1991など）。氏の装飾古墳研究にかかる論点は多岐に渡るが、その主体となる方法論のひとつは、図文の詳細な分析から、その歴史的背景を導きだそうとするものと理解している。常陸の装飾古墳の図文が九州のそれに系譜が求められること、その分布が九州に出自をもつ多氏の東国進出の軌跡に符号することはかねてより指摘されてきたことであるが、それを川崎氏は改めて具体的に示し、7世紀代に国造制のなかで中央集権体制を推し進めた大和政権の政治的趨勢のなかに積極的に位置づけた。

とはいえ、川崎氏は図文を単なる政治的性格のもとに理解しているわけではなく、墓制という保守性、そして古代人の死生観＝「常世」を表象するものとして捉えている。

かかる視点のなかで氏は吉田古墳の図文を分析し、新たな解釈を加えた。それは奥壁中央の靱の両端にある、幅広のモチーフである。

川崎氏は「これを「生命の源泉」であると考えており、壁画図文の精髓をなすものであるとして重視したい。吉田古墳の図文は明確なイニシエーションを意味するものであり、被葬者の再生を期待するための具体的な表現であると思われる。（中略）「生命の源泉」を示す銚状の線刻の左右に、さまざま

まな武器・武具類が描かれている。しかし、図文は強い分割力は示されていない。むしろ一つにまとめられているように、直刀・大刀・靱・刀子などが配置されている。気枯れた被葬者は再び強大な武器・権力を有する支配者としてよみがえるという祈りが込められているのだろう」（川崎1982）と述べている。

この図文の意味するところが単なる武器・武具の一種なのか、それとも古代人の心性を表象する図文なのか、現在得られている資料からではそれを立証することはできまいが、さきに触れた日下八光氏が、銚状の図文とその他の図文の間にアンバランスさを指摘したように、単なる武器・武具としては不自然な描き方であることは事実として認識してよいだろう。そしてそこに古代の精神世界を読みとった川崎氏の解釈法は、「生命の源泉」であるかどうかは別にして、基本的に支持できるものと考える。

第3項 終末期古墳研究の中の吉田古墳

茨城県における終末期古墳の研究は、さきに触れた装飾古墳を中心とした研究動向のほか、石室構造・横穴墓の構造に関する研究も比較的進んでいる分野である。吉田古墳もこの中で取り上げられることが多い。先行研究としては石川1989、稲村1991、阿久津・片平1992、生田目1996・2005などがある。

これらは墳形、出土遺物、石室の使用石材、玄室規模と平面形、玄門の構造等の要素を総合的に判断し、その変化から編年を組み立てたものである。これらの成果をまとめた生田目氏は、茨城県北部の石室の変遷を6期に分け、そのなかで石室に凝灰岩の大形切石を用い、玄室の平面形が長方形ないし縦長逆台形を呈し、奥壁に1枚の台形の石材を配して、側壁が奥壁を挟んで内傾し、立面形が台形を呈するという、茨城県北部に特徴的な形態の横穴式石室を「北常陸型横穴式石室」と呼称した（生田目1996）。この型式の石室は生田目編年でいうⅢ期、最後の前方後円墳が築造され、埴輪が消滅した直後の時期に確立したとされる。虎塚古墳・大平古墳を指標とする。暦年代は6世紀末から7世紀初頭である。

吉田古墳は、生田目編年Ⅳ期の指標型式のひとつとして取り上げられる。Ⅳ期の特徴は、単室・両袖型・玄室規模が拡大し、平面形は縦長逆台形で、側壁は左右同数・同規模。奥壁の台形化が著しくなり、側壁の内傾が強くなる。羨道部にも大形切石が用いられ、平面形は方形を呈し、前室化する。装飾古墳は採色から線刻に変化する、としている。ひたちなか市金上古墳、東海村諏訪間12号墳などを指標としている。築造年代は7世紀前葉としている。

かかる編年は他の先行研究もおおむね同様の見解を示しており、現段階における統一見解といつてよいだろう。そしてこれらの研究は編年だけではなく、吉田古墳のように破壊が進み正確な構造・規模が現況において不明確な事例の場合、本来の石室構造を推測復元する上での指標としても、重要な成果として位置づけられよう。（関口）

第4章 吉田1号墳の第1次調査

昭和47（1972）年の第1次調査は、第1章第1節にて述べたように「第1次環境整備調査」として4月28日から5月8日までの11日間実施した。その調査範囲は指定地番内の調査であり、周溝調査で墳形を明確に確認することができなかつたように、充分なものではなかつた。しかし、主体部の計測により、保存に向けた多くのデータを得ることができ、さらに埋め戻しによって壁画は現状のまま保存された。

ここで、第1次環境整備調査の概要について記述する。

第1節 調査・整理の方法

第1次環境整備調査は、方法的に一般的な発掘調査の方法と変わるものではないが、墳丘・周溝・石室などの部分ごとにその調査の状況を記述する（第7図）。

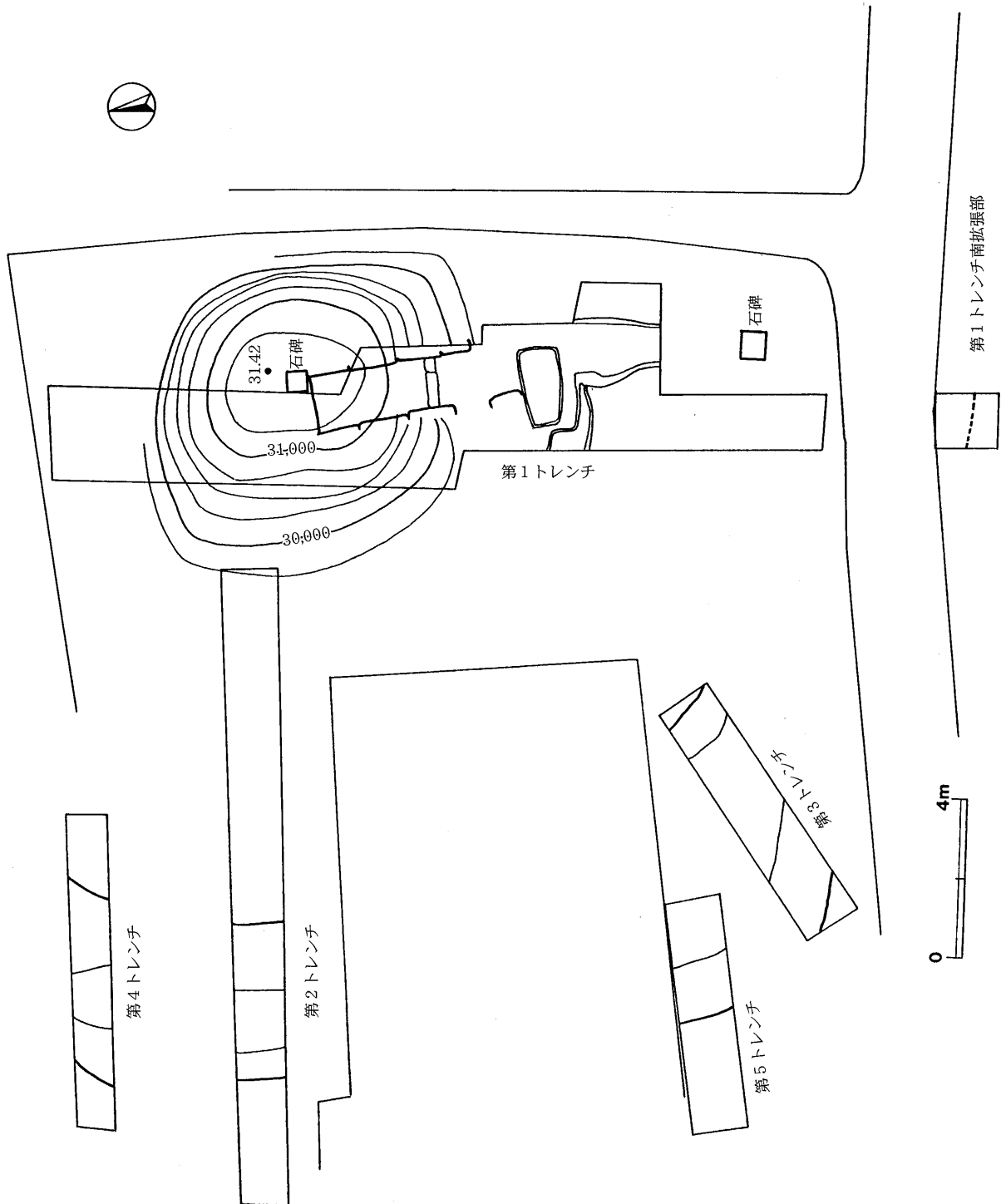
第1項 墳丘

墳丘部の封土については、第1トレンチの主体部にかかる部分の北側においてその状況を観察した。そのほかの墳丘部については、調査トレンチは設定していない。これは、調査終了後に墳丘を現状に戻すという整備目的のためであり、部分的な調査となった。

第1トレンチ北側でも、墳丘の掘削はかなり行われたようであり、墳頂部分から約3.5mしか墳丘は現存せず、表土部分も全体的に30cmほどの攪乱を受けている。

第2項 周溝

国指定地内で、当古墳の墳形や規模を把握するため、南部に第1トレンチ（幅1.5m、長さ9m）、西部に第2トレンチ（幅1.5m、長さ16.5m）、南西部に第3トレンチ（幅1.5m、長さ7m）を設定して周溝調査を実施した。第1トレンチでは、周溝が確認されなかつたため、道路を挟んだ南側に延長トレンチ（幅1.5m、長さ2.6m）を設定した。さらに墳形を明確にするため、南西部の第3トレンチの北に第5トレンチ（幅1.5m、長さ6m）、北西部に第4トレンチ（幅1.5m、長さ6m）を設定して調査を進めた。第2・3・4・5トレンチでは周溝を検出しているが、第1トレンチ南拡張部では、周溝の外辺部と考えられる立ち上がりが見出されただけで、結果的に墳形を明確にすることはできなかつた。しかし、各トレンチで見出された周溝の検討から、内辺径約25m、外辺径約33mの円墳、あるいは方墳という規模については確認することができた。しかし、明確な墳形については、指定地以外の部分の調査を実施しなければ判明しないことも確かである。



第7図 吉田古墳全体図 (S=1/160)

第3項 石室

石室の調査は、西側側壁の奥から2枚目が倒れていたため、修復することを目的に南北方向に設定した第1トレンチの墳丘部で調査を実施した。西側側壁の外側を掘り下げて側壁を立て直し、天井石は奥壁側1枚を残して手前側を一次除去し、内部の調査を進めた。

調査の結果、側壁は玄室内で各3枚、羨道部で3枚あったものと推定され、東側壁では玄門部側壁の上部が欠損し、羨道部に残る1枚の側壁も下部の50cmほどが残るだけであった。西側壁は、羨道部では1枚だけが残っている状態であり、掘り起こされたものと考えられる。

玄室内部の床は、大正3（1914）年の発見以来何度も掘削されたようで、凹凸が見られた。羨道部の調査によって拳大の礫が部分的に検出されたことから、本来、床一面に礫が敷かれていたものと考えられるが、玄室内では礫は検出されておらず、すべて玄室外へ排除されたものと考えられる。石室内の調査では、遺物の出土を予想して調査を進めたが、まったく検出することはできなかった。

これまで、当古墳の出土遺物についての報告がなされているが、報告者によって多少の違いが見られ、「金環、鉄屑」と加藤徳之助によって報告されたものは、耳環や鉄鏃などと考えられる。

羨道部や前庭部についても調査を実施したが、攪乱を激しく受けており、前述したように羨道部の側壁も除去されたり、破壊されていることが判明した。

第4項 壁画

奥壁に線刻された壁画は、発見当時から武器・武具を中心に描かれたものであり、注目されてきたが、落書きが激しく、線刻も不鮮明な部分が見られたが、採拓と原寸での実測、さらに写真撮影を実施した。

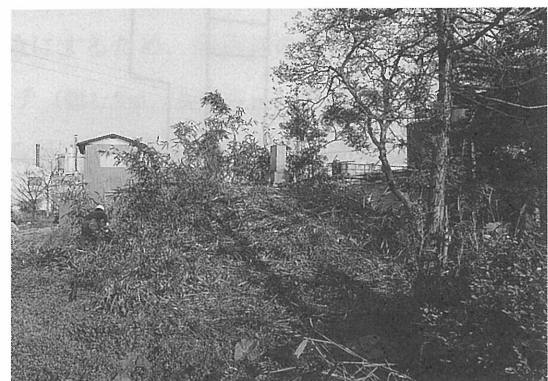
第5項 整理作業

第1次環境整備調査にかかわる整理作業は、実質的に実施されていない。

第2節 調査の経過

1972年4月28日（金）晴 調査参加者は午前10時に吉田古墳に集合し、墳丘及び周辺部の草刈作業を実施する。その当時の吉田古墳は藪化しており、指定地境の柵も破損している状態であった（挿図写真1）。

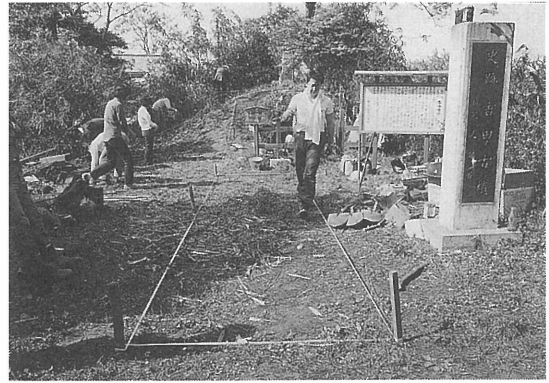
地形測量に際しては、元吉田町荒谷所在の四等三角点（茨252）から、墳丘麓の南東部に仮原点（コ



挿図写真1 吉田古墳の状況

ンクリート杭上) 移動を、水戸市土木課蒔沼係長ほか2名に委託した。移動後、墳丘測量を開始する。また、石室と周溝調査のため石室の主軸に合わせて開口部南に第1トレンチを設定し、発掘を開始し、墳丘測量も併行して実施する(挿図写真2)。

午後3時、瀬谷義彦教授(茨城大学考古学同人会顧問)現地視察。



挿図写真2 第1トレンチの設定

1972年4月29日(土)快晴 第1トレンチの調査を終了するが、全体的にトレンチ内にはかなりの攪乱が認められ、周溝は確認されなかった(挿図写真3)。墳丘の西側にも周溝確認のための第2トレンチを設定し、調査を進める。第2トレンチでは、墳丘裾部から10mほど西の表土層の下に、幅約4m、深さ約0.5mの周溝を確認する。また、石室内部の土砂を排土する作業を開始するが、石室床には礫床などは認められず、遺物等も検出されない。



挿図写真3 第1トレンチの調査風景

1972年4月30日(日)快晴 昨日に引き続き、第2トレンチで確認された周溝の調査を進め、底面まで完掘する。第2トレンチにおいても、上層部にはかなりの攪乱が認められた。その後、第1・2トレンチの土層断面図を作成する。石室の倒れかけていた西側壁石を復元して作業に支障がないようにするため、第1トレンチを北の墳丘部まで延長して西側壁部を露出させる作業を進める。

午後、西宮一男氏(茨城県教育庁文化課)現地指導のため来遣。

1972年5月1日(月)雨のち曇 朝から暴風雨のため、宿舎において図面整理作業を実施する。午後、墳丘部を縦断する第1トレンチ延長部の調査に重点をおく。午後2時より、横須賀工務店の協力を得て天井石を除去し、倒れている奥壁から2枚目の西側壁を元に戻す作業を実施する。

郡司良一氏(茨城県文化財指導員)、広瀬栄一氏(石岡市文化財保護委員)現地視察。

1972年5月2日(火)晴 石室内の土砂除去作業を進める。墳丘に設定された第1トレンチの北延長トレンチは、ほぼ完掘する。その結果、墳丘部における表土層にも、30cm以上の攪乱が認められた。

1972年5月3日(水)晴 南西地区に周溝確認のための第3トレンチを設定し、調査を実施する。また、石室内部の実測作業も開始し、墳丘部の土層断面図作成作業も開始する。

古墳を中心とした周辺部の地形測量を実施する。また、第1トレンチを道路の南側(明利酒類側)に延長して調査を進める 休日のため見学者が多く、午前中は説明などのため作業に多少影響する。

1972年5月4日（木）晴 南西地区に設定した第3トレンチに幅約5.5mの周溝が確認され、完掘後土層断面図を作成する。第1トレンチの南に設定した延長部では、周溝の外堤部状の落ち込みが確認されたが、道路は調査ができず、土層断面図を作成する。

第1トレンチ南延長部、第2トレンチ、第3トレンチで確認された周溝を検討したが、まだ墳形が不鮮明であり、さらに指定地内で墳形を明確にするため、第2トレンチの北に第4トレンチを設定して調査を進める。

昨日に引き続き、石室内の実測と全体測量図作成のための地形測量を実施する（挿図写真4）。

1972年5月5日（金）雨のち曇 夕方豪雨 明日午後1時から開催する現地見学会のための諸準備を午前中に行う。また、奥壁部の線刻画のシリコン・コピー作成を委託した木津一夫氏（二紀会茨城支部長）によって、型取り作業が行われる。

第1トレンチ延長部を埋め戻し、第4トレンチ完掘後に周溝などの土層断面図を作成する。

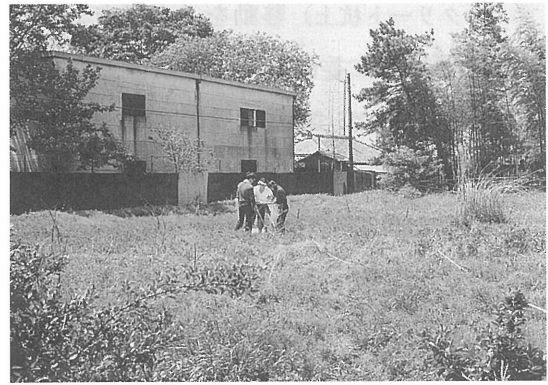
第4トレンチで確認された周溝や各トレンチで確認されている周溝の検討から、墳形がまだ不鮮明のため、第3トレンチと西側の民家との間に第5トレンチを設定して調査を進める。

壁画のシリコンによる型取り作業は、雨の強まった夕方までかかり完成する。

1972年5月6日（土）快晴 石室内の実測作業を進め、前庭部や羨道部を精査する（挿図写真5）。第5トレンチでは周溝の外辺部が検出され、完掘後に土層断面図を作成する。また、第4トレンチでは土層断面図を継続して作成する。

午後1時からの現地見学会は、壁画の公開と説明を中心に実施したが、研究者や市民約400人が参加した（挿図写真7）。

1972年5月7日（日）快晴 石室内の実測を継続して実施し、壁画を採拓する（挿図写真6）。羨道部の精査の結果、拳大の敷石が部分的に確認され、玄



挿図写真4 地形測量風景



挿図写真5 実測風景



挿図写真6 採拓作業風景

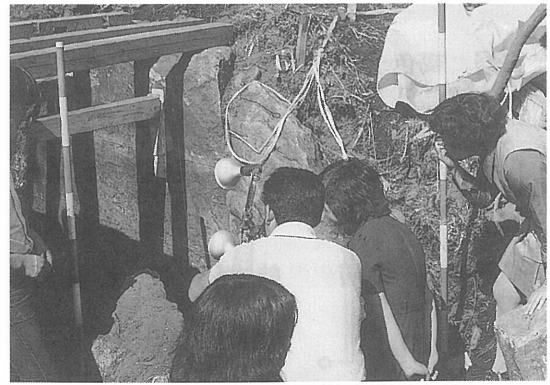


挿図写真7 現地見学会風景

室内にも当初は敷石が存在した可能性が想定された。

墳丘部の土層断面図作成作業終了後、墳丘部の埋め戻しを実施する。また、古墳周辺部の地形測量を継続して実施する。

1972年5月8日（月）晴 午前10時から、木村市長ほか関係者約30名で鎮魂式を執り行い、式後、最終的に石室・前庭部などの実測や、奥壁の採拓作業を実施する。



挿図写真8 現地見学会説明風景

午後3時から横須賀工務店の協力を得て天井石を旧状に戻し、砂で玄室内を埋め戻す（挿図写真9、10）。奥壁の壁画は、落書きがあるものの密封することができ、今後明確な整備計画が策定された段階で開封されることになる。また、墳丘も旧状に戻し、各トレンチも埋め戻す。以上の埋め戻し作業で第1次環境整備調査は終了した。



挿図写真9 石室埋め戻し風景（1）



挿図写真10 石室埋め戻し風景（2）

第3節 基本層序

第一次環境整備調査の際、基本層序の確認を目的とした調査は実施していないが、墳丘部分における旧表土層の検討などから、基本的には5層に分層することが可能であるが、墳丘以外の調査における分層が色調を基準としているため、同じ土層が自然堆積と人為堆積の双方にあるなど不都合な分層結果が出てしまった部分もある。

基本的な層序は下記のとおりであるが、各遺構部分における土層番号とは異なる。

- I層 黒色土層 墳丘下における旧表土層で、層厚は18～45cmとやや幅が認められる。周溝確認トレンチでは確認されていない。
- II層 暗褐色土層 墳丘下における旧表土層の下部に堆積した土層で、層厚は10～35cmである。周溝確認トレンチでは、同色の土層が認められるが、それらは二次的に流入して

堆積した土層である。

- Ⅲ層 褐色土層 Ⅱ層下に認められる層厚22~40cmの土層で、後述するⅣ層あるいはⅤ層上部を覆う土層であり、周溝確認トレンチでも一部確認されている。
- Ⅳ層 明褐色土層 ローム層の上部に認められる層厚20cm前後の土層で、第2トレンチの墳丘に近い部分で確認されている。
- Ⅴ層 ローム層 前述したⅢ・Ⅳ層下にローム層が認められ、層厚については下部の調査を実施していないため不明である。墳丘断面などから見ると、標高29.0mラインがほぼローム層上面であり、周溝確認トレンチにおいては検出されたローム面とほとんど差は認められない。

第4節 発見された遺構

ここでは、第1次環境整備調査において検出された遺構について概観する。

第1項 墳丘

現存する墳丘を測量した結果、現存する墳丘は東西軸約8.0m、南北軸約8.5mの隅丸形状を呈し、墳頂部高は31.42m、墳丘裾部29.75mほどで現丘の高さは1.67mであることが判明した。その形状から見ると、東は農道のため削られでコンタ幅が狭く、南東部でのコンタ幅はやや緩やかである。西側においてもコンタ幅はやや広く、北では狭いものとなっている。

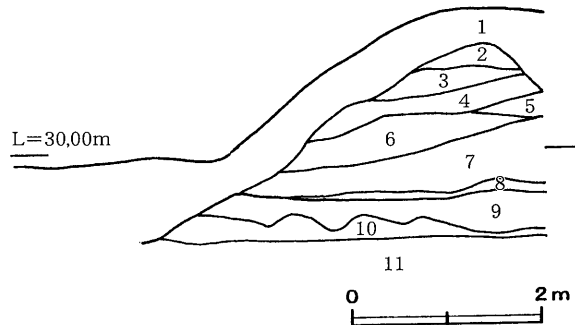
墳丘西側の第2トレンチで確認された周溝から見ると、墳丘部は約9mも削平されたものと考えられ、墳丘もかなり低くなったものと想定できる。また、南北の墳丘断面の盛土下の旧表土の検出から、旧表土を約30cm削り出して盛土したものと推定することができる(第8図)。

第2項 周溝

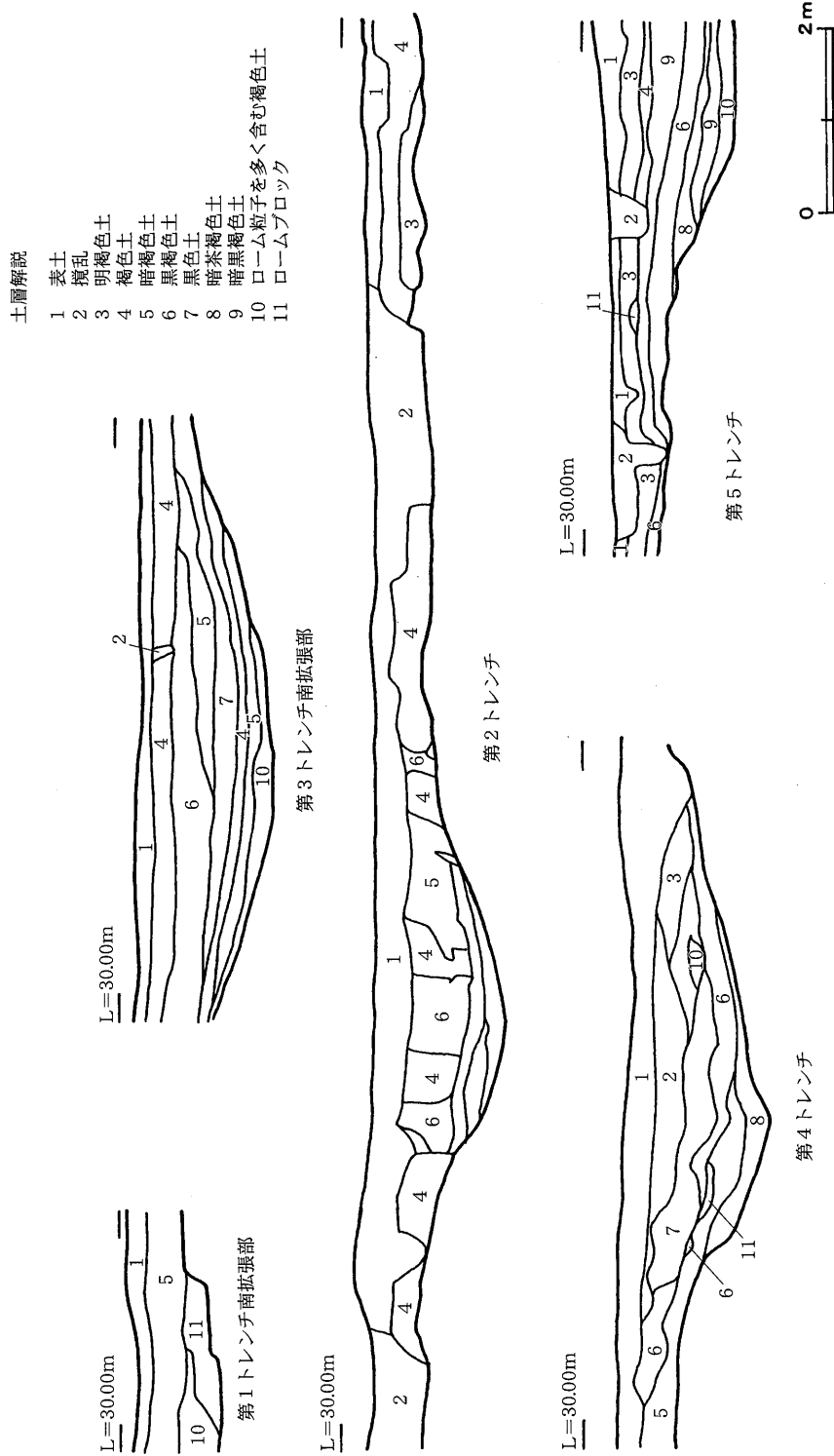
第1トレンチ南拡張部 第1トレンチの道路を挟んだ南側に幅1.5m、長さ2.6mで南拡張部を設定して周溝を追及した。第1トレンチ内で周溝は確認されていないが、拡張部分で、北へ傾斜を示す周溝の外辺部と考えられる落ち込みが検出された。しかし、明確な落ち込みではなく、表土下30cmからロ

土層解説

- 1 表土(攪乱)
- 2 ロームブロック
- 3 黄褐色土
- 4 褐色土混りロームブロック
- 5 ロームブロック混り暗褐色土
- 6 ロームブロック混り黒褐色土
- 7 ロームブロック混り黒色土
- 8 粘土・ロームブロック混り黒色土
- 9 黒色土(旧表土)
- 10 暗褐色土
- 11 ローム



第8図 墳丘断面図 (S = 1 / 80)



第9図 各トレンチ内周溝土層断面図 (S=1/80)

一層を掘り込んだ25cmほどの深さのもので、南側にロームブロックの堆積が見られ、周溝の外辺部からの土砂の流れ込みの可能性が高い。

第2トレンチ

当トレンチで確認された周溝は、幅約4m、深さ約0.5mであり、褐色土から掘り込んでいる。周溝下部の覆土は、レンズ状の自然堆積の状況を示しており、墳丘側からの流れ込みと想定され、上層部は不自然な堆積状況を示している。また、周溝は現存する墳丘裾部から約9m離れて検出されており、住宅建設などによってすでに墳丘がかなり削平されたものと考えられる。また、周溝の立ち上がりは、内辺部が緩やかである。

第3トレンチ 当トレンチ内では、周溝の内辺部と外辺部の一部が検出された。トレンチの設定方向が、民家のため制約され、約6mと幅の広い感じがする周溝となっているが、第1トレンチ南拡張部の様相を検討すると、南側では幅が狭くなるものと考えられる。深さは0.8mほどで、自然堆積の状況を示している。また、周溝の立ち上がりは、内辺部が緩やかに立ち上がっている。

第4トレンチ 当トレンチは、第2トレンチの北側の民家との境に沿って設定し、東へ弧を描くように幅約4m、深さ0.8mの周溝が検出されている。土砂の流れ込みは自然堆積の状況を呈しているが、内外交互に土砂が流れ込こんだ様相を呈し、外辺部からの流れ込みがやや多い。また、外辺部がやや急傾斜で立ち上がるのに対して内辺部は緩やかな立ち上がりを示している。

第5トレンチ 当トレンチは、民家と並行するように第3トレンチの北に設定し、外辺部が検出されている。幅は不明であるが、深さは約0.8mであり、自然堆積の状況を示している（第9図）。

第3項 石室

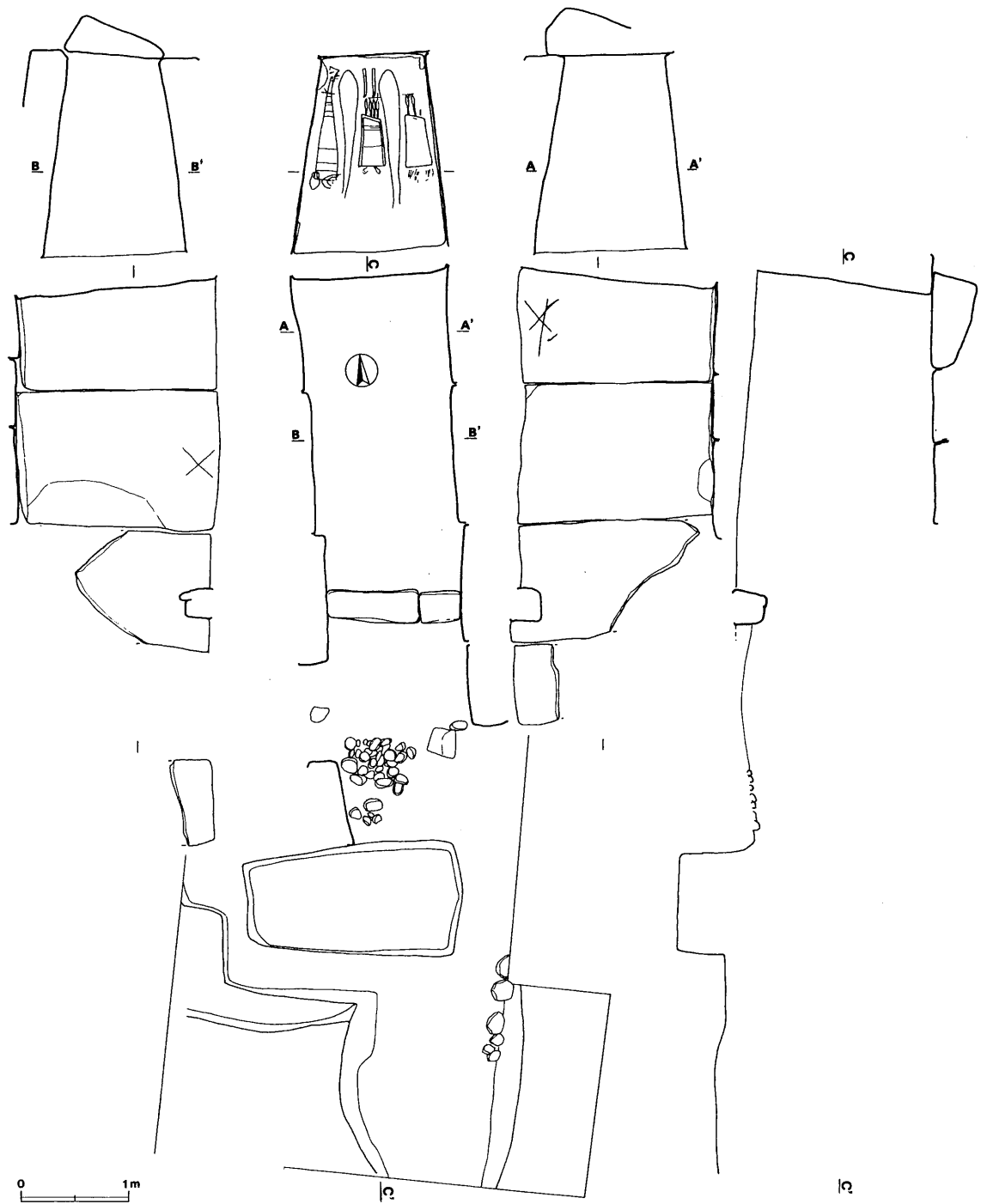
石室は、現丘の南に開口した無袖式の横穴式石室で、主軸方向はN-12°-Eとやや東に振れている。横穴式石室に使用された石材は、すべて凝灰岩質砂岩の切石であり、全長約5.4mを計る。

玄室の長さは2.98m、奥壁幅1.45m、玄門部幅1.26mほどであり、線刻壁画のある奥壁は、多少前に倒れており、高さ1.85m、下幅1.40m、上幅0.94mの板状を呈している（第10図）。

東側壁は長形状の板石3枚が並べられ、奥の側壁は下幅1.10m以上、上幅0.85以上、高さ1.76m、中央部の側壁は下幅1.60m、上幅1.42m、高さ1.74m、南の側壁は下幅1.08m、現存高1.60mほどで、上部は削り取られて三角形を呈している。中央部の側壁が最大のもので、下部には記号のように「×」と線刻されている。

西側壁も3枚の板石が並べられ、中央部の側壁が東側壁に倒れ掛かっており、南の側壁も上部を削り取られて倒れた状態であった。奥の側壁は、下幅1.10m以上、上幅0.88以上、高さ1.78mである。中央部の側壁は、下幅1.28m、上幅1.22m、高さ1.86m、南の側壁は下幅1.25m、現高1.20mほどで、これらは従来の状態に戻して計測しているが、中央部側壁の下部にも「×」印状の線刻が認められる。東側壁でも中央部のものが最大で、これらの板石は、いずれも30~40cmの厚さである。

玄門部には、石は見られず、榎石は長方形の切石を2個で玄室と羨道部を区切り、一部に閉塞石の残骸が残っていた。



第10図 石室実測図 (S = 1 / 60)

羨道部は、多く攪乱を受けているため不鮮明な部分もあるが、長さは2mほどであり、中央部幅は1.05mほどと推定される。側壁は、現存していないものもあるが、東西ともに3枚の切石による側壁があったと考えられ、いずれも1枚が現存しているが、上部は削り取られている。また、西側に拳大の敷石状の礫が認められたが、現室内から除去されたものと考えられる。

前庭部も攪乱のため不鮮明な部分があるが、幅0.7mほどで南に延びる墓道が確認されている。墓道の東壁部には凝灰岩の屑状の塊が検出され、攪乱によるものかあるいは側壁の削り屑なのかは明確にできなかった。

天井石は、奥壁から3枚が確認されているが、南端の天井石は西側壁が傾いたため東側壁に架かっただけであり、本来玄門部にもう1枚の天井石があったものと想定され、前述したように石の存在は不明である。

各切石の目張りには、白色粘土が使用されており、目張りの状況は東側壁部が良好であった。また、石室構築のための掘り方は、全体の調査ではないが、旧表土を南北約5.1m、東西約4.0mの隅丸方形状に0.8mほど掘り込んでいた。

第4項 壁画

奥壁に描かれた線刻画は、武器・武具を中心としたもので、奥壁の下部は40cmほどの空白部分があり、その上部に線刻画が描かれている。開口後の落書きも多く、壁画の不鮮明な部分も見られるが、全体的にはよく旧状を残しているといえる(第11図)。

奥壁中央部には4本の矢を納めた高さ50cmほどの鞆がある。鞆の下部には脚状に二つの突起が見られ、鞆は2~3cmに縁取りされている。また上下二段に直線が引かれ、上部のものは5cmほどの幅もっている。鞆の線刻は、直線的に引かれた部分以外にブレている部分もある。

鞆は東側壁側にも同規模のものが描かれているが、上部の縁取りの一部が認められる以外は不鮮明であり、矢も3本が確認されるだけである。中央部の鞆のように、脚状の突起はなく、縦や斜めの直線が認められるが、その内容については不明である。また、鞆に納められている矢の先端部には、横位の直線が描かれているが、矢の先端部を揃えるためのものか、絵自体を区画するものか不明である。

中央部の鞆の上には25cm前後の2本の刀子が描かれている。切先を下にして刃を東に向け、左の刀子には身と茎との境を示す区線の線が見られるが、右の刀子は不鮮明であり、鞆に納められた状態であろうか。

中央部の鞆と刀子の左右には、広い鉞状の線刻が見られる。左は120cm、右は130cmほどであり、線刻は鞆の輪郭線より細く彫られている。

左端には幅広い鞆尻の拵をもつ大刀と考えられる1.1mほどの線刻が見られる。柄と鞆は鏝と考えられる2本の線で区画され、柄頭には突起が見られることから玉 大刀のような飾り大刀と想定できる。鞆部には縞状の横線が数か所見られ、文様の表現と考えられる。

大刀の鞆尻部にも二つの線刻がある。左側のものは、壺状を呈し、右のものは弧状の形態を呈している。鳥居龍蔵は、火打ち袋と皮製の鞆と想定しているが、明確ではない。

これら武器・武具の線刻は、中央部の靱の輪郭がもっとも太く刻まれ、右端の靱の輪郭もほぼ同様である。しかし、その他の線刻はそれより細く刻まれており、蛇行した線となっている。

その他、前述したように東側壁1枚目下端部には55×30cmの範囲に「~~×~~」、西側壁2枚目下部には30×30cmの範囲に「×」が線刻されており、東側壁のものも本来は30×30cmの範囲に描かれた「×」が基本と考えられる。



第11図 壁画実測図 (S = 1 / 20)

第5節 出土した遺物

第1次環境整備調査において出土した遺物は、ほとんどがトレンチ調査の際に攪乱層から出土した陶磁器・ガラス瓶など近代のものばかりで石室内からの出土も無く、当古墳やそれ以前の時代にかかわる資料は出土していない。 (瓦吹)

第5章 吉田古墳群第1号墳の測量調査

第1節 調査の方法と経過

本調査は、史跡整備に伴い、範囲確認調査をするにあたっての墳丘及び地形測量であり、調査期間は、10月3～7、12～14、19日の計7日間にわたって行なった。

2005年10月3日（月）晴れ 調査初日。9月30日に実施した草刈り後の草を袋詰めして回収した。翌日から測量を開始するために、墳丘上の木の枝を払い、杭設定を行なうための下準備をした。第1次調査時には存在しなかった木が現況での墳頂部にあり、墳丘の土砂が流れて、南北に長い楕円形となっていた。また、墳形や段築の数などについては現況からは判断できないほど、改変を受けていることを確認した。

2005年10月6日（木）曇り時々雨 トータルステーションを用いて、現況での墳頂平坦面を座標の中心にし、開放トラバースで杭設定を行なった。三井 猛氏（有限会社三井考測）の協力を得て、薬王院前に存在するマンホール内にある二等三角点（水戸Ⅱ72）から史跡指定地内までオートレベルを使用して水準点移動をし、ベンチマーク（30.109m）を史跡指定地内の南にある石碑の基礎の上に設定した。その後、平板を用いて10cm間隔でコンタラインを、縮尺1/50で、墳丘の測量を開始した。

2005年10月7日（金）晴れのち曇り、12日（水）晴れ、13日（木）晴れ 墳丘及び周辺の微地形測量を行ない、墳丘の測量を終了した。変形が著しいため、測量図からは墳形・規模を推定することができなかった。なお、現在残っている墳丘の南斜面から地表面にかけての範囲内で、石室の存在が確認できた。また、指定地内の南西側で、地表下に広範囲にわたる砂利を確認した。近隣住民の方によれば、第1次調査の時点で建物があったようで、それに伴うものと判断し、図面上には記載を行なわなかった。

2005年10月14日（金）晴れ、19日（水）曇り 史跡指定地以外の周辺の微地形測量を行ない、全地形の測量を終了する。微地形を明瞭にするために、5cmコンタで測量した。周溝の推定部分にトレンチを4本設定して、調査を終了した。



挿図写真 11 測量調査風景

第2節 調査成果

(付図)

第1次調査では吉田古墳は方墳とされていたが、削平及び改変が著しく、今回の測量調査からは墳形・規模ともに判断できなかった。現況では、南北12m、東西7.6m、高さ1.6mの楕円状を呈する。第1次調査時に、南北約9m、東西約8m、高さ1.67mあったことから考えると、30年の間に墳頂部の土が流れた可能性が高い。いずれにせよ、もとの形状は不明なままである。今回の調査では、墳形を確認することに意味があり、したがって、墳形・規模についての確認は、トレンチ調査に託されることになった。

しかし、周辺の地形的制約から、墳丘の北側・南側にはトレンチを設定できなかった。そのため、第1次調査時の測量図と、方墳という推定のもとに、隅角にあたる部分の南東部と南西部に意識的にトレンチを配置した。また、調査の過程で墳丘の中央から13.5m～17.5m離れた、やや北西側に振れる部分に地表面が若干低くなる場所があった。この凹みは約4mの幅があり、周溝の可能性があるのでないかと推定した。そこで、北西側にもトレンチを設定し、さらに墳丘を挟んで反対側にも同様にトレンチを配置した。

また、今回の調査では、現況の墳丘南斜面から地表面に石室の存在を確認している。第1次調査時に作成された測量図と、今回作成した測量図を重ねあわせたところ、今回確認した石室の位置はやや南方にずれるようである。今後の本調査で確認されるべき問題の一つであろう。 (小野・中尾)

第6章 吉田古墳群第1号墳の第2次発掘調査

第1節 調査の目的と方法

第1項 発掘調査の目的

今回の発掘調査の目的は、大目的としては、史跡整備に向けた基礎的資料を得ることにある。具体的な目標としては、おおむね以下の3点に要約できる。

- 1972年の第1次発掘調査において検出された東側の周溝について、第1次調査よりも広範囲に調査区を設定し、周溝の形状を面的に確認し、古墳の墳形を把握すること。
- これまで確認されていなかった西側の周溝を検出し、推測でしかなかった古墳の規模について、確かな数値を得ること。
- 周溝内から遺物を検出し、年代的指標を得ること。

第2項 発掘調査の方法

発掘トレンチについては、墳丘東側に2本、西側に2本の各4本を設定した。トレンチの名称は、第1次調査のトレンチの名称（第1トレンチ～第5トレンチ）と混同しないよう、前回のトレンチNo.を引き継いで連番にすることとし、第6トレンチ～第9トレンチと称した。来年度以降の調査についても、同様に第10トレンチからふっていく予定である。

なお第12図にあるように、第6・7トレンチと前回調査の第2・第3・第5トレンチは、それぞれ重複する形となっているので留意されたい。

各トレンチの設定方法については以下の通りである。

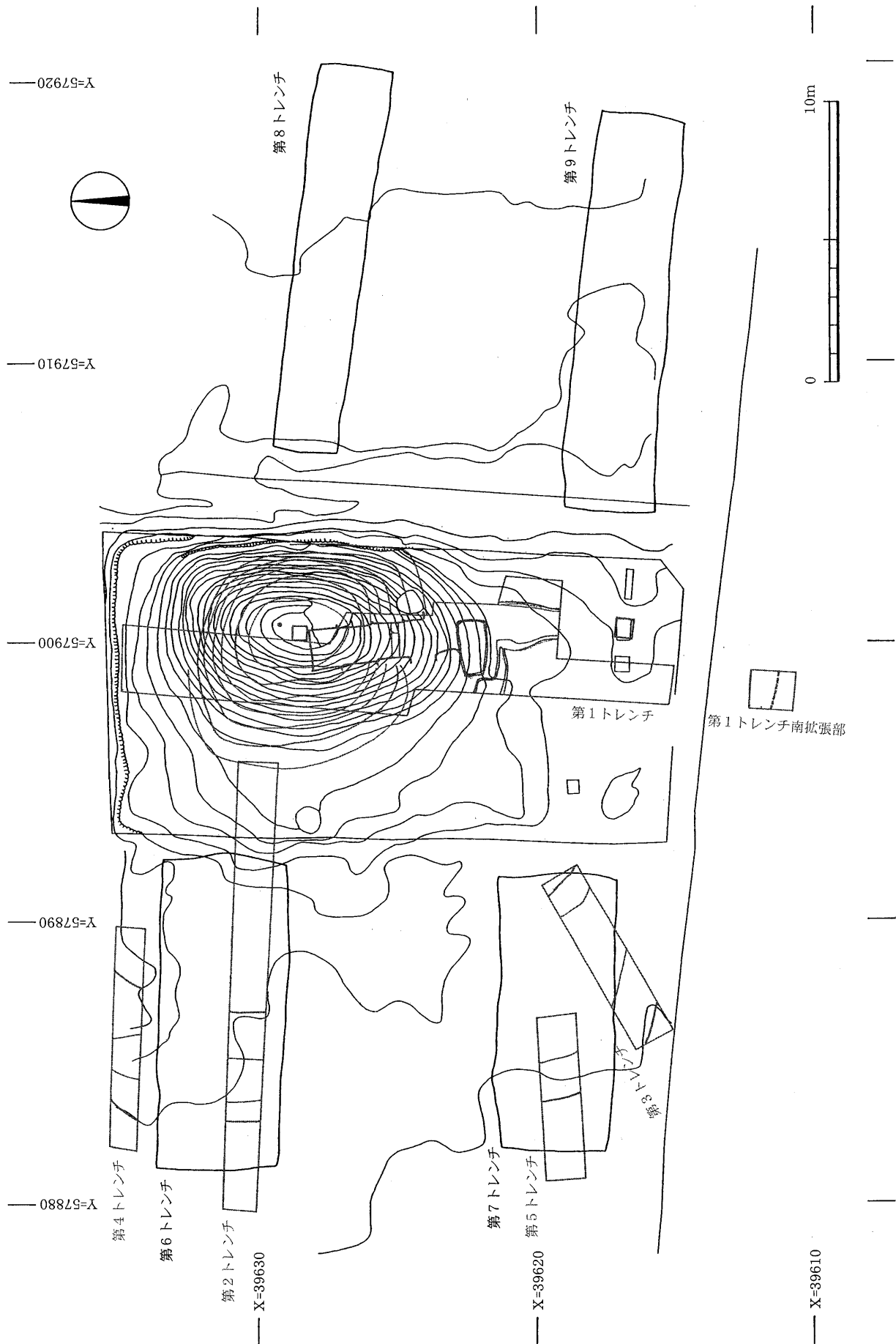
第6・第7トレンチ（墳丘西側） 東側のトレンチについては、前項で示した目的により、第1次発掘調査時のトレンチに重なる形で、さらに広範囲に設定した。

本来であれば周溝のコーナー部分にあたる第4トレンチ付近に広範囲なトレンチを設定すべきであったが、当該地点は宅地の出入り口にあたっているため、その南側に11.4m×4.5m（51.30㎡）の規模で第6トレンチを設定した。

また西南部の周溝コーナー部分を把握するため、第3トレンチと第5トレンチにかかるよう、10.9m×4.1m（44.69㎡）の規模で第7トレンチを設定した。

第8・第9トレンチ（墳丘東側） 西側のトレンチについては、事前の微地形測量調査成果から、微妙な標高差が周溝の痕跡であると予測されたため（第5章第2節）、その部分にかかるよう、東西方向に14.0m×2.5m（35.00㎡）の規模で第8トレンチを、14.4m×3.2m（46.08㎡）の規模で第9トレンチをそれぞれ設定した。

表土掘削は重機（2.5バックホー）によって行い、遺構確認面である関東ローム層上層から人力によ



第12図 トレンチ設定図 (S=1/200)

る掘削を行った。

周溝の調査については、史跡整備を目的とした調査であることから、上面プランによる確認を原則とした。しかし遺構の性格・構築年代・埋没年代等を確認するため、各トレンチに1本ずつサブトレンチを設定し、必要最小限の掘削を行った。

平面図は平板測量により、1/20縮尺で作成した。図根点はトレンチの状況に応じて任意に設定し、後に公共座標第IX系に基づいた観測を行い、座標上にトレンチの位置を載せた。なおこの作業では、測量調査時に使用した図根点もあわせて観測し、公共座標上に載せている。

断面図は第1次調査時のトレンチ・各トレンチの壁面・サブトレンチについて、それぞれ1/20縮尺で作成した。

記録写真については600万画素のデジタルカメラ、35mmカラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。全景撮影は、第6・7トレンチについては荻谷建設株式会社の協力を得、高所作業車上より撮影した。第8・9トレンチについては明利酒類株式会社の協力を得、古墳に隣接する同社工場敷地内のタンクに登らせて頂き、その上から撮影した。

また映像記録として、デジタルビデオによる撮影も適宜行った。

埋め戻しは、茨城県教育庁文化課と協議の上で、周溝に土嚢袋を敷いて養生し、重機により発生土で埋め戻した。

第3項 整理作業

整理作業は現場終了後の2005年11月から2006年3月にかけて順次実施した。この間、市内遺跡の試掘・確認調査等により、作業は断続的な中断を余儀なくされ、必ずしも効率的な整理作業は行えなかった。これは吉田古墳調査に限らず、水戸市教育委員会が主体となり実施した多くの調査にあてはまることであり、文化財保存の観点から深刻な問題となっている。発掘成果の迅速かつ効果的な公開・活用を図るためにも、物的・人的側面から継続・安定した整理作業体制を確立していく必要がある。

以下、遺構・遺物の整理方法について記す。

遺構 遺構については、図面台帳の作成、写真整理などの基礎作業をまず実施した。その後平面図・セクション図・写真記録の3つを相互に検討し、いくつかの図面について修正を加えて掲載した。

遺物 遺物は遺物収納箱にして2箱が出土し、これを水戸市埋蔵文化財整理センターに収蔵し、水洗・注記・接合作業を行った。

出土遺物の注記については全点注記を行っている。注記名は水戸市内遺跡の統一注記方法に基づき、遺跡・地点番号を示す「ミ72-01」の後ろに出土地点（例えば第7トレンチ内攪乱出土の場合は「7Tカク」）を記入した。

実測個体の選出については、周溝内出土遺物および、古墳造営・廃絶に関わる資料を優先的に掲載した。しかしながら出土遺物の大半は攪乱内出土であり、それ以外の遺物は数点程度であった。ただし攪乱内出土とはいえ、出土遺物の様相から客土によるものではなく、おおむね遺跡の土地利用を反

映する資料であると判断したため、縄文～現代の遺物に至るまで、遺存度のよい遺物の多くは掲載した。ただし同一器形・同一意匠の遺物は、遺存度がよくても図化していない。図化した遺物は全て観察表を添え、写真を掲載した。写真撮影は600万画素のデジタルカメラを使用した。

また、出土した全ての遺物について分類・カウントし、第4表に掲載した。

第2節 調査の経過

調査面積にして177.07㎡を開放している。現地調査は2005年10月20日から11月11日の間、土曜・日曜・祭日・降雨による中止等を除く延べ12日間をかけて行った。

2005年10月20日（木）：重機（0.25バックホー）を使用し、第6トレンチ・第7トレンチの表土掘削を行う。両トレンチにおいて、ローム層上面で古墳周溝のプランおよび第1次調査時のトレンチ（第2・第3・第5トレンチ）のプランも検出された。検出状況を写真撮影後、第1次調査時のトレンチの再掘削を人力にて行う。



挿図写真 12 表土掘削風景

2005年10月21日（金）：第8トレンチ・第9トレンチの表土掘削を重機にて行う。両トレンチもローム層上面において古墳周溝のプランが検出された。検出状況を写真撮影する。なお写真撮影は、第6・第7トレンチにおいては高所作業車を使用して西側から撮影し、第8・第9トレンチにおいては、明利酒類株式会社の御厚意により工場敷地内のタンクに登らせて頂き、南側から撮影した。瓦吹 堅氏ほか（茨城県教育財団）来訪。

2005年10月24日（月）：杭打ちを行う。第6・第7トレンチにおける第1次調査時のトレンチ（第2・第3・第5トレンチ）の再掘削完了。併せてセクション図の作成作業を開始する。第9トレンチにおいて、周溝の軸にあわせサブトレンチを設定し、掘削を人力にて開始する。斉藤 新氏（ひたちなか市教育委員会）来訪。

2005年10月25日（火）：第6トレンチ内の第1次調査時のトレンチ（第2・第5トレンチ）および周溝プランの平面図を平板にて作成開始。第7トレンチ内の第1次調査時のトレンチ（第3トレンチ）のセクション図終了。第8トレンチにおいて、周溝の軸にあわせてサブトレ



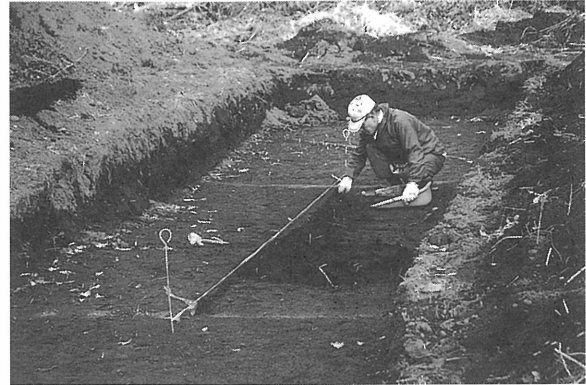
挿図写真 13 第6トレンチ遺物検出風景

ンチを設定し、掘削を人力にて開始する。第9トレンチ内サブトレンチを完掘。写真撮影。測量調査時の杭および平板ポイント杭を公共座標に落とす。川又清明氏（茨城県教育財団）来訪。

2005年10月26日（水）：市内遺跡における試掘・確認調査のため現場中止。

2005年10月27日（木）：第6トレンチの平面図作成終了。第7トレンチ内の第1次調査時のトレンチ（第3・第5トレンチ）および周溝プランの平面図作成，終了。第8トレンチのサブトレンチの平面図および周溝プランの平面図作成開始，終了。第9トレンチのサブトレンチの掘削を継続。併行して第9トレンチの周溝プランの平面図を作成開始。

2005年10月28日（金）：第6トレンチにおいてサブトレンチを設定，掘削を開始。覆土上層にて須恵器破片を検出（遺物No.1）。ドットマップを作成し検出状況を写真撮影後，取り上げる。第7トレンチ内の第1次調査時のトレンチ（第5トレンチ）のセクション図作成，終了。第9トレンチ内サブトレンチの写真撮影。第7トレンチにおける第1次調査時のトレンチ



挿図写真 14 第7トレンチ周溝掘削風景

（第2・第3・第5トレンチ）の再掘削完了。引き続きセクション図作成。第9トレンチ内サブトレンチ掘削を継続。飯島一生氏ほか（茨城県教育庁文化課）・田中幸夫氏ほか（茨城県教育財団）来訪。

2005年10月29日（土）：日高 慎氏（東京国立博物館），清水 哲氏（茨城県教育財団），小野寿美子・中尾麻由実両氏（筑波大学大学院）来訪。現場作業は休日のため行わず。

2005年10月31日（月）：降雨のため現場中止。

2005年11月1日（火）：市内遺跡の立会い調査のため現場中止。

2005年11月2日（水）：第6トレンチ内サブトレンチの掘削終了。第7トレンチ内にサブトレンチを設定，掘削開始。第8トレンチの南壁面セクション作成，終了。第9トレンチ内サブトレンチ掘削終了。青山俊明氏（茨城県教育庁文化課）来訪。

2005年11月3日（木）：祭日（文化の日）。作業は行わず。

2005年11月4日（金）：第7トレンチ内サブトレンチの掘削終了。これにて全トレンチの掘削作業が終了する。第6トレンチの南壁面セクション図作成，終了。同トレンチ内の第1次調査時のトレンチ（第2トレンチ）のセクション図作成，終了。第7トレンチの北壁セクションおよび同トレンチ内サブトレンチのセクション図作成，終了。第8トレンチ・第9トレンチの全景を明利酒類株式会社敷地内のタンク上から撮影。また，古墳墳丘上の枯木について，茨城県教育庁文化課の了解を得て伐採。川崎純徳氏（水戸市文化財保護審議会委員），蓼沼香未由氏（大洗町教育委員会）来訪。

2005年11月7日（月）：市内遺跡の試掘・確認調査のため現場中止。

2005年11月8日（火）：市内遺跡の試掘・確認調査のため現場を朝から一時中断。午後2時より開始

する。第6トレンチの平面図を作成，終了。第7トレンチの平面図を作成。

2005年11月9日（水）：市内遺跡の試掘・確認調査のため現場を朝から一時中断。午後1時より開始する。第7トレンチの平面図作成終了。第8トレンチ・第9トレンチの平面図作成開始，終了。

2005年11月10日（木）：第9トレンチの北壁セクション図作成，終了。全トレンチの土層注記開始，終了。生田目利氏（日立市教育委員会）来訪。吉田小学校の生徒が遠足途中で現場見学。

2005年11月11日（金）：第6・第7トレンチを高所作業車上から全景撮影。これにて全ての調査が終了する。埋め戻しに際しては茨城県教育庁文化課と協議の上，土嚢袋にて周溝を養生し埋め戻しを開始，終了する。機材撤収完了。現状復帰を確認し，すべての作業を終了する。

第3節 調査成果の公開

埋蔵文化財の調査・整理に併せてその公開を積極的に実施することは，文化財保護上自明のことであり，水戸市においても折々の調査の度に可能な限り実施しているところである。吉田古墳の調査についても，当初現地説明会の開催を予定していたが，古墳に至る道が狭小で，なおかつ駐車場の確保が困難であったため，説明会を開催するとかえって混乱を来すことが懸念された。したがって今年度の調査における現地説明会の開催は断念することとなった。とはいえ，来年度以降も現地説明会開催への努力は怠るべきではないだろう。そのためには近隣における駐車スペースの確保・動線設定など，事前に周到な準備計画を進める必要がある。

なお小規模な見学会は可能であったため，調査が終盤を迎えた2005年11月10日，吉田小学校の遠足にあわせて生徒が現場を見学した際，児童向けの説明を行っている。

マスメディアを介した周知活動は，基礎整理が一段落した12月中旬に記者発表を行った（第13図）。調査前の記事も含めて，第2次調査に係る新聞記事は第2表のとおりである。

折しも2005年11月は市内遺跡のひとつ「七面製陶所跡」の試掘・確認調査により近世末～近代に係る窯跡が発見され，新聞やラジオ報道などで大きな話題を呼んだばかりであった。吉田古墳発掘の記事

第2表 平成17年度新聞記事一覧

掲載年月日	新聞名	掲載見出し
2005年8月16日	茨城新聞	「吉田古墳33年ぶり発掘調査 市民活用へ環境整備」
2005年12月17日	茨城新聞	「円形か多角形の可能性 国指定史跡・吉田古墳」
2005年12月17日	毎日新聞（茨城版）	「吉田古墳の測量・発掘 円墳か多角形墳？」
2005年12月17日	常陽新聞	「方墳との定説覆る 水戸の国指定史跡「吉田古墳」
2005年12月17日	東京新聞（茨城版）	「吉田古墳は円墳の可能性」
2006年2月2日	読売新聞（茨城版）	「方墳とされた水戸・吉田古墳 円墳か多角形墳かも」

I層 現代の盛土・攪乱。いわゆる表土層。I a層～I d層に細分される。

I a層 碎石層。

I b層 黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 中量, 炭化物微量含む。締まりやや強, 粘性やや弱。

I c層 黒褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。

I d層 黒色土層 (10YR2/1)。ローム粒子 ($\phi \sim 1\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。

II層 近代か。II a層～II b層に細分される。

II a層 黒褐色土層 (10YR2/2)。ロームブロック ($\phi 10\text{mm}$) 少量, ローム粒子 ($\phi \sim 3\text{mm}$) やや多く含む。締まり・粘性やや弱。

II b層 黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性やや弱。

III層 近代以前。III a層～III b層に細分される。

III a層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。ローム粒子 ($\phi \sim 1\text{mm}$) 多量含む。しまりあり。粘性やや強。いずれも周溝の内側に堆積しており, 一部において周溝内に入り込んでいる部分も見受けられる (第9トレンチ) ことから, 墳丘の裾が崩れた可能性も考えられる。

III b層 黒褐色土層 (10YR2/3)。ロームブロック ($\phi 10 \sim 30\text{mm}$), ローム粒子 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性あり。

IV層 関東ローム層 (地山)。

各トレンチにおける土層堆積は第15図～第18図において壁面のセクション図を示しているので, 詳細はそれを参照されたい。また, 柱状模式図を第14図に示した。これを参照すると, 墳丘西側の a・b 地点と, 東側の c・d 地点において, 表土 (I層) トップとローム層 (IV層) トップの標高に大きな差があることが明瞭にみてとれる。これは, a・b 地点において近～現代の造成が活発に行われ, 現地表が嵩上げされ, 反対に地山 (ローム層) が削平されたことを意味している。

墳丘西側には, かつて木造住宅が建っており, また現在は駐車場として碎石が敷かれるなど, 近～現代において頻繁な土地利用がなされている。発掘調査でも, 攪乱は西側の第6・第7トレンチに顕著であった。反対に墳丘東側は, 第1次調査の時点でも畑地であり, 今回の発掘調査時の所見からも, 土地利用はさほど活発ではなかった可能性が高い。したがって c・d 地点のほうが, より旧地形に近いデータを得ることができるといえよう。

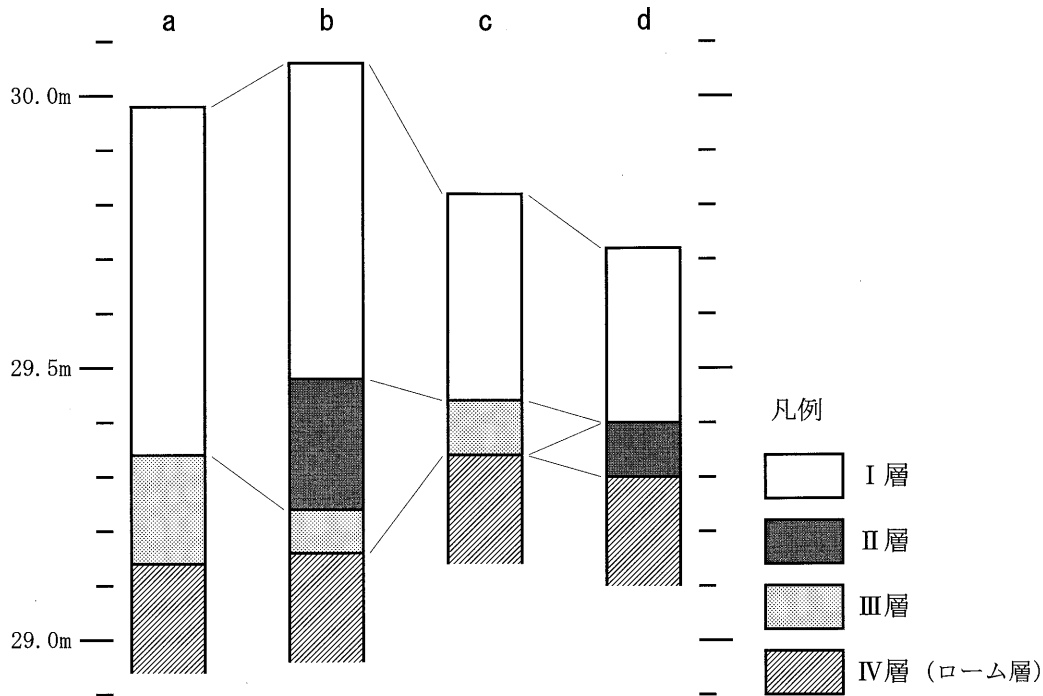
各層の年代については, 出土遺物等の様相から, I層が現代, II層が近代, III層が近代以前と認識している。

I層は a・b 地点と c・d 地点で様相が異なり, 前者は I a・I b層, 後者は I c・I d層となる。前述の如く現代の土地利用の違いが起因していることは確実である。

II層は近代の耕作土の可能性が高い。部分的に確認されており, I層によって削平された部分も少なくないものと思われる。

問題となるのはIII層の帰属時期で, その主体は近世～近代にあるものと考えられる。ただし各層の

説明でも記したように、Ⅲa層は墳丘の裾が崩れた可能性を示す土層堆積状況が数地点において確認されており、留意しておく必要がある。検証には墳丘の土層堆積との比較検討が不可欠であり、可能であれば墳丘から周溝までの通しのセクションを設定し観察することが最も状況を把握しやすい。今後の課題のひとつとして挙げておきたい。



第14図 土層柱状図（観察地点は第15～18図に示した）

第5節 発見された遺構

第2次調査で検出された遺構は、第1号墳に伴う周溝のみである。それ以外の遺構は全く検出されなかった。したがって遺構番号等は付けていない。

周溝のセクション図は、第1次調査時のトレンチの再発掘によってもう一度作成した分も含め計7本作成した。そして各土層断面で確認された覆土の土層注記は、番号を別々ではなく統一することにした。その結果、周溝覆土は以下の1～12層が認められた。なお、以下に示す土層番号は第1次調査時におけるものとは対応していないので注意されたい。

第1層 黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) 中量含む。締まりあり。粘性やや弱。キメ粗。草木の根が腐ったものか。

第2層 黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 1\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性あり。キメ密。

- 第3層 黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) 少量含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ粗。草木の根が腐ったものか。
- 第4層 黒色土層 (10YR2/1)。ローム粒子 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。
- 第5層 黒色土層 (10YR2/1)。ローム粒子 ($\phi \sim 1\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性やや弱。キメやや密。
- 第6層 黒褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) 中量含む。締まり強。粘性あり。キメ密。硬化層。
- 第7層 黒褐色土層 (7.5YR3/1)。ローム粒子 ($\phi \sim 1\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。
- 第8層 黒褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性やや弱。キメ密。
- 第9層 黒褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) やや多く含む。締まりあり。粘性やや弱。キメ密。
- 第10層 黒褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 2\text{mm}$) 多量含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ密。
- 第11層 黒褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒子 ($\phi \sim 3\text{mm}$) やや多く含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ密。
- 第12層 黒褐色土層 (10YR3/2)。ロームブロック ($\phi 10\text{mm}$) 少量, ローム粒子 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性あり。キメ密。

以下、検出された周溝について、トレンチごとの所見を述べることにしたい。

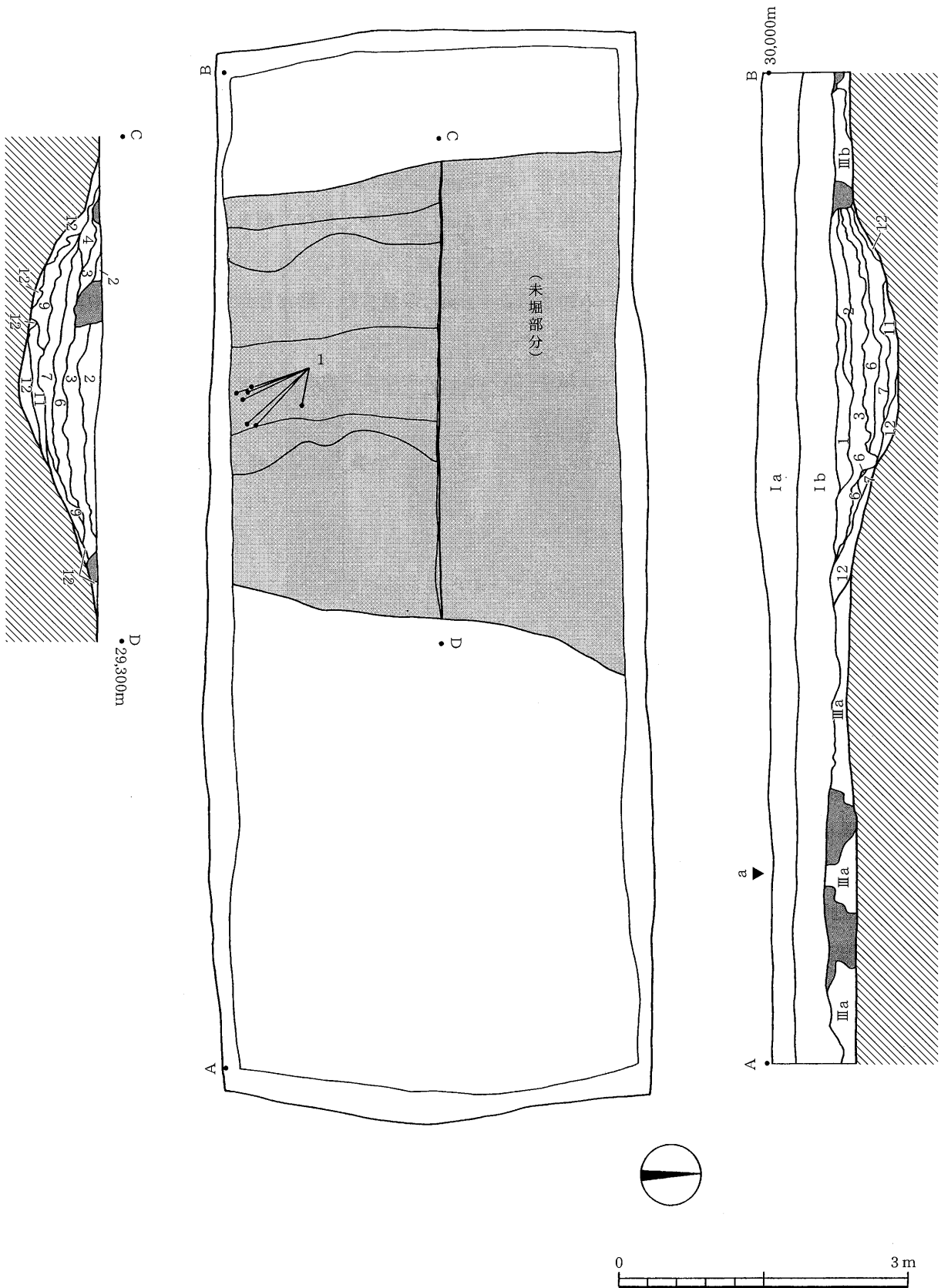
第1項 第6トレンチ検出の周溝 (第15図)

位置・重複関係等 第6トレンチは、墳丘北西隅よりやや南側に、東西軸で設定した。墳形を確認するという調査目的からすれば、本来ならば周溝の屈曲部にあたるもう少し北側に設定すべきであったが、本章第3節第2項でも触れたように本トレンチの北側には人家があり、トレンチの位置をずらすことを余儀なくされた。なお本トレンチには第1次調査時のトレンチである第2トレンチの一部がかかっている。第15図C-Dラインセクションは、第4章で示した第2トレンチのセクション (第9図) の一部に該当する。

周溝は墳頂から約16mの位置 (上面が削平され墳裾・外提が明確に押さえられないため、墳頂～周溝最低部の距離を示す) で検出された。確認面はローム層上面である。小規模な攪乱を受ける。重複する遺構等はなかった。

形態 検出規模は幅5.4m～4.0m, 確認面からの深さは86cmを測る。平面形は、墳裾部のプランと外提部のプランが並行ではなく、前者が約N-7°-E, 後者が約N-5°-Wの傾きを有する。本トレンチの周溝は近～現代において上面がかなり削平されているため、周溝の立ち上がり部分の形状が明確ではない。したがってこの傾きの違いが、周溝の本来の傾きを反映しているかどうかは慎重に判断しなければならないだろう。

断面形は、A-BラインとC-Dラインの断面形が微妙に異なるものの、おおむね墳裾側が緩やか



第15図 第6トレンチ (S=1/60)

な傾斜を持ち、外提側は墳裾側に比べ傾斜角度がきつく立ち上がる。底面は緩いU時型を呈する。墳裾側の立ち上がりにおいて、一部にテラス状の平坦面が認められる。傾斜角度は墳裾側が約 20° 、外提側が約 $10^{\circ} \sim 30^{\circ}$ である。

覆土 周溝は、墳裾側および外提側双方からの流入土により埋没していることがセクション図から窺える。埋没過程としては、

①第11層・第12層（ローム粒子を多量に含む）→②第7層（キメが細かい）→③第6層（硬化層）
→④第3層（キメが粗くボンボン）→⑤第2層（キメが細かい）→⑥第1層（キメが粗くボンボン）

という流れが窺える。ここに挙げた第1・2・3・6・7・11・12層は、後述するすべてのトレンチで検出された周溝で確認され、土層観察上キーポイントとなる層位であるので留意されたい。

さて、前述したように本トレンチでは近～現代の所産であるⅠ・Ⅱ層によって上面が削平されているので、本来の墳裾および外提を確定できなかった。A-Bラインでは周溝がⅢ層を切っている状況が窺える。外提側はちょうど小規模な攪乱が入っており明確ではないが、レベルから考えても周溝がⅢb層を切っていると想定したほうが自然であろう。したがって本トレンチで認められるⅢb層は旧表土の可能性が高い。ただし第8・第9トレンチではⅢb層が周溝をパックしている状況が観察されることから、本層は一樣ではないことが窺える。Ⅲa層は本章第4節で述べたように、墳丘覆土である可能性がある。周溝の掘削による発生土（旧表土およびローム層）を墳丘造成時に用いたと想定するならば、Ⅲa層がローム粒子を多く含んでいることは妥当であろう。

遺物 サプトレンチより7点の遺物が出土している。うち6点が接合する（遺物No.1、本章第6節参照）。木葉下窯跡群産の須恵器で、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の所産である。出土層位はいずれも第3層で、周溝がほとんど埋没した時期の混入である。出土状況に意図的な埋置状態は認められなかった。

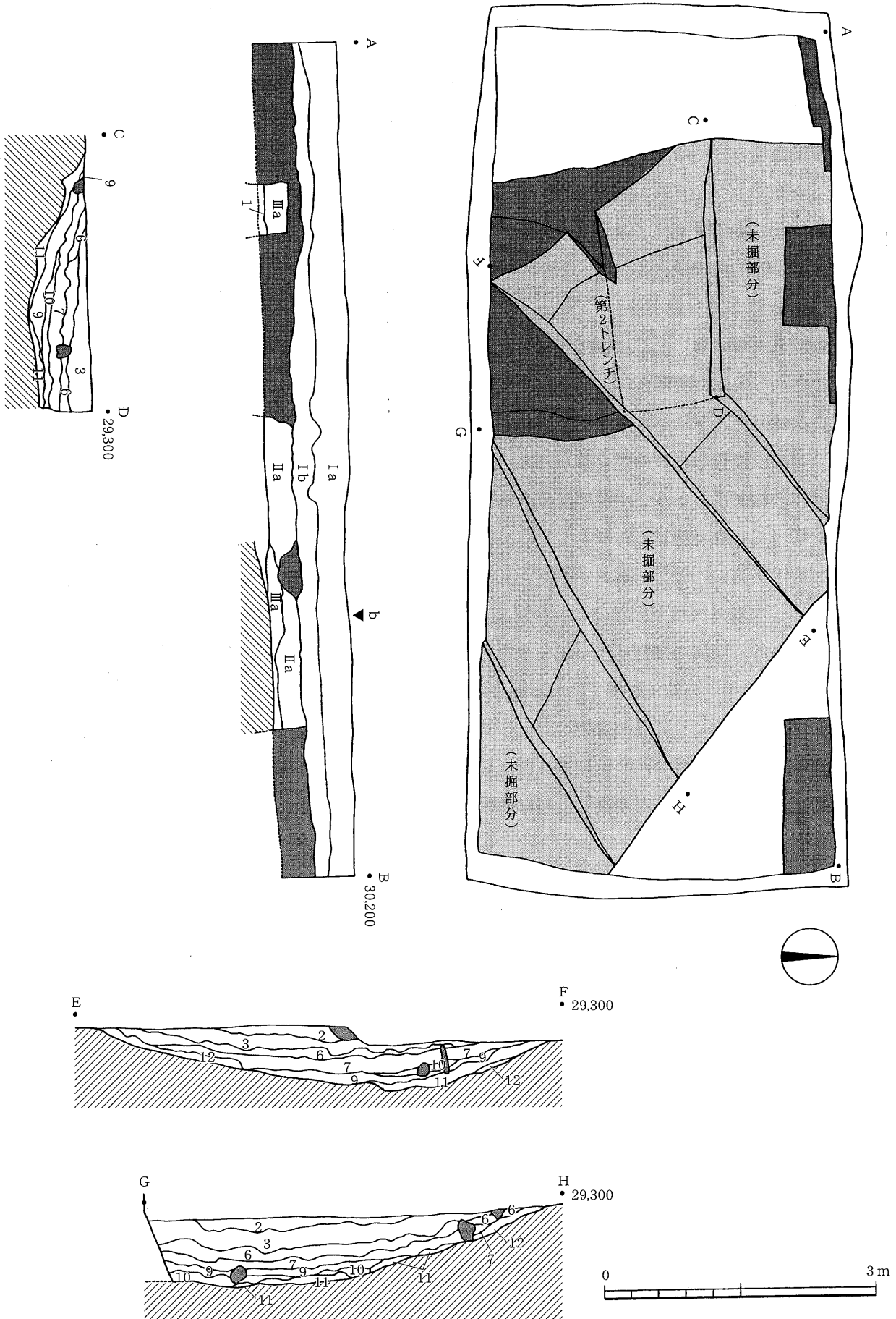
残る1点は9～10cm大の礫である（図示せず）。凝灰岩。人為的な痕跡は認められず、自然石の流入と考えるとよいものと思われる。出土層位は第6層で、埋没時期はNo.1よりやや先行するものの、周溝の埋没がかなり進んだ段階での流入であることが窺える。

時期 遺物No.1の時期から、9世紀前半には周溝がほぼ埋没していた可能性が高い。

第2項 第7トレンチ検出の周溝（第16図）

位置・重複関係等 第7トレンチは、墳丘南西隅に、東西軸で設定した。なお本トレンチには第1次調査時のトレンチである第3・第5トレンチの一部がかかっている。第16図G-Hラインセクションは第4章で示した第3トレンチのセクションに、C-Dラインセクションは第5トレンチのセクションの一部に該当する（第9図）。

周溝は墳頂から約16.5mの位置（上面が削平され墳裾・外提が明確に押さえられないため、墳頂～周溝最低部の距離を示す）で検出された。確認面はローム層上面である。南側の周溝外提部において、おお



第16図 第7トレンチ (S=1/60)

きく攪乱を受けている。この攪乱は第1次調査トレンチを切っていることから、1972年以降の所産である。覆土中からは畳が半分腐った状態で出土しており、恐らく墳丘西側に建っていた民家を解体する際のごみ穴と考えてよからう。

トレンチ北側では、方形の規格的な形状を呈した攪乱が3箇所認められた。これも位置的な観点から、さきの現代民家に伴う何らかの遺構と考えられよう。

形態 検出規模は幅5.1m、確認面からの深さは76cmを測る。平面形は、墳裾部のプランと外提部のプランが併行ではなく、墳裾側が約N-35°-W、外提部北側が約N-5°-E、外提部南側が約N-10°-Wの傾きを有する。ただし外提部南側は攪乱による影響で本来の傾きは失われている。

本トレンチの周溝は第6トレンチと同様近～現代において上面がかなり削平されているため、周溝の立ち上がり部分の形状が明確ではない。

むしろ注目すべきは周溝下端のプランである。墳裾側は約N-35°-Wと上端の傾きにほぼ等しく、外提側は北から南に向かって、N-約24°-Wの傾きから急に折れ曲がるように約N-41°-Wの傾きに変化するという、方形・円形らしからぬ平面形が認められた。狭いサブトレンチにおける所見であるので、その意味するところは慎重を期したいが、第1号墳の墳形を考える上で留意すべき事項といえるであろう。

断面形は、墳裾側が15°～20°、外提側が約16°と、墳裾側に比べ外提側の傾斜が若干急であるものの、双方ともに緩やかな立ち上がりである。緩いU時型を呈する。

覆土 周溝は第6トレンチ同様、墳裾側および外提側双方からの流入土により埋没していることがセクション図から窺える。埋没過程も第6トレンチにおける①→②→③→④→⑤→⑥の流れがほぼあてはまる。

本トレンチの壁面セクション(A-B)は攪乱が著しく、なかなか所見を導くことは難しいが、墳裾側でⅢa層が確認されている。本トレンチで認められるⅢa層は周溝覆土をパックしているように見え、一見第6トレンチで認められた前後関係が逆転している。しかしながらⅢa層と周溝覆土は、Ⅱa層によって上部を削平されている状況が窺えるため、Ⅲa層と周溝覆土の前後関係は本トレンチでは不明としたほうが無難であろう。

遺物 周溝覆土中からは遺物は出土しなかった。

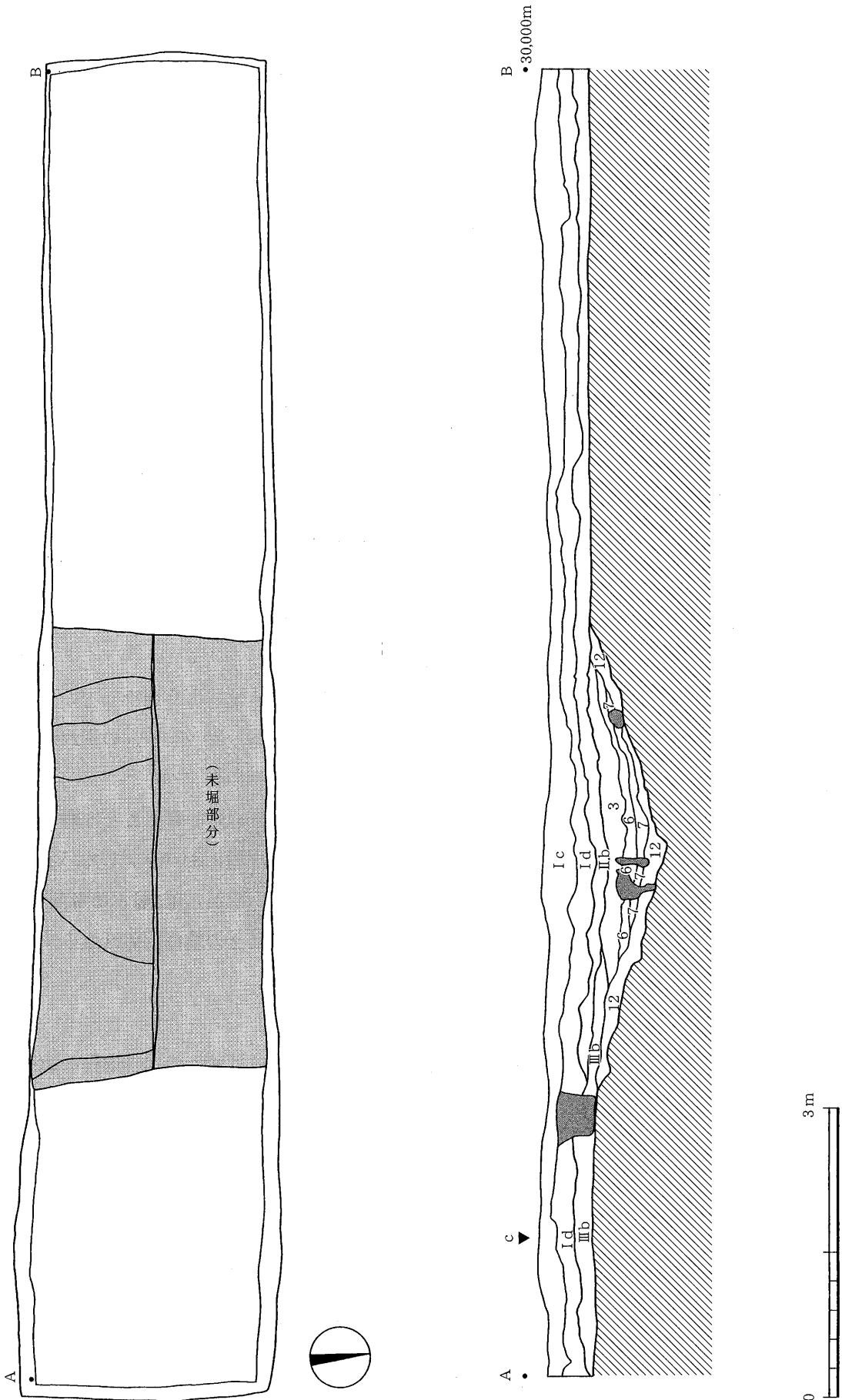
時期 指標となる遺物が出土していない。覆土から第6トレンチとほぼ同時の埋没過程を辿った可能性が高い。

第3項 第8トレンチ検出の周溝 (第17図)

位置・重複関係等 第8トレンチは、墳丘北東隅に、東西軸で設定した。周溝は墳頂から約15mの位置(上面が削平され墳裾・外提が明確に押さえられないため、墳頂～周溝最低部の距離を示す)で検出された。

確認面はローム層上面である。全体的に細かな根攪乱が入っている。

形態 検出規模は幅4.8m、確認面からの深さは70cmを測る。平面形は、墳裾部・外提部のプランはほぼ併行で、おおむねN-10°-Eの傾きを有する。



第17図 第8トレンチ (S=1/60)

本トレンチの周溝は第6・第7トレンチほどではないが、近～現代において上面が削平されているため、周溝の立ち上がり部分の形状が明確ではない。

断面形は、墳裾側が約15°、外提側が約15°と、ほぼ同傾斜で緩やかに立ち上がる。遺構底面は、セクション図A-BではV字状に見えるが、これは根攪乱によるもので、実際は緩いU字状を呈している。また周溝下端がやや不自然な傾きを呈しているが、これも根攪乱によるものである。

覆土 周溝は第6・第7トレンチ同様、墳裾側および外提側双方からの流入土により埋没していることがセクション図から窺える。埋没過程は第6トレンチにおける①→②→③→④の流れが認められる。⑤→⑥、すなわち第1層・第2層は本トレンチでは確認されていない。削平を受けた可能性が考えられよう。

本トレンチの壁面セクション(A-B)ではⅢa層は認められず、周溝と墳丘との関連を示す痕跡は認められなかった。

遺物 周溝底面から円筒埴輪片が1点出土している(遺物No.2)。

時期 覆土から第6トレンチとほぼ同時の埋没過程を辿った可能性が高い。周溝底面から出土した埴輪は、小破片のため年代的な比定は難しい。周溝は根攪乱が著しいため、この埴輪の出土状況のとらえ方は慎重であらねばならない。しかし周溝が埋没していなかった時期に落ち込んだ可能性も十分有しており、年代的な判断材料のひとつとして指標となる。

第4項 第9トレンチ検出の周溝(第18図)

位置・重複関係等 第9トレンチは、墳丘南東隅に東西軸で設定した。周溝は墳頂から約15mの位置(上面が削平され墳裾・外提が明確に押さえられないため、墳頂～周溝最低部の距離を示す)で検出された。

確認面はローム層上面である。全体的に細かな根攪乱が入っている。

形態 検出規模は幅4.7m、確認面からの深さは80cmを測る。平面プランは墳裾側・外提側ともにほぼ併行で、おおむねN-40°-Eの傾きを有する。ただし墳裾側は緩やかな弧を描くのに対し、外提部はほぼ直線である。ただし墳裾側の上端レベルはトレンチ北壁で標高29.180m、南壁で標高29.375mと、約20cmの標高差があることは注意せねばならない。これはI・II層の堆積が一様でなかったことによるもので、標高差の作用で弧を描くように見えている可能性がある。

本トレンチの周溝は他のトレンチと同じく、近～現代において上面が削平されているため、周溝の立ち上がり部分の形状が明確ではない。

断面形は、墳裾側が約20°、外提側が約14°と、外提側に比べ墳裾側の傾斜角度が急である。かかる状況は墳丘西側で確認された第6・第7トレンチのそれと逆である。

遺構底面は、根攪乱が著しいものの、緩いU字状を呈している。

覆土 周溝は他のトレンチ同様、墳裾側および外提側双方からの流入土により埋没していることがセクション図から窺える。埋没過程は第6トレンチにおける①→②→③→④→⑤の流れが認められる。最後の⑥、すなわち第1層は本トレンチでは確認されていない。削平を受けた可能性が考えられよう。

本トレンチの壁面セクション(A-B)では、墳裾側においてⅢa層が周溝に流れ込んでいる状況が

認められた。

遺物 周溝覆土中からは遺物は出土しなかった。

時期 指標となる遺物が出土していない。覆土から第6トレンチとほぼ同時の埋没過程を辿った可能性が高い。

第6節 出土した遺物

(第19図～第20図, 第3表・第4表, 写真図版9～写真図版11)

本節では、第2次調査において出土した遺物について通覧する。これらの遺物の内訳については、第4表の出土遺物一覧表にて明記した。

ところでこの第4表による出土遺物の数量的提示方法は、従来の水戸市の報告にはない、新たな試みである。したがってここでその目的やカウント基準等について少しく述べておきたい。

本表提示の目的は、図示されない遺物を含め、出土遺物をできるだけ具体的に把握することで、遺構の性格・廃棄のあり方、そして産地組成や器種組成などによる生活史・流通史の復元に迫る資料を提示することにある。一般的な報告書では、図示されない遺物は数や重量を簡単に触れる程度で済ませることが大勢であるように見受けられ、全く記載されない報告も少なくない。しかしこのような報告のあり方では、出土遺物総体としての組成等の考察は極めて困難である。いかに多くの点数が図示された報告であっても、出土総量についての細かな提示がなければ、そこには図示するか・しないか、という報告者の意図が強く影響してしまい、客観的な報告とはいえない。

本表は、このような発掘調査報告書の出土遺物への扱いを問題視し、それを克服するための試みとして捉えて頂きたい。かかる問題意識は、数千～数十万点という質・量ともに膨大な遺物が出土する、近世遺跡を主体とする自治体において既に顕在化しており、それへの対応を積極的に取り組んでいる自治体もある。本表も、近世遺跡の出土遺物をめぐる取り組みに大きく影響されており、直接的には豊島区遺跡調査会が提示している『陶磁器・土器 分類・計数基準』に基づく出土遺物一覧表に拠っている(豊島区遺跡調査会1998)。この基準は主として近世陶磁器・土器についてのものであるが、図化されない遺物も含めた総体としての遺物の数量データをどこまで押さえるか、という問題意識そのものについては、近世に限らず全時代の遺物について言えることであろう。

さて本表の見方であるが、出土遺物全てについて、出土地点→器種の順に分類し、破片・個体ごとにカウントした。

破片・個体の判断基準については、1/2以上を個体、1/2未満を破片とした。個体・破片の判断基準は器種により様々な判別が可能であることは認識しているが、ダブルカウントの余地を完全に排除できる方法として採用した。

カウントした遺物は縄文～近・現代、年代不明までの時期別項目に分けて提示した。出土遺物は須

恵器・陶器・石器など材質を主とした大分類と、器形や産地などの項目を主とした小分類に分けている。小分類については、分類が微細になればなるほど項目が増え、数量データとしての提示の意味が不明瞭になってしまうため、どこまで分類するかが課題となる。今回は総体として近世～近現代の遺物が主体であったため、細目についてはおおむね2004年時点の豊島区教育委員会の分類基準に拠った（豊島区遺跡調査会2005）。ほかの時代の遺物については個別に判断したが、纏まった資料が出土した場合などは、十分検討した上で小分類を決定する必要がある。

それでは以下、時代ごとにその様相を述べていきたい。

第1項 古墳時代以前の遺物

先土器時代の遺物 本調査は史跡整備に伴う調査であるため、地山である関東ロームは一切掘削していない。したがって先土器時代の遺構・遺物の検出を目的とした調査はしておらず、当該期の土地利用の痕跡は認められなかった。また表土・攪乱・周溝等からも、当該期の遺物は出土していない。

縄文時代の遺物 第7トレンチの攪乱内から分銅形打製石斧が1点出土している（遺物No.14, 第20図）。本資料が出土した攪乱は、第1次調査次のトレンチを切っていたことから、1972年以降の所産であることが分かっている（本章第5節第2項）。したがってこの攪乱内の遺物は現代の解体・造成工事由来のものであり、客土の可能性が高い。

弥生時代の遺物 第8トレンチ表土から1破片、第9トレンチ表土から1破片が出土している。いずれも胴部破片で、付加状縄文第1種が施文される。当遺跡の至近に位置する薬王院東遺跡では弥生時代後期の集落が検出されており、相応の土地利用があったことを窺わせる。

第2項 古墳時代～奈良・平安時代の遺物

古墳時代の遺物 埴輪片が4点出土している。うち3点を掲載した（遺物No.2～4, 第19図）。器厚等からいずれも円筒埴輪と思われるが、小破片のため年代的な比定はできなかった。

出土地点は、第8トレンチの周溝底面から1点（遺物No.2）検出されたほかは、第9トレンチの表土から検出された。ただし第8・第9トレンチは根攪乱により周溝底面が乱れてやや不明瞭になっていることから、周溝底面から出土したとはいえそれが純粋な出土状態を示しているとはいえない。しかしながら周溝埋没以前に落ち込んだものである可能性も十分有している。現段階では出土状態について厳密に判断することはできないが、今後の継続調査のなかで相対的に判断づけられる可能性はあろう。

第9トレンチ出土の3点は、すべて表土層からの出土である。しかし第8・第9トレンチの表土層＝Ic層・Id層は現代の耕作土であり、客土を多分に含む第6・第7トレンチのIa層・Ib層とはその意味が大きく異なる。Ic層・Id層は大規模な土の移動が認められないことから、本層出土の遺物は当該地の土地利用をある程度反映したものとして捉えることができるのである。

すなわち今回の調査で出土した4点の埴輪片は、いずれも古墳造営の時期を考える上での重要な資料として位置づけることができよう。ただし、それが第1号墳に伴うものなのかどうかは不明である。

吉田古墳群はその多くが消滅しているため実態が捉えづらいものの、第1号墳に近接する古墳において埴輪が立っていた可能性は充分考えられる。したがってこの4点の埴輪は、吉田古墳「群」に伴うものと、現時点では捉えておきたい。

奈良・平安時代の遺物 第6トレンチから須恵器坏が個体として1点出土している（遺物No.1）ほか、表採資料として須恵器坏の底部が1破片、土師器甕の胴部が1破片認められた。須恵器はいずれも木葉下窯跡群の所産によるものである。

遺物No.1は第6トレンチで検出された周溝内、層位としては最上層の一部である第3層から集中的に出土した6つの破片が接合したものである（第19図）。器高と底径の比率から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期に比定される。周溝の埋没年代を示す資料として重要な指標となろう。

第3項 中世～近・現代の遺物

中世の遺物 今回の調査では中世の遺物は出土していない。

近世の遺物 破片11点、個体3点の計14点が出土している。全て表土もしくは攪乱からの出土である。

志野皿や瀬戸・美濃産の播鉢Aなど17世紀代を示す資料から、瀬戸・美濃産の端反碗C～D（1830年代～1870年代）まで、17世紀～19世紀にかかる資料が認められ、年代・器種ともに特に偏りはない。当該地は近世期は水戸城下の「お膝元」にある村落であり、人・モノの交流は近世を通じて活発であったことが窺え、これらの遺物群もそれに反映したものと言えよう。

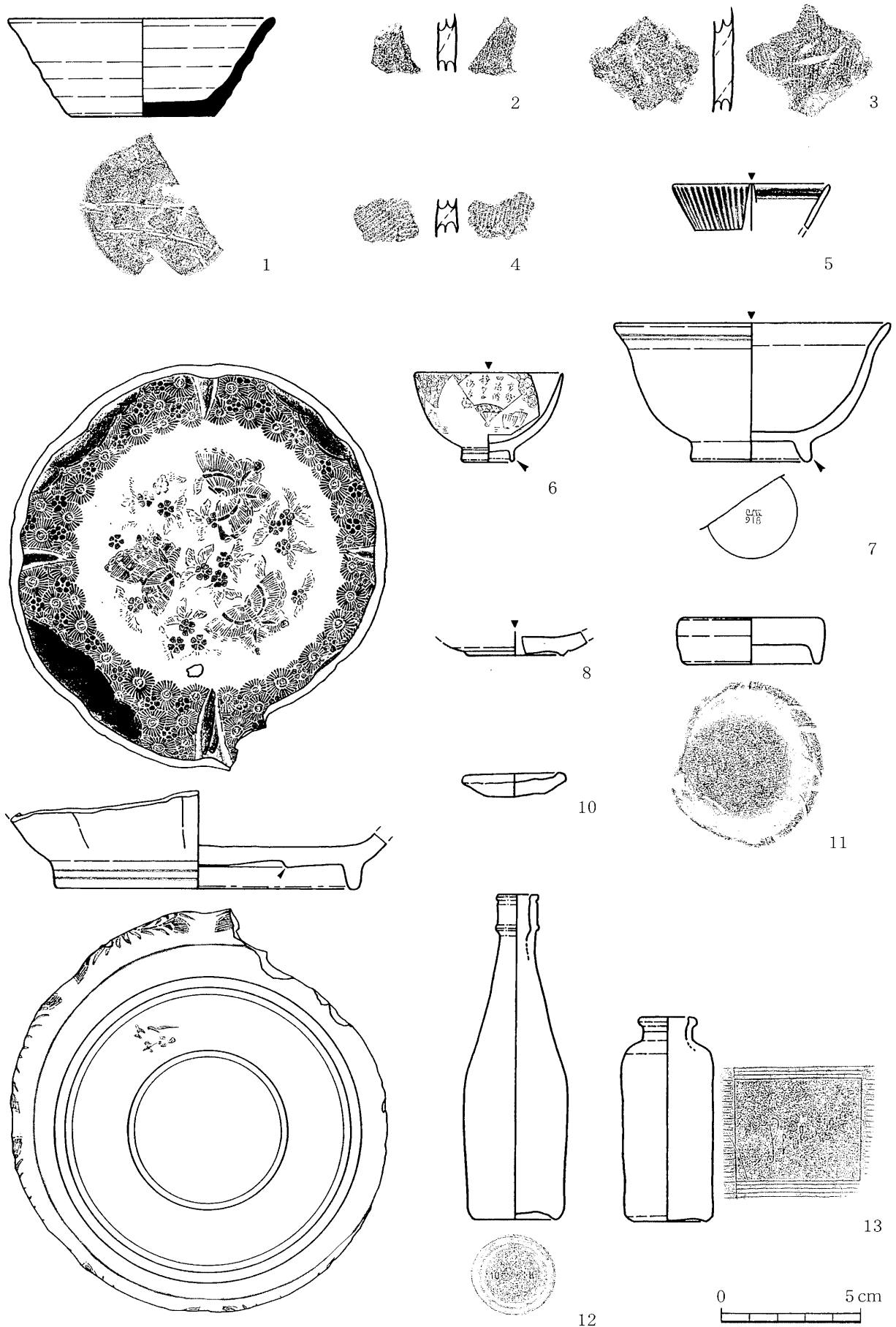
遺物No.11は、茨城県内ではあまり出土例が少ない（≒報告例が少ない）焼塩壺蓋である。在地産のものと同様に予想されるが、詳細は不明である。常陸の近世陶磁器・土器の研究は未だ途上にあり、肥前や瀬戸の生産地および江戸・畿内の消費地の研究に比べ大きく立ち後れている。今後の課題として挙げられよう。

近代～現代の遺物 破片1点、個体14点の計15点が出土している。全て表土・攪乱からの出土である。

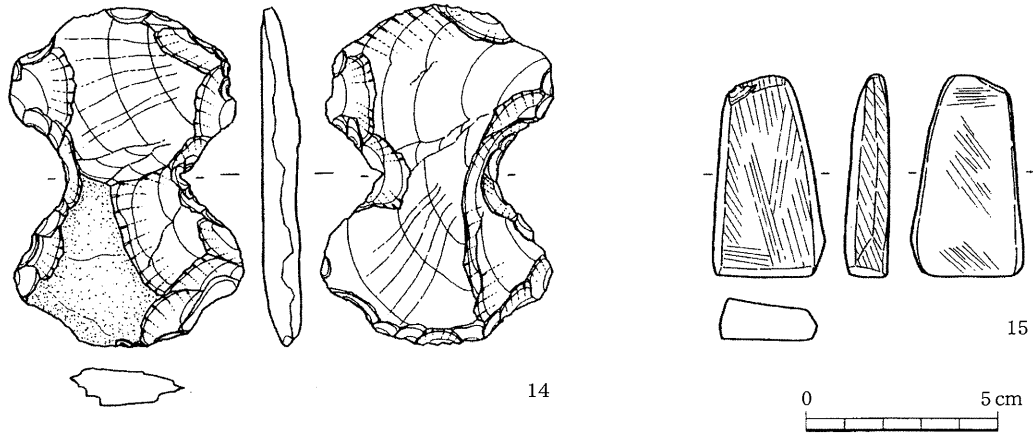
No.7は統制番号「岐918」が付されており、戦時下の物資統制のなかで配給された磁器碗であることがわかる。形状・法量は東京都目黒区大橋遺跡出土資料などと相似している（目黒区大橋遺跡調査会1998）。水戸市は明治42（1909）年より第14師団編成下の歩兵第二連隊を中核とした陸軍衛戍が置かれ、また「満蒙」開拓のため義勇軍訓練所が設立されるなど、日露戦争後からアジア・太平洋戦争にかかる時期は軍事都市としての側面を有していた。したがってかかる軍事的要素の濃い遺物は、市内の近～現代の土地利用を考える上で重要な資料として位置づけられるであろう。

No.12・13は硝子瓶である。No.12は出土時には「水府自慢」「加藤高蔵商店」の商標がプリントされていた。加藤高蔵商店とは、古墳に隣接している酒造業者・明利酒類株式会社の前進、加藤酒造店のことである。1950年に現在の社名に変更した。加藤酒造店は安政年間（1854～1860）創業以来現在に至るまで当地で操業しており、吉田古墳周辺の幕末以降の土地利用に深く関わっていたと考えられる。本遺物はその具体的資料である。No.13は「SyokuSen」の文字が認められるが、具体的には不明である。器形や区画線・目盛などは目黒区大橋遺跡出土の薬瓶に近似しており（小林・渡辺2002）、同様の用途が想定される。

（関口）



第19図 第2次調査出土遺物(1)



第20図 第2次調査出土遺物(2)

第3表 出土遺物観察表

()は復元値, []は残存値, 備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	番号	出土地点	種別・器種	部位・残存値	法量(cm)			重量(g)	技法・文様・胎土・色調・焼成等	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
19	1	第6トレンチ周溝第3層	須恵器・無台坏	口縁部~底部1/2以上	(14.00)	7.70	5.30	110	口縁部~体部内外面ロクロ水挽整形, 底部ナデ調整/底面ヘラ記号あり/胎土は長石, 石英, 赤色粒子, 海綿状骨針を含む/色調は7.5Y5/1(灰)~7.5YR5/1(褐灰)/焼成良好	木葉下窯跡群	8cIV~9cI	A14類器高指数37.8 底径指数55.0
	2	第8トレンチ周溝底面	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	—	9	外面縦ハケ, 内面ナデ/胎土には細砂, 細礫, 黒雲母, 赤色粒子を含む/色調は5YR5/6(明赤褐色)/焼成良好	—	—	写9
	3	第9トレンチ表土	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	—	38	外面縦ハケ, 内面ナデ/胎土は細砂, 細礫, 黒雲母, 赤色粒子を含む/色調は7.5YR6/6(橙)/焼成良好	—	—	写9
	4	第9トレンチ表土	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	—	15	外面縦ハケ, 内面横ハケ・斜ハケ/胎土は長石, 石英, 金雲母, 赤色粒子を含む/色調は5YR5/6(明赤褐)/焼成良好	—	—	写9
	5	攪乱	磁器・碗	口縁部~体部破片	(8.60)	—	—	8	轆轤成形/染付/外面縦縞文, 内面口縁部一重圏線	瀬戸・美濃	1810年代~	写9
	6	第7トレンチ表土	磁器・碗型紙摺繪碗	口縁部~高台部1/2以上	(8.00)	3.00	4.80	40	轆轤成形/染付/畳付無釉・砂付着, 外面区画割(亀甲繫ぎ), 扇面内に「高砂」, 帆掛船文, 高台部二重圏線, 高台内一重圏線	瀬戸・美濃	1870年代~	写9

()は復元値, []は残存値, 備考欄の写番号は写真図版番号

図版 番号	出土 地点	種別 ・ 器種	部位 ・ 残存値	法量(cm)			重量 (g)	技法・文様・胎土 ・色調・焼成等	推定 生産地	推定 年代	備考
				口径	底径	器高					
19	第7ト ンチ 表土	磁器・碗 統制磁器	口縁部～ 高台部 1/2以上	(15.00)	6.10	7.40	214	轆轤成形／色絵(緑)／暈付無釉 ／外面口縁部二重圈線／底裏に 統制番号「岐918」	瀬戸・美濃	1930代～ 1945年	写9
	第7ト ンチ 攪乱	陶器・皿 志野皿	底部～高 台部 1/2以下	—	(6.00)	[1.20]	19	轆轤成形／削り出し高台, 志野釉 全面施釉, 貫入あり	瀬戸・美濃	16c末～ 17c	写9
	第7ト ンチ 表土	磁器・皿 型紙摺絵 皿	体部～高 台部 1/2以上	—	16.40	[5.30]	854	轆轤成形／染付／輪花, 蛇の目 凹型高台部無釉・砂付着, 見込み 目痕あり(残存1), 内面菊花重ね 文, 見込み蝶に草花文, 外面文様 あり(竹文), 高台脇一重圈線, 高 台二重圈線, 高台内墨書「ケイ口 ヤ口」	肥前か	1870年代 ～	写10
	第6ト ンチ 表土	土器・か わらけ 極小皿・ 土師質	完形	5.50	4.00	1.40	22	手握ね成型, 内外面ともにナデ/ 口縁部スス付着／胎土に細砂, 細 礫, 黒雲母, 海綿状骨針を含む/ 色調は5YR7/6(橙)／焼成良好	在地産か	近代か	写10
	第6ト ンチ 表土	土器・ 焼塩壺蓋 土師質	ほぼ完形	上部径 7.50	受部径 7.30	2.50	116	型打成型／内面布目痕。胎土に は長石, 石英, 赤色粒子, 白色粒 子を含む／色調は7.5YR8/6(浅黄 橙)／焼成良好	—	17cⅢ～	写10
	第6ト ンチ 表土	硝子製 品・瓶 酒瓶	完形	2.30	5.30	17.70	199	型打成型／無色透明／底部陽刻 「10 K」／出土時「水府自慢」 「加藤高蔵商店」の商標あり	—	1950年以 前	写10
	第6ト ンチ 表土	硝子製 品・瓶 薬瓶	完形	2.90	3.90	11.10	108	型押成型／緑色透明／気泡多い ／体部に陽刻線にて区画(2区画, うち1区画に「SyokuSen」陽刻	—	近代か	写10
20	第7ト ンチ 攪乱	石器・ 分銅形打 製石斧	完形	長さ 9.00	幅 6.20	厚 1.00	62	表面に自然面を残しており, 裏面 には素材剥片の主要剥離面とみら れるポジティブバルヴが認められる ／刃部は円弧状を呈し, 中央は抉 られている／石材はホルンフェルス	那珂川産 か	縄文中期 以降	写11
	第6ト ンチ 攪乱	石器・ 砥石 仕上げ砥	完形	長さ 5.30	幅 3.00	厚さ 1.15	26	4面砥石／平面形・断面形ともに台 形状を呈する／全面に研磨による 摩擦痕あり／石材は蛇紋岩	不明	近世	写11

第4表 出土遺物一覧表

出土地点	出土遺物	縄文			弥生			古墳			奈・平			中世			近世			近・現代			不明			総計		
		破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計			
第6トレンチ	周溝	須恵器 坏 木葉下FAI4類	0		0		0		1	1	0		0		0		0		0		0		0		0	1		
		石 礫	0		0		0		1	1	0		0		0		0		0		0		0		0	1		
	表土	磁器	碗 産地不明	0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
			皿 産地不明	0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
		陶器	湯呑碗 産地不明	0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
			皿 産地不明	0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
			焼酎甕 産地不明	0		0		0		0		0		0		0	1	1	0		0		0		0	1	0	1
		土器	かわらけ極小皿	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1
	焼塩壺蓋		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1	
	硝子	瓶	0		0		0		0		0		0		0		4	4	0		0		0		0	4	4	
	攪乱	磁器	碗 瀬戸・美濃	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	1	
			甕 産地不明	0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
		土器	かわらけ	0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1		1	1	1
			土師質鉢	0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1		1	1	1
			土師質不明	0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1		1	1	
		石器	砥石	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1
	鉄製品	和釘	0		0		0		0		0		0		2	2	0		0		0		0		0	0	2	
	第7トレンチ	表土	磁器	端反碗C~D	0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0		0	1
型紙絵付碗				0		0		0		0		0		0		0		2	2	0		0		0		0	2	
統制磁器碗				0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
型紙絵付皿				0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	1	
仏飯具 肥前			0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1	
陶器			播鉢 産地不明	0		0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0	0	1
		火入 京・信楽	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1	
攪乱		陶器	志野皿	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	1	
		石器	分銅形打製石斧	1	1	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	0	1
第8トレンチ		周溝	土製品	埴輪 円筒埴輪	0		0	1	1	0		0		0		0		0		0		0		0		0	0	1
	陶器		播鉢 瀬戸・美濃A	0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0		0	1	
	表土	土器	弥生土器 後期か	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	1	
		かわらけ	0		0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1	1	1	
第9トレンチ	陶器	仏飯具 京・信楽	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1	
		仏花器 瀬戸・美濃	0		0		0		0		0		0		1	1	0		0		0		0		0	0	1	
	土器	弥生土器 後期か	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	0	1	
		埴輪 円筒埴輪	0		0	3	3	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	3	
		かわらけ	0		0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1	1	1	
瓦質鉢	0		0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1	1	1			
表探	須恵器	坏 木葉下	0		0		0	1	1	0		0		0		0		0		0		0		0		0	1	
	土師器	甕	0		0		0	1	1	0		0		0		0		0		0		0		0		0	1	
	土器	瓦質鉢	0		0		0		0		0		0		0		0		0		1		1		1	1		
総計			0	1	1	2	0	2	4	0	4	2	2	4	0	0	0	0	11	3	14	1	14	15	7	0	7	47

第7章 総括

本報告では、ここまで第1次・第2次調査の成果を別個に報告してきたが、本章では二つの調査で明らかになったことをいくつかの項目ごとにまとめ、双方の調査成果として提示すると共に、今後の調査・整備にかかる課題と展望を述べていきたい。

第1節 古墳の規模と墳形

第1項 古墳の規模について

第3章で述べたように、第1号墳は第1次・第2次調査においてはじめて周溝を確認している。これにより古墳の本来の規模について、具体的なデータを得ることができた。

第1次・第2次調査におけるトレンチごとの遺構全体図を測量図に当てはめたのが、第21図である。このうち第6トレンチと第8トレンチの南壁面のラインが、墳丘を挟んで対角線上に位置しており、両トレンチで検出されている周溝の幅は、内径が26.2m、外形が35.2mを測る。現在の墳丘規模は測量調査によれば南北12m、東西7.6mであるが、本来の墳裾が周溝内法付近までめぐっていたとすれば、恐らく25m前後の墳丘規模であったことが想定される。

次節で述べるように、第1号墳は前方後円墳の造営が途絶えた後の時期に比定されている。那珂川下流域における同時期の古墳で墳丘規模が判明している事例を挙げると、ひたちなか市金上殿塚古墳（円墳・装飾古墳）が約30m、同市虎塚古墳群第3号墳（方墳）が約22m、同第4号墳（方墳）が約20m、同市中区古墳群第1号墳（円墳）が約15m、水戸市ニガサワ古墳群第1号墳（円墳）が約29m、第4号墳が約9mである。

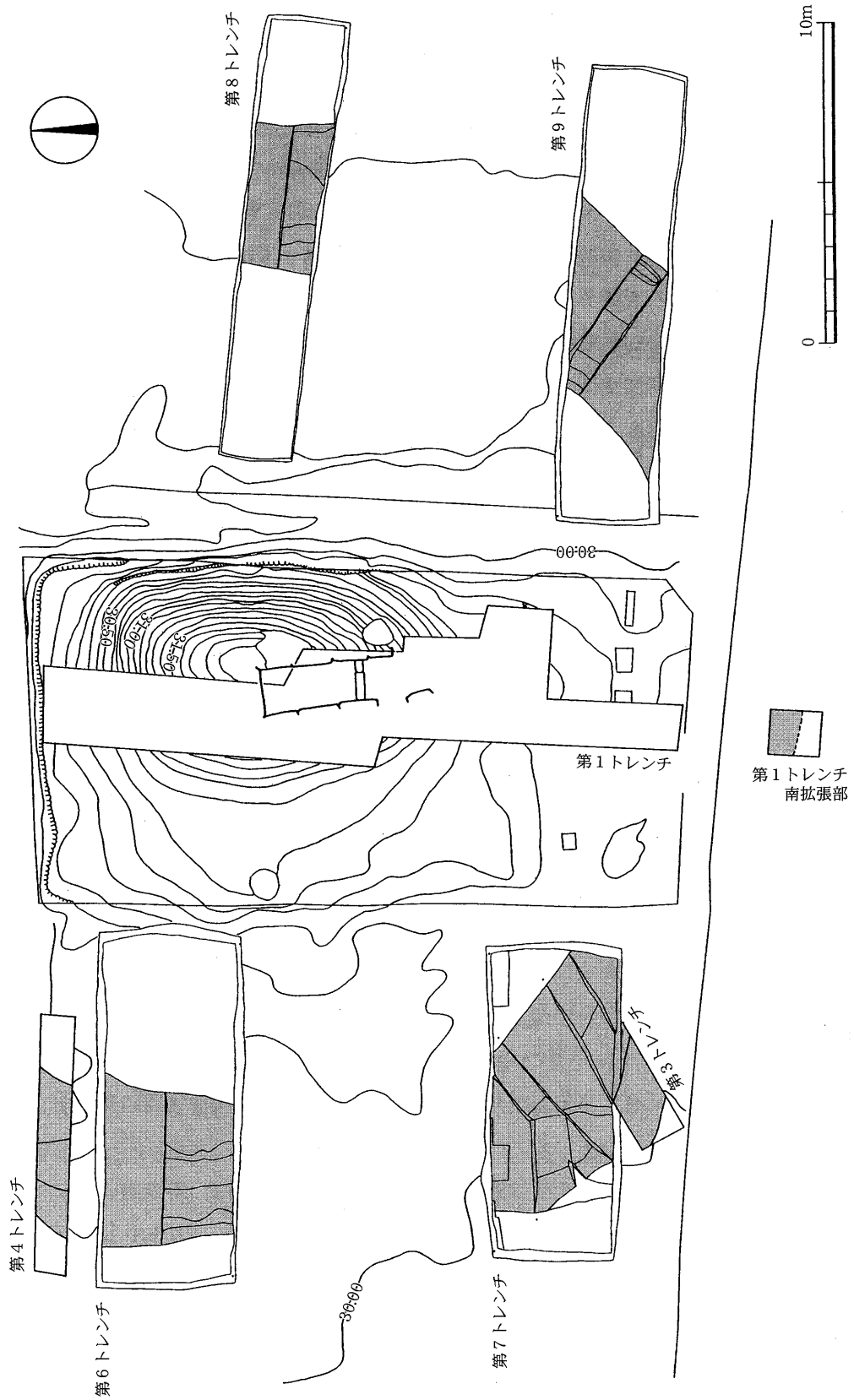
すなわち那珂川流域における前方後円墳以後の大型古墳としては、30m規模の墳丘をもつ金上殿塚古墳・ニガサワ古墳群第1号墳が該当し、中型古墳としては、20m規模の虎塚古墳群第3・4号墳が該当する。

今回明らかになった吉田古墳の26.2mという規模は、両者のちょうど中間であり、現在判明している墳丘規模で判断する限り、那珂川下流域では大型古墳に次ぐ規模であるといえよう。

第2項 古墳の墳形について

第1号墳の墳形を確認することは、第1次・第2次調査の共通した目的のひとつであったが、結局のところ2度にわたる調査では、墳形の確定には至らなかった。ただし、川上博義氏らによる昭和39（1964）年の測量調査以来ほぼ定説となっていた第1号墳＝方墳という見解に対して、今回確認した周溝プランから判断する限り、周溝が方形に巡ることはない可能性が高いことが判明した。

注目されるのは、第7トレンチおよび第9トレンチである。前者の平面の主軸方位は概ねN-30～



第21図 第1次・第2次調査で検出した石室・周溝 (S=1/200)

35° -W, 後者の主軸方位は概ねN-40° -Wであることが判明し、その角度は方形の周溝を推定するには傾きが急過ぎる。むしろ、この平面プランからは、円墳などの墳形を推定したほうがより自然であり、周溝から方墳と判断することはかなり難しいと結論づけられるのである。

結果論ではあるが、本来の墳丘規模が25mであったものが、現況8~10mになるまで自然的人為的所作により「崩壊」した古墳に対し、測量調査の結果を以て墳形を推測することは、極めて論拠の乏しい議論であったといえよう。事実、第1次調査時には方形に巡っていた墳丘が、わずか30年間で楕円形となり、標高も大きく変化していたことが判明している(第5章)。

このことは、現況の地形がいかに関後世の改変を受けて成り立っているかを如実に示しており、遺構の本来の形状は測量調査のみで測ることはできないことを物語っている。このような「教訓」は、たとえば古墳にあっては文久の山陵修補による伝天皇陵の大規模な改変、中世にあっては方形居館=中世前期居館説の崩壊などの研究史によりすでに研究者間に膾炙されていたことであるが、今回の調査で改めてそのことを再認識する結果となった。

無論、このようなことは周溝規模と墳丘規模の判明した現在の視点からの結果論的反省である。最初の測量調査を川上氏らが実施した昭和39(1964)年の時点では周溝確認を行っていたわけではないため、当時の墳丘がどれほどの削平を受けていたかの情報はなかったといつてよく、また当時の研究状況にあっては第1号墳=方墳と推測した川上氏らの議論は適当であったことを付け加えておきたい。

さて、冒頭にも述べたように第1次・第2次調査では墳形の確定には至らず、今後の課題として残されることとなった。方墳でないとするならば、まず円墳の可能性を疑うのが順当であるが、第6章でも触れたように、第7トレンチの下端の平面形は鋭角の角度を有しており、また第9トレンチでは周溝プランが直線的であるなど、現在得られているデータからは、必ずしも真円を描くようなプランを想定できないことも事実である。したがって、今後の墳形確定のための確認調査の際には、円墳に限らず多角形墳など、古墳時代終末期に認められる多様な墳形を想定しながら調査を進めていきたいと考えている。

また、第1次調査時に確認されている第1トレンチ南拡張部の周溝であるが、報告にもあるように明確な落ち込みではない(第4章)。第6~9トレンチで確認されている周溝プランを伸ばしていくと、第1トレンチ南拡張部確認された立ち上がりを周溝の外周とするにはやや北側に寄りすぎており、いびつな形状を呈してしまう。

このことから、筆者は第1トレンチ南拡張部の立ち上がりのラインは、周溝内のテラス状の段差であると判断したい。周溝に不規則なテラス状の凹凸があることは、第6~9トレンチ内のサブトレンチで確認している。第1トレンチ南拡張部の周溝が約25cmほどの落ち込みという小規模なものであり、これを周溝の上端とするよりは、むしろ周溝の一部であると判断したほうがより妥当であると思われる。

第2節 石室構造と年代

第1次調査では、石室の調査を実施している。詳細は第4章を参照されたいが、ここでもう一度その成果を確認し、石室構造から古墳の年代について若干の所見を加えたい。

まず第1号墳の横穴式石室の構造をまとめてみよう。

構成 無袖式の横穴式石室。玄室（単室）・羨道・前庭部が確認されている。旧表土を0.8mほど掘り込み、石室を構築している。

玄室の構造 奥壁は台形上の切石を1枚用いる。側壁は東西各3枚の長方形の切石を3枚並べる。立柱石はない。

天井の構造 玄室に切石3枚を載せる。本来玄門部にもう1枚あったと想定されている。石の有無は不明。前壁はない。

床面の構造 長方形の切石を2枚並べた梱石が確認されている。玄室内には本来礫が敷かれていたものと推測されている。

羨道の構造 攪乱が著しく詳細は不明であるが、玄室と同様の切石を東西ともに3枚並べていたと想定されている。

前庭部の構造 攪乱が著しい。幅0.7mほどの墓道が確認されている。

その他 各切石の目張りに白色粘土が詰められている。

第1号墳の石室は以上のような構造を呈し、とくに梱石・羨道の切石の存在は、第1次調査によりはじめて報告された重要な所見といえよう。

横穴式石室の編年については、稲村繁氏・石橋充氏・生田目和利氏らによる研究があり（第3章参照）、第1号墳はおおむね7世紀前葉から中葉に比定されてきた。常陸北部における7世紀前葉から中葉にかけての横穴式石室は、石室全体が大型切石で構築され、側壁が左右同数・同規模の切石によって構築されるなど、石室構造の規格化・定形化がみられるのが主たる特徴である。第1号墳は立柱石がみられない点において、やや時代の下る7世紀中葉に位置づけられようか。

出土遺物の情報が乏しい第1号墳の場合、その年代観は現状では石室構造による推定に頼らざるを得ないが、瓦吹氏が過去の出土遺物について整理しているように（瓦吹2000・2003）、必ずしも多くはないが、金属製品を中心に遺物が出土している。その多くは戦災により焼失してしまったとされているが、その情報も定かではない。今一度所在調査を実施し、出土遺物の有無について確認する必要がある。

第3節 壁画

これまで第1号墳の壁画については、柴田常恵による最初の発表以来、梅原末治・鳥居龍蔵・高橋

健自・斎藤 忠・日下八光・川崎純徳などの各先学により多く議論されていることは、第3章で述べた通りである。この分厚い研究を有するテーマに対し、新たな議論を展開することは筆者の力量をはるかに越えている。しかし第1次調査では、これまで報告されていなかったモチーフも記録・提示しているところであるので、先学の議論を再整理しつつ、筆者の見解も織り交ぜながら壁画の構成について確認しておこうと思う。

まず奥壁壁画であるが、以下のモチーフが認められる（第11図）。

鞆状の線刻 中央部および一番右側の2つがある。中央部の鞆には矢が4本納められ、下部には2つの楕円形の突起がある。小林行雄氏はこれを携帯用の紐としている（小林1964）。

右側の鞆には3本の矢が納められている。

刀子状の線刻 中央の鞆の上部に、切っ先を下にして2本が並ぶ。

鉾状の線刻 中央の鞆・刀子の左右に、幅広で長細いモチーフがある。これは多くの研究者が鉾と推測している。高橋健自氏はこれを棍棒状の武具としている（高橋1927）。いずれにせよ武器・武具類の一種とするのが大方の見解といえよう。これに対し川崎純徳氏は、武器・武具類ではなくむしろ「生命の源泉」を象徴する図文であると主張している（川崎1982）。筆者も図文の意味するところはともかく、図文に古代人の精神世界を積極的に読み解く川崎氏の解釈法を基本的には支持したい。

大刀状の線刻 最も左側に描かれた図文である。幅広の鞘尻をもつ鞘に収められたものと考えられている。鞘尻の下部には2つの小さな円形状のモチーフがあり、その右側は鞆、左側は燧袋と、高橋健自氏や鳥居龍蔵氏によって推測されている。

次に、側壁には以下のモチーフが認められる（第10図）。

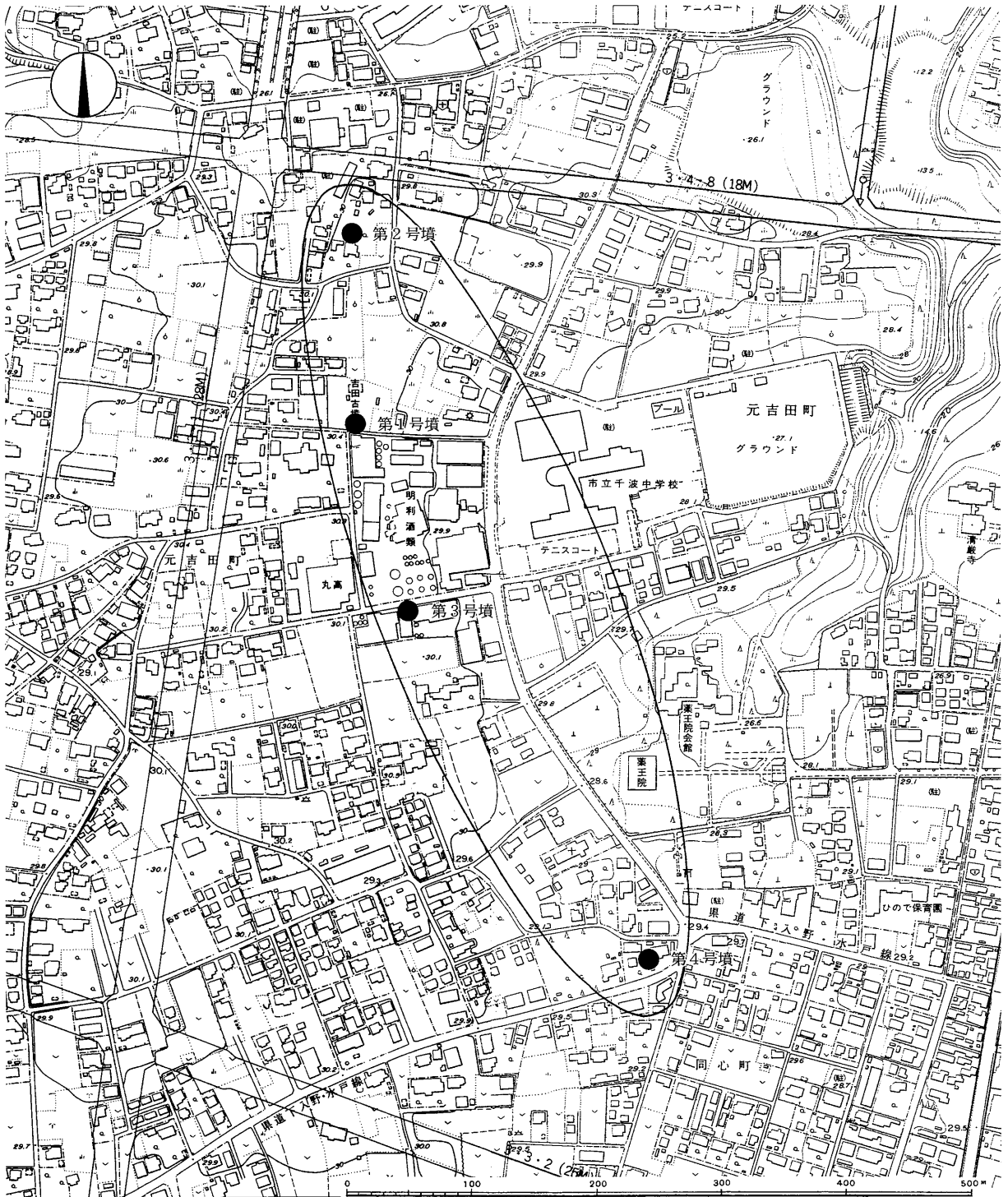
×状の線刻 西側壁2枚目下部にみられる。第1次調査によりはじめて報告された線刻である。

✕状の線刻 東側壁1枚目下部にみられる。これについては柴田常恵氏が「一種の戯れに過ぎないかと考へられる」として軽視した図文である（内務省1927）。第4章において瓦吹氏は西側壁の×状線刻と同様に「×」が基本であったと推測しており、対をなす図文であることが窺える。

いずれにせよこれら側壁の×状・✕状の線刻は、玄室という古墳内で最も中心となる場において、柴田氏の言うような「戯れ」によるものとは考えにくい。むしろ、奥壁に整然と武器・武具類が線刻される中、側壁にかかる抽象的なモチーフが描かれていることは重視しておきたい事柄である。虎塚古墳の図文などを参照するならば、この×状の図文は三角文の退化したものと推測することもできよう。

第4節 古墳群としての吉田古墳

現在、吉田古墳は単独の古墳ではなく、「吉田古墳群」として認識されているが、その範囲は必ずしも明確ではなかった。現在、第1号墳のほか墳丘がよく残っているのは、1号墳の北方にある第2



第22図 吉田古墳群の範囲 (推定, S = 1 / 5,000)

号墳である。

しかしながら今回、吉田古墳の整理を進めていく途上で、古墳群の範囲をある程度推測できる知見を得ることができた。それが、第3章でも触れた『東茨城郡誌』（東茨城郡教育會編1927）の記述である。

『東茨城郡誌』は昭和2（1927）年刊行で、まだ大規模開発が及んでいない吉田地区における状況をよく記している。吉田古墳周辺では4つの墳丘について、地番・規模・出土品などの情報が記され、これにより吉田古墳群は少なくとも現在知られている1号墳・2号墳のほかに、2つの古墳があったことが知られるのである。

『東茨城郡誌』に記された4つの古墳の地番を、現在の地番に置き換えて地図上に落とししたのが第22図である。これをみると、第1号墳の南に2基の古墳が北西から南東にかけて展開しており、北から第3号墳、第4号墳と命名した。以下、古墳ごとに同文献で記載された情報を記す。

第1号墳 「芝塚の古墳にして、内部の構造は平岩を以て築造し、高五尺、周囲八丈餘あり、塚は年を経るに従つて、自然に崩壊し、南方より露出して、構内を覗き得らるゝに至りしが、現今は土を以て再びこれを蔽ひ、塚上に小祠を建てあり（中略）側壁に武具様の彫刻ありて、本邦古墳中稀有のものなりと。」

第2号墳 「南方自然に崩壊して、岩構の室内部を露出せるが、外は土を以て半球形に築造し、高九尺餘、周囲十三丈餘あり。」とあり、石室が露出していること、現況の墳丘規模は第1号墳よりも大きいことが指摘できる。ただし石室が露出していることから、第1号墳同様、墳丘の削平は相当の規模で行われていると判断してよいであろう。

第3号墳 「南方矢張り自然に崩壊し、高五尺、周囲七丈餘、其内に古刀劍の錆びたるもの埋没しありしを発見せしが、これを元の如く埋め、塚上に小祠を建つ。」とある。高さ1.5m、周囲21mの規模というから、第1号墳よりやや小規模な墳丘であったと思われる。石室は認められていないが、刀劍類が出土し、これを埋め戻したという。

第4号墳 「文政六年正月大六天王の社を塚上に建設せんとし、これを掘りしに、曲玉、管玉の類を発見し、これを所属役所へ納めたりと、該地は当時薬王院の朱印地なるを以て、同院へ下附せられ今は民有地となれり」とある。文政6（1823）年の出土記事が何に拠るものなのかは明かではないが、出土品は薬王院に下付されたという。規模についての記載はない。

このほか『東茨城郡誌』には吉田地区の2つの古墳が記されているが、これは台町の地番であって距離的にやや離れているため、吉田古墳群の範疇には含まれないと判断し除外した。

平成18年3月現在、周知の埋蔵文化財包蔵地としての「吉田古墳群」は、第1号・第2号墳を囲む範囲となっているが（第4図）、この記事により少なくとも南北約700m、東西200mの範囲まで古墳群が広がる可能性が極めて高いことが判明した。たとえ墳丘が削平されていたとしても、地下に埋葬施設や周溝が包蔵されている可能性は充分考えられ、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を広げ、早急に遺跡の保護を図る必要がある。

これまで吉田古墳は第1号墳の壁画がとかくクローズアップされてきたが、古墳の群構成の詳細な分析が、古墳の成立・展開過程、被葬者の系譜等の把握に大きく寄与することは、これまでの古墳群の研究からすでに実証されているところである（茂木2000など）。したがって今後第1号墳の整備を進めていく上で、第1号墳そのものの調査と併行しつつ、第2～4号墳の調査を行うことは非常に重要な作業と判断される。とくに現況において第1号墳より規模の大きい第2号墳の調査は、第1号墳の性格を判断する上で不可欠と言えよう。

第5節 課題と展望

以上、第1次調査・第2次調査の成果をここまでまとめてきたが、ここではそれらをふまえ、次年度以降にも継続的に実施する整備・調査の方向について、現時点での課題と展望を簡単にまとめておきたい。

南北の周溝の確認 第1次・第2次調査において、古墳の東西の範囲はおおむね把握できたが、南北の範囲は確認できていない。宅地・工場・道路にあたるため、広範囲の確認は困難であるものの、何らかの調査を実施し、確認する必要がある。

墳形の確定 本章第1節で述べたように、第1号墳が方墳である可能性は低くなったが、それではどういった形状であったのかという点、今回の成果だけでそれを判断することは難しい。そこで来年度以降は、古墳の形状を押しえられるような調査を実施する必要がある。

古墳群としての吉田古墳の理解 本章第4節で述べたように、これまでの吉田古墳の研究は、「古墳群」としての吉田古墳という視点が希薄であった。吉田古墳の整備を進めていく上で、第1号墳そのものの調査はもちろん必要であるが、「群」としての性格を把握することも欠かせない作業であろう。

具体的には、まず第23図で示したように包蔵地の範囲を広げ、遺跡の保護を図る必要がある。

次に、第1号墳以外の古墳の調査も必要な作業であろう。もちろん、今回の整備事業は第1号墳を対象にしたものであり、他の古墳に対しどこまで調査を実施するのかは、今後慎重に検討しなければなるまい。次年度はその基礎的作業として、第2号墳の測量調査を予定している。

検討委員会の設置 昨今の高松塚古墳等の保存をめぐる問題にもあるように、装飾古墳の整備はとくに慎重な対応が求められる。そのためには古墳の整備に精通した有識者による指導・助言が不可欠である。そこで来年度より、史跡整備のための検討委員会を設置し、吉田古墳を水戸市の文化遺産として有効に活用できるような調査・整備方針を策定していく予定である。（関口）

おわりに

本書は、線刻壁画が大正3(1914)年に発見されて以来、柴田常恵、梅原末治、鳥居龍蔵ら、考古学史に燦然と輝く研究者たちが相次いで学界に発表し、装飾古墳研究のなかで大きな存在感を示した、吉田古墳のはじめての発掘調査報告書である。この全国的に著名な古墳の報告書刊行に携われたことを、素直に嬉しく思う反面、編者の主体的力量不足から、果たして十分にその成果を反映した報告になれたのかどうか、とも思う。

* * *

第1次調査は、調査担当者である伊東重敏が遺した仕事であったが、伊東はすでに鬼籍に入っており、担当者による報告は叶わなかった。しかし当時調査員として現場を切り盛りしていた瓦吹 堅氏が、当時の記録を引き継いでおられたため、特別にお願いして報告して頂いた。実に33年ぶりの正式報告となる。この33年間、正式報告書が刊行されなかった理由について、いかなる曲折があったのかは今となっては定かではない。しかし水戸市が環境整備計画のもとに実施した以上、報告書の刊行は速やかになされるべきものであり、ひとまずここに本書を上程できたことで、その責の一端を果たしたと感じて頂けるのなら幸いです。

第1次調査と第2次調査は、その間に長い年月が流れていること、整備計画自体が異なる事業であること、などの理由で、実際は別個の調査として行われている。第1次調査の段階では、複数年度にわたる調査を予定していなかったし、筆者が担当した第2次調査の段階では、第1次調査の情報はごく限られたものであったため、必ずしも第1次調査の成果を十分にふまえられないまま調査を行った、といういきさつがある。したがって本書の報告にあたって、それぞれの調査当時の状況を、そのまま伝えるような報告にしたかった。現段階で無理に双方の調査成果を摺り合わせるより、発掘当時の状況を個別に報告したほうが、より正確な報告になると思ったからである。

そのため、第4章と第6章はそれぞれ別個の報告として扱い、とくに用語等の統一は行っていない。内容的に矛盾が生じている部分もあるかと思うが、それもあえて修正していない。ご了承頂きたい。

* * *

今回、調査・整理をしていく中で、今後やらねばならない課題が幾つか生じた。その一つとして、散逸した資料群を収集し、それをもう一度現在の視点から再評価することがある。実は、発見当時の調査資料を持っている方がいるという情報も、調査・整理を進める中で耳にしていた。大急ぎで調査すれば本報告に間に合ったことと思うが、しかし、編者の力量不足のためあえて見送り、次年度以降の報告に盛り込むことにした。吉田古墳の数少ない遺物として、重要な意味を持つものと思われるだけに、調査・報告に十分な時間を持ちたかったからである。

* * * *

吉田古墳が全国的に脚光を浴びてから92年経った。その間、アジア・太平洋戦争によって出土品は焼失もしくは散逸してしまった。当時まだ幾つかあったとされる墳丘は、戦後の開発とともに取り崩されてしまい、その場所さえよくわからない。

そして吉田古墳そのものも、いつの間にか生育した墳頂部の樹木が大きくなり、その根が墳丘の崩落を早めている。また石室への物理的な影響も懸念される。外周フェンスは歪み、夏になると下草が繁茂し草刈りが追いつかない—— 国指定史跡というお題目を掲げずとも、国民共有の財産である文化財にふさわしい姿を目指して、現状を改善していく必要がある。

第1次調査では、遠方から大勢の方々が見学に訪れたことを耳にしているし、第2次調査でも、現地説明会こそ開催できなかったが、吉田小学校の生徒さんが遠足に訪れ、楽しそうに現場を見つめていた。市民の皆さんが吉田古墳へ向けた、真剣な、そして暖かい眼差しを、文化財の保存と活用を図る上で、私たちは決して忘れてはなるまい。

吉田古墳の現在の状況が必ずしも適当ではないことは、市としても充分認識している。かといって、場当たりの対応をすれば、後世に禍根を残すことになりかねない。この古墳にふさわしい整備とはどのようなものか、本格的な検討をスタートさせる準備は序々に整ってきた。地元住民の方々に愛着して頂ける、魅力ある史跡整備の実現に向けて、慎重に、しかし着実に取り組んでいきたい。

最後になりましたが、私有地にもかかわらず調査を快諾頂いた明利酒類株式会社様・加藤晴代様、澤畑 実様をはじめ近隣住民の皆様に、厚く御礼申し上げます。 (関口)

引用・参考文献

- 阿久津久・片平雅俊 1992 「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館
- 飯山信一編 1997 『古代の装飾壁画』 新いばらきタイムス社
- 稲村 繁 1991 「茨城県における横穴式石室の変遷（1）－装飾古墳の背景－」『博古研究』創刊号 博古研究会
- 井上辰雄 1980 「装飾横穴墓をめぐる豪族とその性格－丈部の役割－」『えとのす』第13号 新日本教育図書
- 茨城県 1930 「吉田古墳」『茨城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1号
- 茨城県教育委員会 1982 『重要遺跡調査報告書Ⅰ』
- 茨城県教育財団 1993 『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
- 茨城県教育財団 2003 『二の沢A遺跡・二の沢B遺跡（古墳群）・ニガサワ古墳群』（茨城県教育財団文化財調査報告書第208集）
- 茨城県教育庁文化課編 2001 『茨城県遺跡地図』（地図編・地名表編） 茨城県教育委員会
- 茨城県史編さん原始古代史部会編 1974 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県
- 茨城県史編さん近世史第一部会編 1968 『茨城県史料 近世地誌編』 茨城県
- 茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編 1979 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 茨城県
- 茨城県立歴史館編 1991 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県
- 茨城県立歴史館編 1995 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 茨城県
- 茨城県立歴史館 2002 『考古紀行いばらき－考古学に魅せられた人びと－』
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 江原忠明編 1985 『改訂 水戸の町名－地理と歴史－』 水戸市役所
- 梅原末治 1916 「常陸吉田村古墳の彫刻の一に就て」『人類学雑誌』第31号第10号 東京人類学会
- 大塚初重・小林三郎 1996 『増補・新装版 古墳辞典』 東京堂出版
- 大塚初重 2004 「古代東国の壁画古墳とその問題点」『東アジアの装飾古墳を語る』（季刊考古学別冊13） 雄山閣
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』 理工学社
- 大森信英 1962 「吉田古墳」『日本考古学辞典』 日本考古学協会編 東京堂
- 乙益重隆 1974 『装飾古墳と文様』（古代史発掘8） 講談社
- 勝田市史編さん委員会編 1978 『勝田市史 別篇Ⅰ 虎塚壁画古墳』 勝田市
- 鴨志田篤二 2005 『虎塚古墳－関東の彩色壁画古墳－』（日本の遺跡3） 同成社
- 川上博義 1965 「吉田古墳」『古墳壁画』（日本原始美術5） 斎藤忠編 講談社
- 川上博義・相田公平・諸星政得 1972 「吉田古墳の測量調査」『常総台地』第6号 常総台地研究会
- 川口武彦 2002 「水戸市栗崎町出土の有樋尖頭器」『婆良峰考古』第24号 婆良峰考古同人会
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良峰考古』第27号 婆良峰考古同人会
- 川崎純徳 1982 『茨城の装飾古墳』 新風土記社
- 川崎純徳 1988 「古墳壁画図文の型式学的検討」『考古学叢考』中巻 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編 吉川弘文館
- 川崎純徳 1990 「東国における終末期壁画古墳の歴史的 성격」『茨城県考古学協会会誌』第3号 茨城県考古学協会
- 川崎純徳 1991 「東日本における壁画「古墳・横穴墓」研究メモ」『婆良峰考古』第13号 婆良峰考古同人会

- 川角寅吉 1951 「吉田古墳発見に就て」『史窓』第3号 茨城県立第一高等学校史学会
- 瓦吹 堅 2000 「吉田古墳の銀環」『常総台地』第15号 常総台地研究会
- 瓦吹 堅 2003 「国指定史跡吉田古墳発掘覚書」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集
- 日下八光 1967 『装飾古墳』朝日新聞社
- 日下八光 1998 『東国の装飾古墳』雄山閣
- 郡司良一 1962 「吉田古墳出土の金環の実在について」『郷土文化』第3号 茨城県郷土文化研究会
- 郡司良一 1976 「文化庁指定史跡 水戸市元吉田町吉田古墳—吉田古墳の概要と副装遺物「金環」の実存—」『私の埋蔵文化財拾遺』第2号（私家版）
- 郡司良一 1992 『私の埋蔵文化財拾遺』第3集（私家版）
- 国立館大学牛伏4号墳調査団編 1999 『牛伏4号墳の調査』内原町教育委員会
- 国立歴史民俗博物館 1992 『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集（東国における古墳の終末《本編》）
- 国立歴史民俗博物館編 1993 『装飾古墳の世界』朝日新聞社
- 国立歴史民俗博物館編 1995 『装飾古墳が語るもの—古代日本人の心象風景—』吉川弘文館
- 国立歴史民俗博物館 1999 『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集（装飾古墳の諸問題）
- 小林謙一・渡辺貴子 2002 「物質文化研究としての近現代考古学の課題」『東京考古』第20号 東京考古談話会
- 小林行雄編 1964 『装飾古墳』平凡社
- 小室 勉 1985 「前方後円墳の終焉と方墳—霞ヶ浦沿岸における古墳の消滅—」『常陸国風土記と考古学』大森信英先生還暦記念論文集刊行会編 雄山閣
- 斎藤 忠 1952 『装飾古墳の研究』吉川弘文館
- 斎藤 忠編 1965 『古墳壁画』（日本原始美術5）講談社
- 斎藤 忠 1973 『日本装飾古墳の研究』講談社
- 斎藤 忠 1978 「栗田寛の「葬礼私考」について」『茨城県史研究』第39号 茨城県立歴史館
- 斎藤 忠 1989 『壁画古墳の系譜』学生社
- 斎藤 忠 1995 『日本考古学史（新装版）』吉川弘文館
- 斎藤 忠 1997 『古墳文化と壁画』（斎藤忠著作選集3）雄山閣
- 佐賀県立博物館 1973 『装飾古墳の壁画—原始美術の神秘をさぐる—』
- 佐々木義則 1995 「木葉下窯跡群産坏A1の変化について—消費地における形態と調整技法の様相—」『婆良峰考古』第17号 婆良峰考古同人会
- 佐々木義則 1997 「木葉下窯跡群の須恵器生産—奈良時代前半を中心に—」『婆良峰考古』第19号 婆良峰考古同人会
- 山武考古学研究所編 2005 『台渡里廃寺跡—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）—』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第2集）水戸市教育委員会
- 柴田常恵 1916 「常陸吉田村の彫刻ある—古墳」『人類学雑誌』第31巻第3号 東京人類学会
- 白石太郎 2000 『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 白石太郎編 2005 『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 杉山晋作 1993 「茨城県吉田古墳」『装飾古墳の世界』国立歴史民俗博物館編 朝日新聞社
- 鈴木素行 2000 「大里糠塚古墳の埴輪—久慈川流域における大型の円筒埴輪について—」『婆良峰考古』第22号 婆良峰考古同人会

- 宗田克巳 1949 「吉田古墳について」『霞ヶ浦文化』第2号
- 高橋健自 1927 『日本原始絵画』大岡山書店
- 玉利 勲 1978 『装飾古墳』(カラー新書セレクション) 平凡社
- 地域文化財コンサルタント編 2005 『大鋸町遺跡—グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第3集) 水戸市教育委員会
- 常澄村史誌編さん委員会編 1989 『常澄村史 通史編』常澄村
- 東京航業研究所編 2006 『大鋸町遺跡(第3地点)—市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第7集)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』(『東京大学構内遺跡調査研究年報』2別冊)
- 豊島区遺跡調査会 1998 『陶磁器・土器 分類・計数基準』(豊島区教育委員会『伝中・上富士前Ⅱ』別冊)
- 豊島区教育委員会 2005 『伝中・上富士前Ⅲ—東京都豊島区における弥生集落及び近世上駒込村の発掘調査—』(豊島区埋蔵文化財調査報告19)
- 鳥居龍蔵 1928 「凶画の存在する常陸の二古墳(下)」『武蔵野』第11巻第3号 武蔵野会編 誠志堂印刷出版部
- 内務省 1927 『埼玉茨城群馬三県下に於ける指定史蹟』(史蹟調査報告第2)
- 生田目和利 1994 「常陸の装飾古墳と装飾横穴墓」『風土記の考古学① 常陸国風土記の巻』茂木雅博編 同成社
- 生田目和利 1996 「常陸における台形型横穴墓について」『博古研究』第12号 博古研究会
- 生田目和利 2005 「茨城県北部における前方後円墳以後と古墳の終末」『前方後円墳以後と古墳の終末』第10回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会編 東北・関東前方後円墳研究会
- 東茨城郡教育會編 1927 『東茨城郡誌』(1992年に千秋社から復刻版発行)
- 日高 慎 2004 「関東平野東北部」『東日本における古墳出現について』(第9回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨) 同大会実行委員会編 東北・関東前方後円墳研究会
- 藤井功・石山勲 1979 『日本の原始美術10 装飾古墳』講談社
- 水尾比呂志 1977 『装飾古墳』(日本の美術45) 小学館
- 水戸市教育委員会 1995 『水戸市北屋敷古墳』
- 水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988 『水戸市大鋸町遺跡』
- 水戸市教育委員会 1971 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書(応急版)』
- 水戸市教育委員会 1976 『水戸市埋蔵文化財(分布調査報告書)』
- 水戸市教育委員会 1982 『常陸安戸星古墳』
- 水戸市教育委員会 1984 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書(昭和58年度版)』
- 水戸市 1995 『水戸市梶内遺跡—』
- 水戸市教育委員会 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書(平成10年度版)』
- 水戸市教育委員会 2004 『台渡里廃寺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—』
- 水戸市教育委員会 2005 『台渡里廃寺跡—範囲確認調査報告書—』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第1集)
- 水戸市史編さん委員会編 1963 『水戸市史』上巻 水戸市役所
- 水戸市史編さん委員会編 1999 『概説 水戸市史』水戸市役所
- 水戸市下畑遺跡発掘調査会 1985 『水戸市下畑遺跡—市道酒門8号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

- 水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990 『薬王院東遺跡－千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
- 水戸市立博物館 1990 『特別展 装飾古墳－地下を彩る名画の世界－』
- 宮崎報恩会編 1969 『新編常陸国誌』 常陸書房
- 目黒区大橋遺跡調査会 1998 『大橋遺跡－目黒区大橋遺跡発掘調査報告書－』
- 茂木雅博 1985 「常陸における古墳研究抄史」『常陸国風土記と考古学』大森信英先生還暦記念論文集刊行会編
雄山閣
- 茂木雅博 1987 『日本の古代遺跡36 茨城』 保育社
- 森貞次郎 1972 『装飾古墳』 朝日新聞社
- 渡辺一雄 1974 「関東・東北の装飾古墳」『古代史発掘8 装飾古墳と文様』乙益重隆編 講談社

報告書抄録

ふりがな	よしだこふん いち							
書名	吉田古墳 I							
副書名	史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第6集							
編集者名	関口慶久							
著者名	関口慶久・川口武彦・瓦吹 堅・小野寿美子・中尾麻由実							
編集機関	水戸市教育委員会							
発行機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎ 029-224-1111							
発行年月日	2006(平成18)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
よしだこふんぐん 吉田古墳群 だいいちごうふん 第1号墳	いばらきけんみとし 茨城県水戸市 もとよしだちょう ほか 元吉田町347他	8201	72	36° 21' 30"	140° 28' 29"	第1次調査 1972. 4. 28 ～ 1972. 5. 8	113.5m ² 177.07m ²	史跡・環境 整備計画に 伴う調査
						第2次調査 2005. 10. 3 ～ 2005. 11. 11		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
よしだこふんぐん 吉田古墳群 だいいちごうふん 第1号墳	古墳群	縄文 弥生 古墳 奈良・平安 近世 近～現代	墳丘 周溝 横穴式石室 線刻壁画	打製石斧 弥生土器片 埴輪片 須恵器坏 磁器・陶器・土器・鉄製品 磁器・陶器・硝子製品		国指定史跡の装飾古墳「吉田古墳」の測量・発掘調査。 第1次調査では墳丘・周溝・石室・線刻壁画の一連の調査が初めて実施された。 第2次調査では検出された周溝から、第1号墳は約26mの規模を有することが判明した。 また墳形については、定説であった方墳ではない可能性が高まった。		

※北緯・東経は測地系2000(世界測地系)対応。Web版TKY2JGD(Ver.1.3.79)による変換。

写 真 图 版



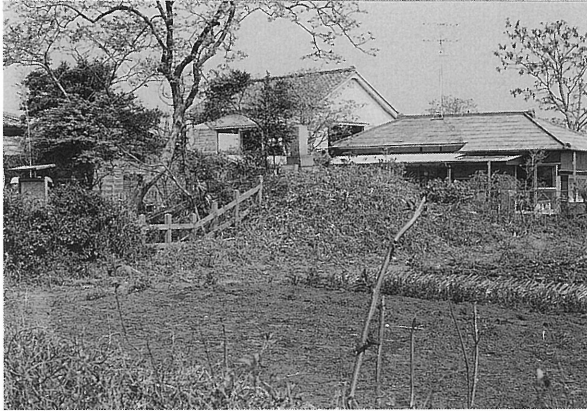
吉田古墳の位置①（○内が吉田古墳，昭和23年4月米軍撮影）



吉田古墳の位置②（○内が吉田古墳，平成15年撮影）

遺跡の位置

写真図版 2



調査前の現丘（南東から）



調査時の現丘（南西から）



調査風景



第1トレンチ（南から）



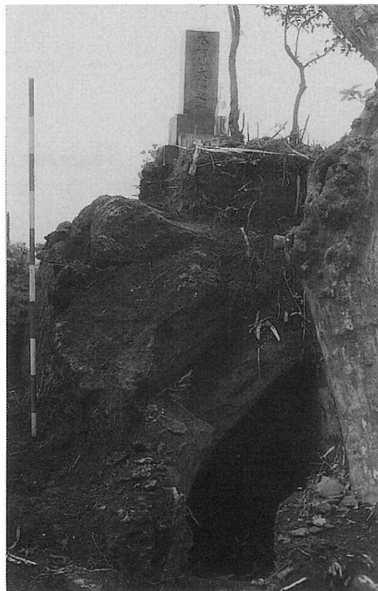
第2トレンチ（東から）



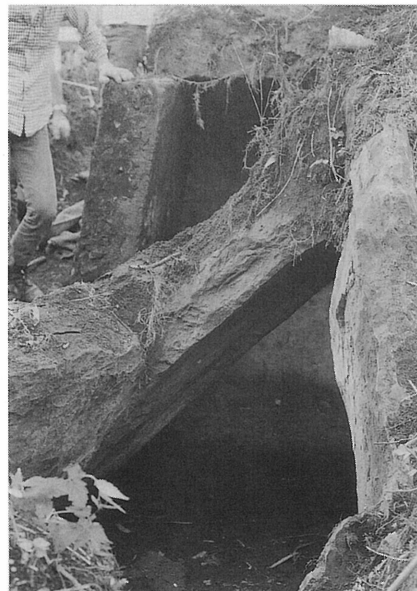
第3トレンチ（南西から）



第4トレンチ（東より）



西側壁の状況（南西より）



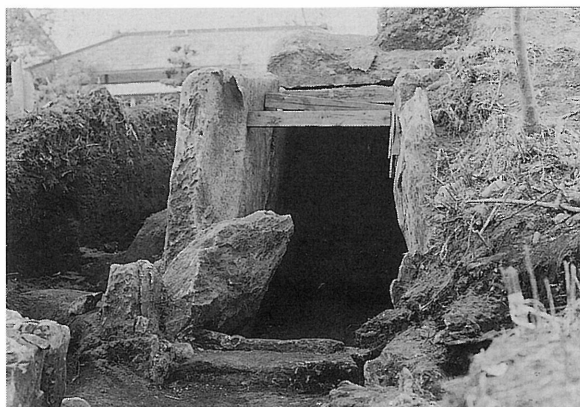
倒れた西側壁部分（南より）



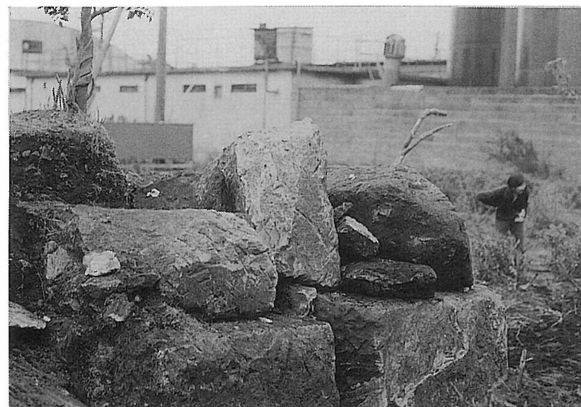
墳丘土層断面（西より）



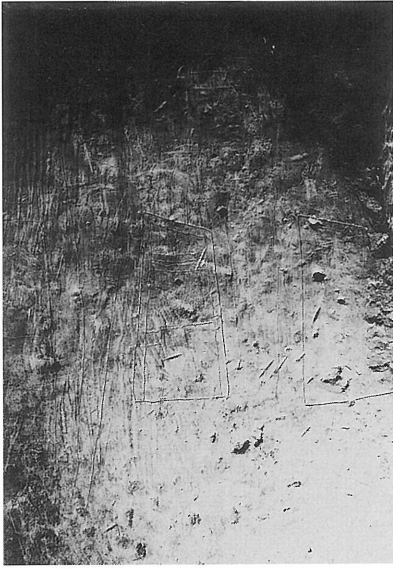
羨道部（南より）



玄門部（南より）



天井部（北西より）



靱



靱



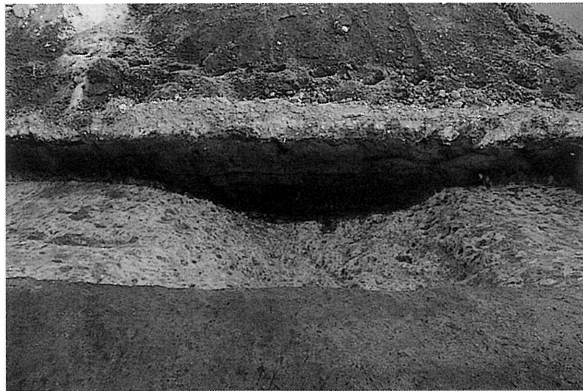
刀子



第1次調査参加者



第6・第7トレンチ全景（西から）



第6トレンチ内セクション（A-B，北から）



第6トレンチ内セクション（C-D，南から）



第6トレンチ遺物出土状況（北から）



第7トレンチ内セクション（E-F，北西から）



第6トレンチ全景（西から）



第7トレンチ全景（西から）



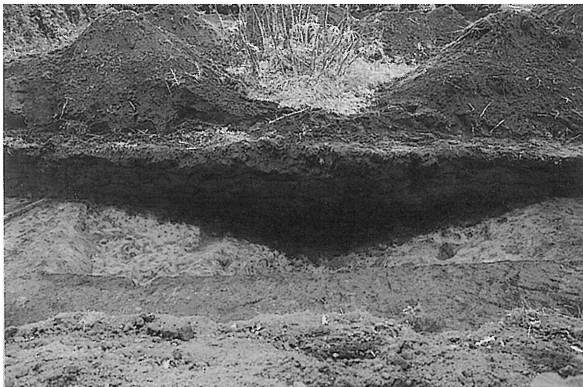
第8・第9トレンチ全景（南から）



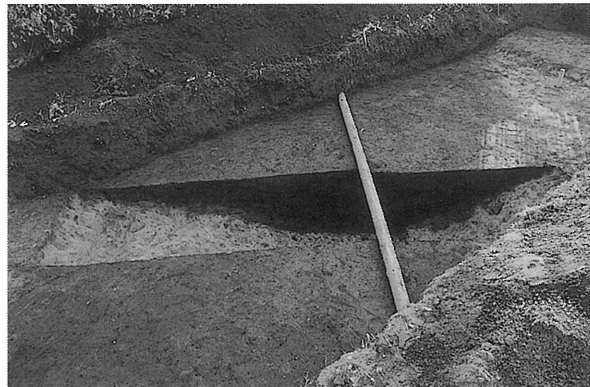
第8トレンチ全景（東から）



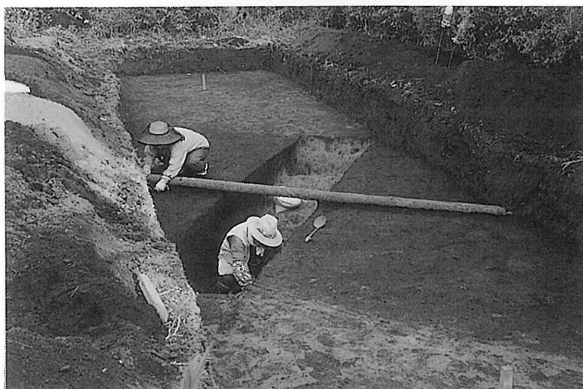
第9トレンチ周溝検出状況（東から）



第8トレンチ内セクション（A-B部分，北から）



第9トレンチ内セクション（C-D，北東から）



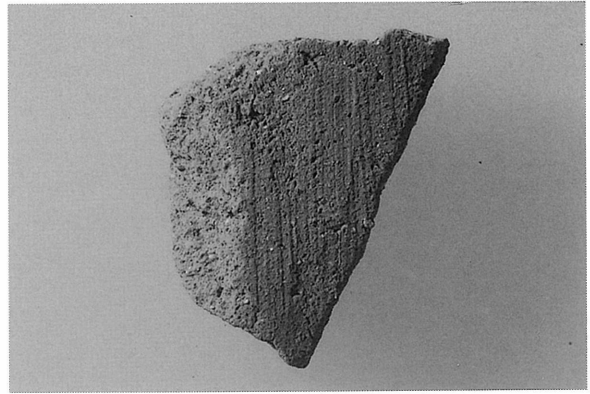
第9トレンチ内周溝調査風景



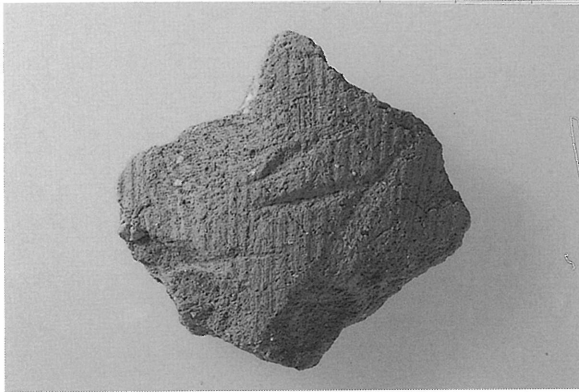
第2調査参加者



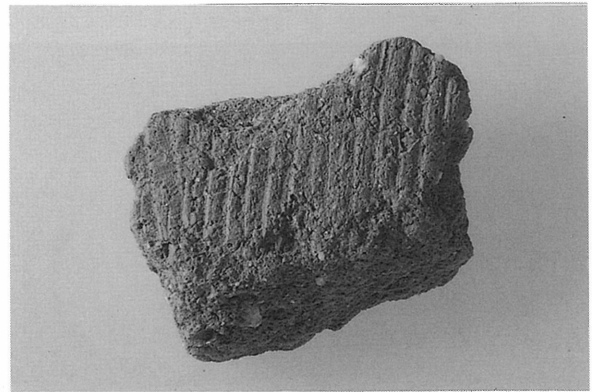
1



2



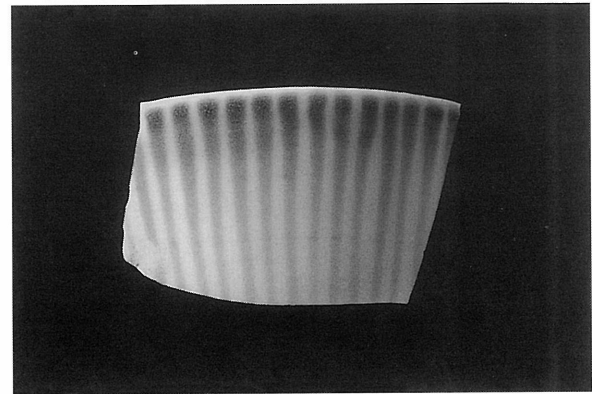
3



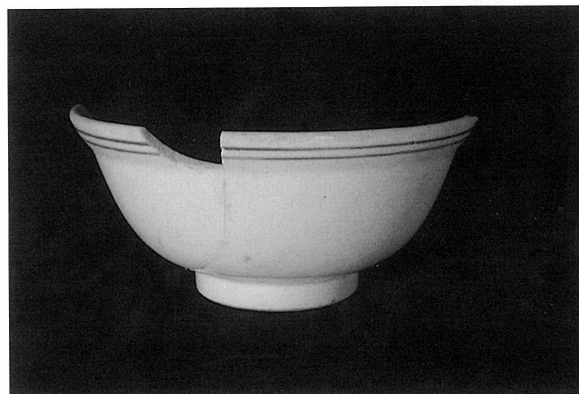
4



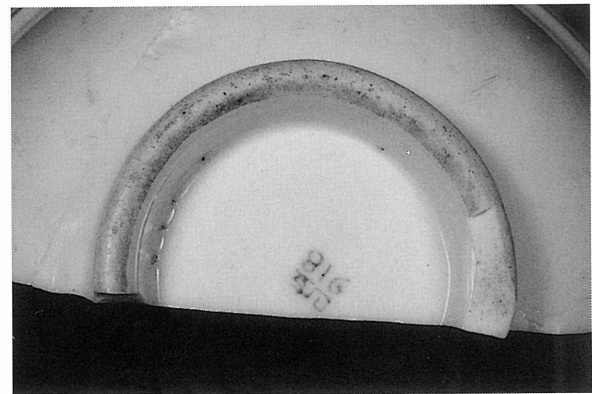
5



6

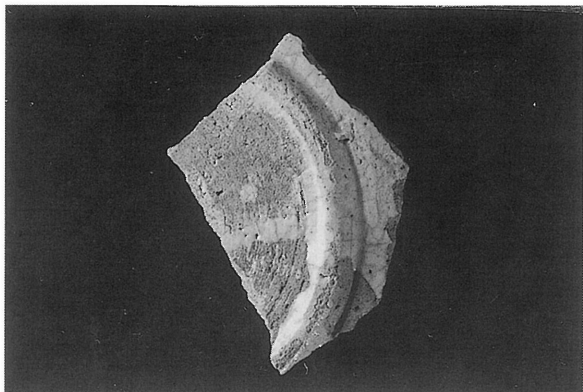


7

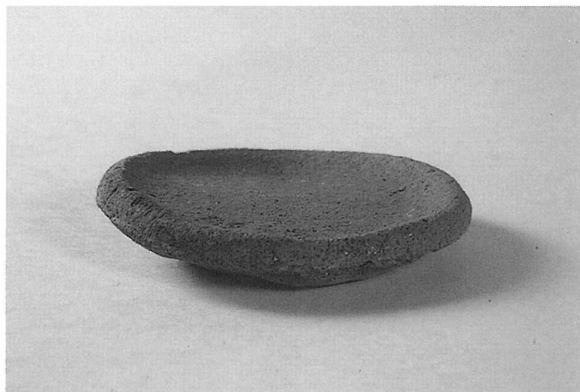


7 (底裏銘)

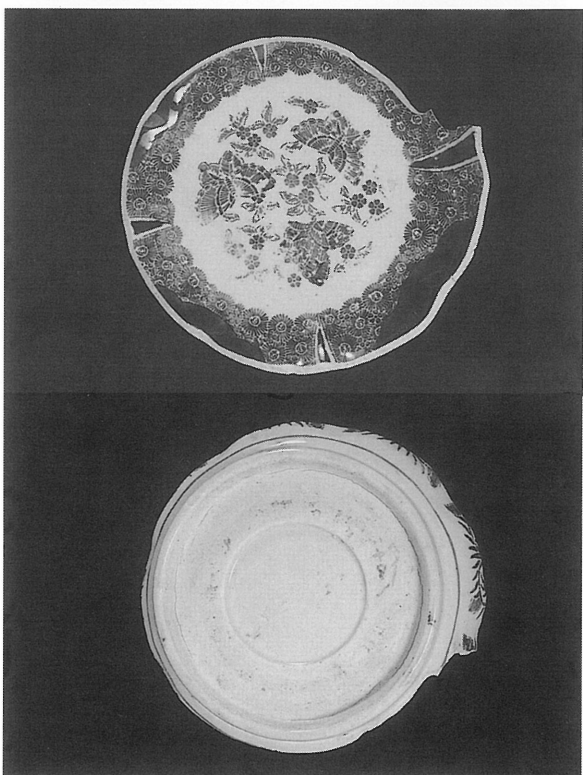
写真図版10



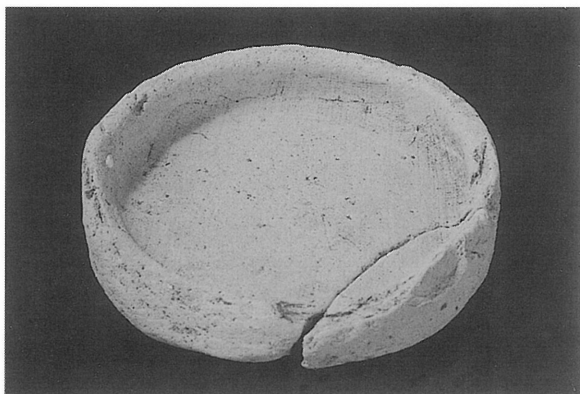
8



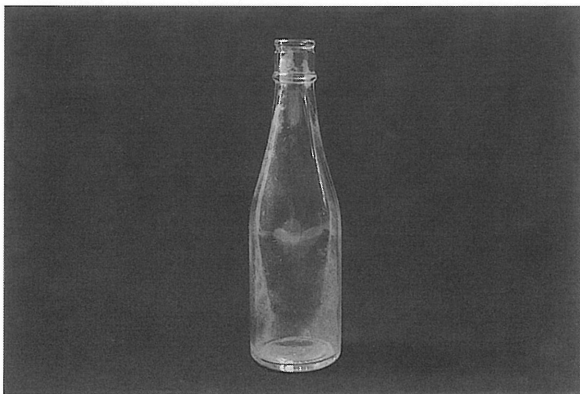
10



9



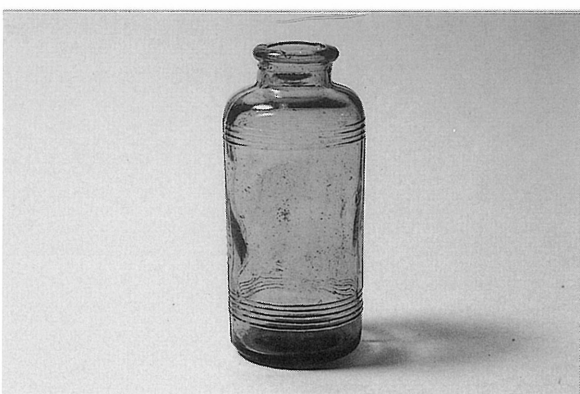
11



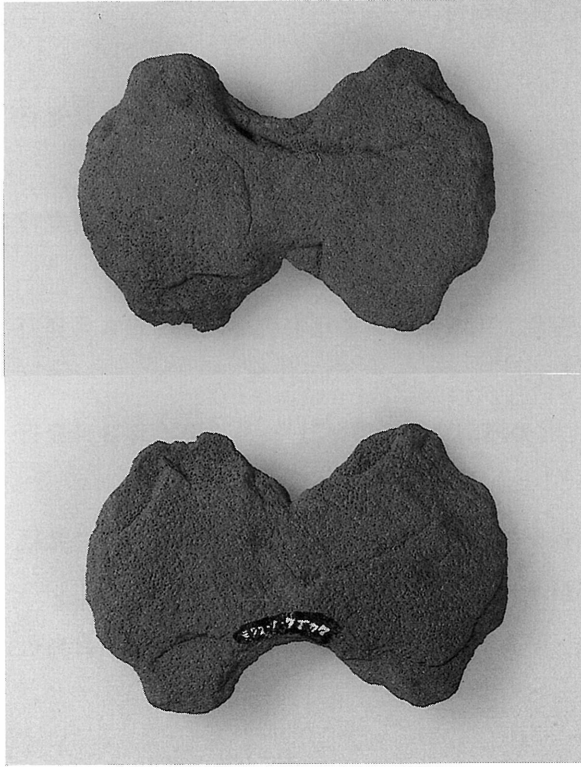
12



9 (底部墨書)



13



14



15

第2次調査出土遺物(3)

水戸市埋蔵文化財調査報告

- 第1集 台渡里廃寺跡－範囲確認調査報告書－ 2005年3月発行
- 第2集 台渡里廃寺跡
－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)－ 2005年4月発行
- 第3集 大鋸町遺跡
－グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 2005年8月発行
- 第4集 台渡里廃寺跡
－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－ 2006年3月発行
- 第5集 台渡里遺跡
－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 2006年3月発行
- 第6集 吉田古墳Ⅰ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の
第1次・第2次発掘調査報告書－ 2006年3月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告 第6集

吉田古墳Ⅰ

－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書－

2006年3月23日 印刷

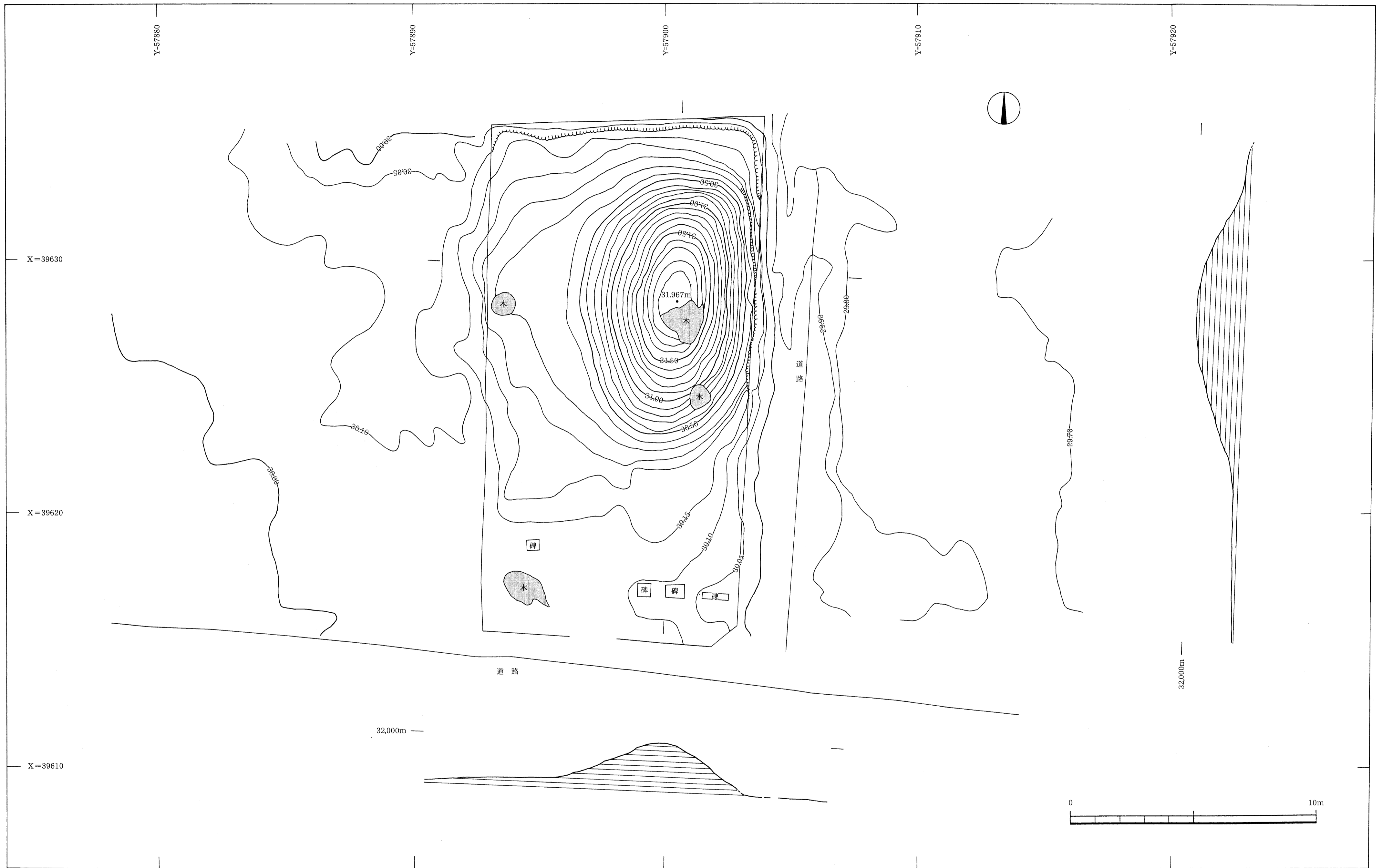
2006年3月24日 発行

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 TEL: 029-224-1111

印刷 コトブキ印刷株式会社

〒310-0851 茨城県水戸市千波町2398-1 TEL: 029-241-1000



『吉田古墳Ⅰ』付図 吉田古墳群第1号墳測量図 (S=1/100)

